
明治の東京を描いた中国詩の集成

研究課題番号 21520376

平成21年度～平成24年度 科学研究費基盤研究 (C)
研究報告書

平成25年3月

研究代表者

小 川 恒 男

(広島大学大学院文学研究科教授)

は し が き

原則として文語定型詩たる中国古典詩は、20世紀に入り「文学革命」(1917)を迎えると、ほぼその歴史的使命を終え、口語による小説や詩、戯曲といったジャンルにその地位を譲らざるを得なかった。したがって、本研究で扱おうとする作品群は、中国古典詩の歴史の中でも最末期に作られたことになる。しかし、中国古典詩は二千年以上の長きにわたり中国文学の中で常に主要な地位を占め続けてきたため、明治維新以後に日本を訪れた多くの中国知識人からしてみれば、自らが得た新しい知見とそこから発せられる様々な思いを託するに足る器としての機能をなお完全には失っていなかったとも言える。彼らは初めて訪れた日本で、それまでの中国の知識人たちが見たことも聞いたこともなかったまったく新しい題材を、好むと好まざるとに関わらず、獲得することになったのである。それは大きく分けて次の二点に集約される。ひとつは、「文明開化」を急速に推し進めつつあった明治日本の姿である。それは日本を介在させた「西洋」との遭遇でもあった。清朝末期の中国でも西洋化は焦眉の急を要する課題となっていたから、明治日本の近代化の成果を中国の人々に知らせることに大きな意味があったはずである。ここに描かれるのは、建ち並ぶ高層建築であったり、郵便制度であったり、選挙制度であったり、近代化された軍隊であったりする。もうひとつは、日本古来の伝統文化である。「同文異種」「一衣帯水」の日本にも中国とは異なる独自の文化が存在するという事実が彼らには驚くべき発見だった。日本語が漢字ばかりでなく「ひらがな」や「カタカナ」を用いて表記されること、正月の門松、春毎に「花見」に狂奔する人々の姿、夏の花火など、中国のそれに似ているようで微妙に異なる日本の風俗や習慣、これら新しい題材を中国古典詩の枠組みの中でどのようにして表現するかが、彼らの創作意欲をかき立てる一要因となったと考えられる。さらに注目すべきは、日清戦争の後に急増する中国人日本留学生たちが、異国の地たる日本にあって、中国人アイデンティティをその根幹から問い直さなければならなかったという事実である。そのため、20世紀初頭に彼ら中国人留学生によって作られた作品には、それまでの伝統的古典詩に見られなかった、新しい抒情を見出すことができる。もちろん、彼らの創作意欲にも関わらず、古典詩の枠組みに収めようとして収まりきらない部分があったからこそ、古典詩はその歴史的使命を終え、いわゆる「近代文学」にバトンタッチせざるを得なかったわけであるから、詩の内容面、表現面に一定の限界が存在したであろうことが予想できる。逆に言えば、その限界こそが「文学革命」の引き金のひとつになったわけであるから、この点を明確にすることは、中国近代文学の成立過程に対する、従来の研究とは異なる角度からのアプローチを図ることになるだろう。

本研究は、日本を訪れた中国人が中国古典詩(漢詩)というスタイルで、明治の東京を描いた作品群を研究対象とし、それらの主題、内容、表現などを総合的に整理・分析し、その集成を目的とする。

郁曼陀の「東京雑事詩」について

小 川 恒 男

はじめに

当時まだ留学生だった魯迅（1881～1936）が東京を離れて仙台へと赴いたのは1904（明治37）年のことである。後、1926年に発表した「藤野先生」には、「東京も同じことだった。上野の桜が満開になったところを遠くから眺めれば、たしかに紅^{くれない}の霞たなびく感があったが、その花の下のあるところには、きまって速成班の『清国留学生』連中がたむろしていて、長い辮髪を頭上にまとめてとぐろを巻かせ、学生帽^{てっぺん}の天辺をこんもりと盛り上げて、富士山にしているのだった。また辮髪を解き、平らにまとめている者もいたが、帽子をとれば髪油でテカテカで、小娘のまげさながら、そのうえ、今にも首をかしげて科を作らんばかりの風情は、なんともはやお見事なものであった。」（立間祥介訳『魯迅全集 3 野草・朝花夕拾・故事新編』 学習研究社 1985）と、自身もそのひとりであったにもかかわらず、「清国留学生」に対する単なる嫌悪感とも言い難い屈折した複雑な思いを述べている。日清戦争（1894～95）から日露戦争（1904～05）にかけての時期、中国人留学生の数が飛躍的に増加した。当初は数名でしかなかったが、1900年の義和団事件後その数は一気に増え、魯迅が来日した1902年には3桁に乗り、彼が東京を離れた頃には数千人の規模となっていた。⁽¹⁾ 魯迅は言わば中国人日本留学生の第一世代に属したのである。「清国留学生」がたむろする東京から逃れるようにして敢えて仙台医学専門学校に進学した魯迅だったが、そこで待ち受けていたのは、「中国は弱国であるから、中国人は当然低能児であり、六十点以上の成績は自分の能力を超えたものである」という訳で、彼らが不審を抱いたのも当然と言えた。」（同上）と述べられるような、日本人による謂われのない蔑視であり偏見であった。彼自身は冷静に大人の対応をせざるを得なかっただろうが、それほど愉快な学生生活を送ることができたとは到底思えない。日本人社会に於ける孤独と「清国留学生」社会に於ける孤立とが彼の「寂寞」をより一層深めることになっただろうことは想像に難くない。

郁達夫（1896～1945）は「沈淪」「春風沈醉的晚上」などいくつかの小説によって知られ、創造社草創期の中心メンバーとして活躍するなど、中国の近代文学を代表する作家のひとりに数えられる。彼も日本留学経験者だが、その来日は1913年のことだった。既に辛亥革命を経ており、日本留学生としては魯迅の次の世代に属する。しかし、1921年の作、「沈淪」の最後は『『ああ祖国。お前がおれを死なせるのだぞ』／『早く豊かになってくれ！ 強くなってくれ』／『お前のもとには、なお多くの苦しみにあえぐ若者たちがいるのだ』』（現代中国文学6『郁達夫・曹禺』 駒田信二訳 河出書房新社 1971）という重苦しいつづやきで締め括られる。彼もまた留学生として魯迅と同じように中国人アイデンティティーの問題に直面し懊悩しなければならなかったのである。「沈淪」など近代小説を執筆したのは別に、郁達夫には旧体詩（中国古典詩）の優れた作があって、『郁達夫詩詞箋注』（詹亜園箋注 上海古籍出版社 2006）のような箋注も出版されており、それほど数は多くないが数篇の先行研究⁽²⁾を見ることもできる。しかし、郁曼陀の名を知る人はあまり多くないかもしれない。

郁達夫は数えて5歳の時に父、郁企曾を喪い、代わって一家を懸命に支えたのはもちろんその母、陸氏であった。けれども、12歳も年の離れた長兄の郁曼陀（1884～1939）が父に代わる存在となっていて、様々な面で郁達夫に大きな影響を与えたことは、郁達夫という作家の誕生にも深く関わっ

ており、けっして見逃すことのできない点である。1913年に留学のために来日したのも、実は郁曼陀が法律制度視察のため日本に派遣されたのに伴われてのことだった。郁曼陀、本名は華、曼陀は字である。浙江省富陽の人。1905（明治38）年に来日し、初め早稲田大学清国留学生部で学び、08年、法政大学専門部法律科に入学、1910年7月に卒業した後、辛亥革命勃発の直前に帰国。本稿で扱う「東京雑事詩」七十三首の大半はこの留学期間中に作られたものである。

郁曼陀の生涯は、本稿が底本とした『郁曼陀陳碧岑詩抄』（郁風編 学林出版社代理出版 1983）の巻頭に置く「郁華烈士伝略」（王昆侖撰、『紅樓夢人物論』で著名）でそのあらましを知ることができる。また、稲葉昭二氏『郁達夫 ^{うた} その青春と詩』（東方書店 1982）も郁曼陀の紹介にかなりの紙幅を割いている。筆者が郁曼陀の名を知ったのも、実は稲葉氏の著作を通してであった。竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』（岩波書店 2006）には「東京雑事詩」其一・十二・三十九・四十三の4首の訳注を載せる。

一

郁曼陀の「東京雑事詩」七十三首はいずれも七言絶句、どの詩にも後に自注がある。但し、第一首と第四首にはもともと自注がなかったようであり、第七十三首には底本に「原注闕」とある。七言絶句に自注を加えるというこの形式は、清初に流行した「外国竹枝詞」の体裁を襲ったものである。「竹枝詞」は、中唐の劉禹錫以後、多くの詩人たちがその土地その土地の人情風俗を描くのに用いた。そして、清初の尤侗（1618～1704）が「外国竹枝詞」百首を作ったことを契機として、中国以外の土地を題材とすることも多くなり一時に流行したようである。⁽³⁾ 尤侗の「外国竹枝詞」は『昭代叢書』に収めるが、我が国でも1785（天明5）年に『昭代叢書』本の覆印が刊行されており、今日では『和刻本漢詩集成』第十八輯（長澤規矩也編 汲古書院 1977）で容易に見ることができる。今一首のみを例として掲げる。

「外国竹枝詞」其一

日出天皇号至尊	日出の天皇 至尊を号し
五畿七道附庸臣	五畿七道 附庸の臣
空伝歴代吾妻鏡	空しく歴代に伝ふ 『吾妻鏡』
大閤終帰木下人	^(ママ) 大 閤 ^{つひ} 終に帰す 木下の人

（自注）隋時致書、自称日出处天子、國中称天皇、以尊為号。有五畿七道、三島附庸国百余。『吾妻鏡』紀本国君臣事蹟。吾妻、島名也。木下人為平秀吉、万曆中篡奪倭国、自号大閤王。（隋の時 書を致し、自ら「日 出づる処の天子」と称し、國中には天皇と称して、^{みこと} 尊を以て号と為す。五畿七道有り、三島に附庸の国 百余。『吾妻鏡』 本国 君臣の事蹟を紀す。吾妻は、島の名なり。木下の人 ^{しる} 平秀吉 ^た 為り、万曆中 倭国を篡奪し、自ら ^(ママ) 大 閤王と号す。）

この詩には黄遵憲（1848～1905）も「日本雑事詩」で言及し尤侗の誤りを指摘する。「日本雑事詩」其二百とその自注に、

「日本雑事詩」其二百

紀事祇聞籌海志	事を紀しては祇だ『籌海志』を聞くのみ
徵文空誦送僧詩	文を徵しては空しく僧を送るの詩を誦するのみ

未曾遍読吾妻鏡　未だ曾て遍くは『吾妻鏡』を読まず
慚付和歌唱竹枝　慚づらくは和歌に付して「竹枝」を唱ひしを

(自注)…。至尤西堂「外国竹枝詞」、日本止二首。然述豊太閤事、已謬不可言。…。(…。尤西堂の「外国竹枝詞」に至りては、日本は止だ二首のみ。然れども豊太閤の事を述ぶるに、已に謬れること言ふべからず。…。)

黄遵憲が「日本雑事詩」を作る際に「外国竹枝詞」を意識していたことは明らかである。郁曼陀の「東京雑事詩」其三十一には、

「東京雑事詩」其三十一

残妝卸後怯春寒　残妝　卸きし後　春の寒きに怯え
偷傍鐙施帯笑看　偷かに鐙施に傍ひ　笑ひを帯びて看る
簾外荔枝紅映肉　簾外　荔枝　紅　肉に映え
動人情処是中單　人の情を動かす処は是れ中單

(自注) 女子襯衣、俗皆尚紅色。中單、『中華古今注』「襯衣也。又名汗衫。」黄公度「日本雑事詩」謂是「禪」、疑別有本。(女子の襯衣、俗　皆な紅色を尚ぶ。中單、『中華古今注』に「襯衣なり。又た汗衫と名づく」と。黄公度「日本雑事詩」　是れ「禪」なりと謂ふ、疑ふらくは別に本づく有るならん。)

との記述があることから、彼が黄遵憲の「日本雑事詩」を読んでおり、明治の日本を描いた先達として強く意識していただろうことが分かる。その意味では郁曼陀も間接的ながら尤侗の「外国竹枝詞」の影響を受けたと言えるだろう。

二

1905年、科举制度が廃止された。郁曼陀が来日した年である。科举の廃止は中国人留学生の増加をもたらした。郁曼陀の日本留学も科举廃止が直接の契機となったようである。しかし、彼は科举受験を前提とする伝統的な教育を受けた。それはつまり詩を作る訓練を積んでいたということである。郁曼陀が「東京雑事詩」七十三首を制作することになった背景に、黄遵憲の「日本雑事詩」からの強い刺激があったと考えられることは前節に述べた。と同時に、彼が受けてきた伝統的教育がその下地にあったのである。「東京雑事詩」其一は七十三首全体の総序として置かれる。

「東京雑事詩」其一

蓬觀蘭台久劫灰　蓬觀・蘭台　久しく劫灰(※「劫灰」、底本作「刼灰」)
金闥空数不凡才　金闥　空しく数ふ　不凡の才
文章衰後劉歆出　文章　衰へし後　劉歆　出で
解記西京雜事来　解く西京の雜事を記し来たる

ここには郁曼陀が「東京雑事詩」を『西京雜記』のような小説類、詩によるエピソード集として捉えていたことが見て取れる。この一連の作品群には終始一貫した構想のようなものは見当たらない。1首ずつ時に応じて自らが選択した題材を作品化していった結果とし

て「東京雑事詩」七十三首はある。この連作は彼の言わば文学趣味を反映したものと見做してよい。

「東京雑事詩」其十四

杜鵑啼血^は洩^{けが}霊衣 杜鵑 血を啼いて 霊衣を洩し
累我青衫^{さむ}淚一揮^{そこ} 我が青衫を累なひて 涙 一たび揮ふ^{ふる}
紅伎囀^{ともしび}燈春^{あんなばん}晩晩 紅伎 燈を囀みて 春 晩晩たり
歌場聴^{うた}唱不如^{うた}帰 歌場に唱を聴くは 帰るに如かず

(自注)『不如帰』、小説名、復有演為戯劇者。見者莫不哀之至。有作歌謳詠之者。(『不如帰』、小説の名、復た演じて戯劇を為す者有り。見る者 哀しまざる莫きに之れ至る。歌謳を作りて之れを詠ふ者有り。)

「東京雑事詩」其三十五

手斟杯酒強君飲 手づから杯酒を斟^くみ 君に飲^しを強ふ
慟哭何堪^な作女冠 慟哭するも 何ぞ堪へん 女冠と作るを
別有淒涼心事在 別に淒涼たる心事の在る有り
背人初読結婚難 人に背きて初めて読む 『結婚難』

(自注)『結婚難』、小説名。俗亦有為尼者、皆有激之者耳。(『結婚難』、小説の名。俗にも亦た有尼と為る者有り、皆な之れに激する者有るのみ。)

上の2首は日本に於ける当時のベストセラー小説を題材とする。「東京雑事詩」其十四に見える『不如帰』は、徳富蘆花の長篇小説。1898(明治31)年11月から翌年5月まで『国民新聞』に連載。1900年1月、民友社刊。明治期屈指のベストセラーである。其三十五に描かれる「結婚難」は徳田秋声の作。1903(明治36)年12月から翌年2月まで「読売新聞」に全60回連載。留学生生活の合間に日本の小説を読む楽しみは、やがて弟の郁達夫にも引き継がれるわけだが、郁曼陀、達夫兄弟には文学への強い関心が共通してあったのである。ただ、郁曼陀が日本での留学生生活を送ったのは、中国近代文学の夜明けとも言える「文学革命」直前の時期であったし、彼が受けてきた伝統的教育からしても、彼の文学趣味が近代小説ではなく、古典詩という形式をとって現われたのもまた当然のことだった。

黄遵憲は初代駐日公使何如璋の参贊官(書記官)として来日したために、日頃交流のあった日本人の多くは明治政府の役人であり漢学者であった。一方の郁曼陀は良くも悪くも一介の留学生に過ぎなかったため、彼の目線は黄遵憲よりももう少し低く、終始都下の市井にあったと言えるだろう。「艶書(其二十五)」「媚薬(其三十二)」などが題材となって描かれるのがその例である。今、媚薬の方を例に挙げる。

「東京雑事詩」其三十二

得食倉庚^{わた}妒可療 倉庚を食ひ得れば 妒^いみ 療やすべし
荒唐物理每疑妖 荒唐の物理 毎に妖なるかと疑ふ
年来莫怪相思苦 年来 相思の苦しむを怪しむ莫かれ
衣底分明有黒焼 衣底 分明 黒焼有り

(自注)市有媚薬曰黒焼。分佩之、令人相思。聞煨守宮等合成者。(市に媚薬の黒焼と曰ふ有

り。分かちて之れを佩ぶれば、人をして相ひ思はしむ。聞く 守宮等を煨^やきて合成せし者と。))

「黒焼^{くろやき}」は薬用とするための動植物を焼いたものだが、俗に井守の黒焼は媚薬^{いもり}として効果があるという。この詩の自注には「市」の語が見える。郁曼陀は市井の人々の暮しを好んで描いた。そこで、上に引いた其三十一もそうであったが、「東京雑事詩」の自注には「市」の他にも「俗」という表現がしばしば見られることになった。⁽⁵⁾「白河夜船」を題材とする詩を挙げる。

「東京雑事詩」其四十九

白河船内夜迢迢 白河 船内 夜 迢迢
空唱刀環慰寂寥 空しく刀環を唱ひて寂寥を慰さむ
忽夢帰船天際去 忽ち帰船の天際に去り
万山風葉落如潮 万山 風葉 落つること潮の如きを夢む

(自注) 昔有遊子夜泊白河中、夢還家歎甚。故俗名睡夢曰「白河夜船」。(昔 遊子有り 夜 白河の中に泊し、夢に家に還り歎ぶこと甚し。故に俗に睡夢に名づけて「白河夜船」と曰ふ。)

また、当時の政治的なスキャンダルを描いた作品もある。

「東京雑事詩」其五

春城帰馬蹴花驕 春城 帰馬 花を蹴^ふみて驕り
回首三台近絳霄 首を回らせば 三台 絳霄に近し
昨夜侍中新拜表 昨夜 侍中 新たに表を拜し
酒家到处売金貂 酒家 到る処 金貂を売る

(自注) 議院開閉、皆以春。今年議員坐貨敗、繫獄者且二十人。(議院の開閉、皆な春を以てす。今年 議員 貨敗に坐し、獄に繋がるる者 且に二十人にならんとす。)

これは、1908 (明治41) 年に発覚した日本製糖汚職事件を題材にする。また、

「東京雑事詩」其二十二

宮禁争伝艶事新 宮禁 争ひて伝ふ 艶事の新たなるを
掖庭麗市号多春 掖庭 麗市 春多きを号す
相公垂老功名重 相公 垂老 功名 重し
金印何堪換美人 金印 何ぞ堪へん美人に換ふるに

(自注) 田中宮相、見少女小林某、惑^{なにかし}之欲為妻。朝議非之、遂掛職去。曰「一宮内大臣足以嚇老夫哉。」(田中宮相、少女小林 某 を見て、之れに惑ひて妻と為さんと欲す。朝議 之れを非とし、遂に職を掛けて去る。曰く「一宮内大臣 以て老夫を嚇^{おど}すに足らんや」と。)

1909 (明治42) 年1月20日付「東京朝日新聞」が、当時67歳だった宮内大臣田中光顕が21歳の小林孝子と結婚する予定であることを報じた。これが引き金となって後に一大スキャンダルへと発展し、結果として田中光顕は宮内大臣罷免の憂き目を見ることになった。し

かし、右に掲げた作品からは、政治を指弾したり批判したりしようとする積極的な意図は特に感じられないように思う。第2句「麗市」、見慣れない語だが、都下の市井を意味するだろう。作品は東京下町に暮らす市井の人々が日々の憂さ晴らしのためにする噂話を題材に、ユーモアを交えた筆致で描き出す。「東京雑事詩」全体を眺めわたしてみても、当時も存在していたはずの東京の街の最底辺に生きねばならなかった貧困層が描かれることはない。「東京雑事詩」七十三首の色調は明るい。

三

先に触れたが、「東京雑事詩」其四には当初から自注がなかったようである。

「東京雑事詩」其四

樹底迷楼画裏人	樹底 迷楼 ^う 画裏の人
金釵沽酒醉余春	金釵 酒を沽る 醉余の春
鞭糸車影恩恩去	鞭糸 車影 恩恩として去り
十里桜花十里塵	十里の桜花 十里の塵

酒を売る美しい女性と花見客の雑踏の様子を描いてなかなか艶やかな内容だが、そもそもお花見なる習慣を持たない中国の人々に、この詩は容易に理解できただろうか。或いは黄遵憲の「日本雑事詩」という先行作品があったために、郁曼陀には詳しい自注を付ける必要が感じられなかったのかもしれない。「日本雑事詩」其百二十二は、

「日本雑事詩」其百二十二

朝曦看到夕陽斜	朝曦より見て夕陽の斜めなるに到り
流水遊龍闌宝車	流水 遊龍 ^や 宝車を闌かはす
宴罷紅雲歌絳雪	宴 罷みて 紅雲に絳雪を歌ひ
東皇第一愛桜花	東皇 第一に桜花を愛す

(自注) 桜花、五大部洲所無。有深紅、有浅絳、亦有白者、一重至八重、爛熳極矣。種類櫻桃、花遠勝之。疑接以他樹、故色相亦変。三月花時、公卿百官、旧皆給假賞花。今亦香車宝馬、士女微逐、挙国若狂也、東人稱為花王。墨江左右、有数百樹、如雪如霞、如錦如茶。…。(桜花、五大部洲に無き所なり。深紅有り、浅絳有り、亦た白き者有り、一重より八重に至るまで、爛熳たること極まれり。種は櫻桃に類するも、花は遠く之れに勝る。疑ふらくは接ぐに他樹を以てす、故に色相も亦た変ぜしかと。三月 花の時、公卿百官、旧と皆な假を給ひて花を賞しき。今も亦た香車・宝馬、士女 微逐し、国を挙げて狂するが若きなり、東人 稱して花王と為す。墨江の左右に、数百樹有り、雪の如く霞の如く、錦の如く茶の如し。…。)

と、自注で桜の花について説明を加え、さらに日本では花見がいかに盛んな行事であるかにまで言及する。黄遵憲は中国の人々を読者として想定しながら「日本雑事詩」を作ったからである。

では、次のような作品はどうだろうか。

「東京雑事詩」其二

飲到屠蘇一歲除	屠蘇を飲み到る 一歳の除
春華荳蔻十三余	春華 荳蔻 十三余
新年依例称遥賀	新年 例に依りて称す 遥かに賀すと

手署同心絵葉書 手づから署す 同心の絵葉書

(自注) 郵片之絵画者曰絵葉書、毎用以賀歳。(郵片の絵画ある者を絵葉書と曰ふ、毎に用ひて以て歳を賀す。)

年賀状を題材とする。実は年賀状を今日と同様に元旦に一斉配達するようになったのは1906年からのことだった。⁽⁶⁾ 明治40年元旦、日本全国津々浦々年賀状が一斉に配達される様は、郁曼陀にとっても目新しい出来事だったはずである。黄遵憲であれば、もう少し詳しい自注を施して年賀状の遣り取りという日本の風習について説明を加え、日本の郵便制度そのものについても中国の読者に対しそれなりの配慮を示したはずである。しかし、郁曼陀はこの点についてまったく言及しようとしな

おわりに

本稿が底本とした『郁曼陀陳碧岑詩抄』は「東京雜事詩」七十三首の末尾に、「右『東京雜事詩』七十三首、曼陀先生留学日本時所作、成於清光緒三十一年乙巳、宣統二年庚戌之間。曾先後在『民吁報』及『南社叢刊』中刊布清艷綺麗一時稱絕。惟『南社叢刊』僅載『東京雜事詩』四十七首、『民吁報』所發表者亦復不全。茲依先生手寫本所錄、全帙附刊於此。(右『東京雜事詩』七十三首は、曼陀先生の日本に留学せし時の作る所にして、清の光緒三十一年乙巳、宣統二年庚戌の間に成る。曾て先後して『民吁報』及び『南社叢刊』中に在りて清艷・綺麗を刊布して一時に絶なるを稱せらる。惟だ『南社叢刊』僅かに『東京雜事詩』四十七首を載せるのみにして、『民吁報』の發表する所の者も亦た復た全からず。茲に先生の手寫本の録する所に依りて、全帙附して此に刊す。)」という葉秋原の識語を載せるものの、不思議なことに日本での掲載誌などについてはまったく触れていない。しかし、稲葉昭二氏の綿密な調査⁽⁷⁾によって、郁曼陀が留学期間中に多くの詩を雑誌などに投稿していたことが既に明らかになっている。郁曼陀の主な投稿先は、総合雑誌「太陽」と漢詩雑誌「随鷗集」であった。「太陽」は1895(明治28)年1月に博文館から創刊された総合雑誌。月刊、四六倍判、本文200ページ、定価15銭。1928(昭和3)年2月、第34巻第2号(通算530冊)まで発行して廃刊。「随鷗集」は随鷗吟社発行の漢詩雑誌。1904(明治37)年創刊。森槐南を主盟、大久保湘南を主幹とした。1937(昭和12)年8月、第394号まで刊行された。今日の日本では新聞や雑誌に短歌、俳句、川柳などの投稿欄がある。同じように、明治・大正期までは「漢詩」の投稿欄もあったし、むしろこちらの方が中心だった。郁曼陀が中国の人々には容易に理解することが難しかったはずの事柄にあまり多くの説明を加えようとしなかったのは、「東京雜事詩」の大半が日本の雑誌に掲載されたものだからである。つまり、郁曼陀は「東京雜事詩」の多くを日本人を読者として作ったのである。

郁曼陀が雑誌に自作の漢詩を投稿しても、必ず採用、掲載されるというわけではなかった。雑誌の投稿欄には選者がいて、その人の眼鏡に合わなければ採用、掲載されない。そういうわけで、郁曼陀は選者の眼鏡に合うように詩を作らざるを得なかった。そのような表現上の工夫にこそ「東京雜事詩」の面白さを見出し得るのではなからうか。右に引いた「東京雜事詩」其二でも詩中に敢えて「絵葉書」というまったくの日本語を取り込んでいる。日本人であればこの語は何の問題もなく理解できたはずだが、「漢詩」という表現形式に於いては本来排除されるべき語でもある。そこで郁曼陀はわざわざ「郵片之絵画者曰絵葉書、毎用以賀歳。」との自注を施した。このような自注の付け方が日本人の漢詩「作法」に合致すると判断したのだろう。「白河夜船」を扱った其四十九でも、日本人には「白河夜船」の意味するところは明らかなのであるから、「昔有遊子夜泊白河中、夢還家歎甚。故俗名睡夢曰『白河夜船』。」は本来なら必要のない自注のように見える。しかし、日本漢詩人たちは、中国に模範としたり模倣したりすることのできる先行作品を持たない、日本独自の風俗なり習慣なりを「漢文」で表現することを楽しんでた。江戸から明治にかけて数多く作られた「日本漢文小説」の存在は、漢学者たちが一般的にこれと同じ欲求と動機を共有していたことの証しなのではないだろうか。彼は、中国人でありながら、中国の詩の模倣を基礎とする日本漢

詩の「作法」に従おうと努めたわけである。それは、中国人でありながら敢えて「和習」を作ることであり、ひいては「日本漢詩」を作ろうとする試みであったと言えるだろう。

「東京雑事詩」の色調は明るい。冒頭に引いた魯迅の「藤野先生」や郁達夫の「沈淪」を覆う何如ともし難い沈鬱な響きは少なくとも見られないように感じられる。両者の色調の違いは、一方が中国古典詩であり、他方が「文学革命」の洗礼を経た中国近代文学であるという、表現形式の相違を反映しているとも言えるだろうし、それぞれの作家が抱え込むことになった文学的な課題の相違が生み出したとも言えるだろうと思う。と同時に、ここで特に強調しておきたいのは、明治から大正にかけての日本にはまだ漢詩を作り、それを読んで楽しむ人々が確実に存在し社会のある層を形成していたことである。郁曼陀も魯迅や郁達夫と同じような謂われのない偏見と蔑視を経験したに違いない。しかし、「日本漢詩」を作ろうという試みによって彼は日本人社会のある層に知己を得ることができたのではなかったろうか。

注

(1) 東アジアのなかの日本歴史9『孫文の革命運動と日本』(俞辛焞 六興出版 1989) 参照。

(2) 郁達夫の旧体詩については次のような先行研究がある。

加藤誠「郁達夫の旧詩について(上)」(『野草』第18号 1976)

加藤誠「郁達夫の旧詩について(下)」(『野草』第20号 1977)

胡金定「郁達夫詩試論」(『阪南論集 人文・自然科学編』29-4 1994)

(3) 清・王士禎『漁洋詩話』に「尤悔菴侗、在史館作『明史樂府』。雖擬李西涯、而往往駕出其上。又常作『外国竹枝』百首。(尤悔菴侗、史館^{かつ}に在りて『明史樂府』を作る。李西涯を擬すと雖も、往往にして駕して其の上に出づ。又た常て『外国竹枝』百首を作る。)」と見える。

(4) 但し、現行の「日本雑事詩」には自注も含めて「褌」字は見えず、「囀^{ゆもじ}」を描いた其百四十一の自注に「褌」字が見えるだけである。郁曼陀の記憶違いではないかと思う。

(5) 「東京雑事詩」七十三首の内、自注に「俗」字が現われる詩とその題材を挙げる。

其六(雛祭)	其十一(皇女)	其十八(端午節)
其二十三(不忍池弁財天)	其二十四(稻荷神社)	其二十五(艶書)
其二十八(腹巻)	其二十九(写真)	其三十一(下着)
其三十五(『結婚難』)	其四十九(白河夜船)	其五十(汽車)
其五十三(自転車)	其六十(日曜日)	其六十二(菊花酒)
其六十六(別嬪)	其六十九(『論語』ブーム)	

(6) 石井研堂『明治事物起源5』(筑摩書房 1997) 交通部「郵便の始め」に「(一六) 年賀状特別扱ひの始め 年賀状が、年末歳首に一時に輻湊し、取り扱ひ上の混雑いはんかたなし。よりてこれを防ぐがために、十二月十五日より、集まるに随ひて一月一日の消印を捺し、これを元旦に配達す。すなはち年賀状特別扱ひなり。明治三十九年末より行ひたるを始めとす。」とある。

(7) 稲葉昭二氏『郁達夫 その青春と詩^{うた}』(東方書店 1982) に載せる「郁曼陀 作品一覧(留日時代)」は、郁曼陀が投稿した詩の題、投稿先雑誌名とその号数などが一覧表になっている。

(8) 日本漢文小説研究会編『日本漢文小説の世界 一紹介と研究一』(白帝社 2005) 参照。

郁曼陀「東京雑事詩」 訳注

はじめに

原則として文語定型詩である中国古典詩は、20世紀に入り「文学革命」（1917）を迎えると、ほぼその歴史的使命を終え、口語による小説や詩、或いは戯曲といったジャンルにその地位を譲ることになった。しかしながら、古典詩が二千年以上の長きにわたり中国文学の中で常に主要な地位を占め続けてきたために、明治維新以後に日本を訪れることになった多くの中国知識人からしてみれば、自らが得た新しい知見とそこから発せられる様々な思いを託す器としての機能を、なお完全には失っていなかったとも言える。文学革命前夜のその時期、彼らは初めて訪れた日本で、それまでの中国の知識人たちが見たことも聞いたこともなかったまったく新しい題材を、好むと好まざるとに関わらず、獲得することになったのである。それは大きく分けて次の二点に集約される。

ひとつは、「文明開化」を急速に推し進めつつあった明治日本の姿である。それは日本を介在させた「西洋」との遭遇でもあった。清朝末期の中国でも西洋化は焦眉の急を要する課題となっていたから、明治日本の近代化の成果を中国の人々に知らせることは大きな意味を持ったはずである。ここに描かれるのは、建ち並ぶ高層建築であったり、郵便制度であったり、政治制度、選挙制度であったり、近代化された軍隊であったりする。

もうひとつは、日本古来の伝統文化である。「同文異種」「一衣帯水」の日本にも中国とは異なる独自の文化が存在するという事実が彼らには驚くべき発見だった。日本語が漢字ばかりでなく「ひらがな」や「カタカナ」を用いて表記されること、正月の門松、春毎に「花見」に狂奔する人々の姿、夏の花火など、中国のそれに似ているようで微妙に異なる日本の風俗や習慣、これら新しい題材を中国古典詩の枠組みの中でどのようにして表現するかが、彼らの創作意欲をかき立てる一要因となったと考えられる。

さらに注目すべきは、日清戦争の後に急増する中国人日本留学生たちが、異国の地たる日本にあって、中国人アイデンティティをその根幹から問い直さなければならなかったという事実である。そのため、20世紀初頭に彼ら中国人留学生によって作られた作品には、それまでの伝統的古典詩に見られなかった、新しい抒情を見出すことができる。もちろん、彼らの創作意欲にも関わらず、古典詩の枠組みに収めようとして収まりきらない部分があったからこそ、古典詩はその歴史的使命を終え、いわゆる「近代文学」にバトンタッチせざるを得なかったわけであるから、詩の内容面、表現面に一定の限界が存在したであろうことが予想できる。逆に言えば、その限界こそが「文学革命」の引き金のひとつになったわけであるから、この点を明確にすることは、中国近代文学の成立過程に対する、従来の研究とは異なる角度からのアプローチを図ることになるだろう。

このように、明治日本を訪れた中国の知識人たちによる作品群は、二つの面で境界線上に位置すると言える。一方では、中国の古典文学と近代文学との境界線上に位置するということであり、もう一方では、中国の側から見ればであるが、言わば辺境の地で作られた作品群であるということである。そのため、従来の中国文学研究では、エア・ポケットのように見過ごされてきた領域だった

のである。

筆者はこれまで1877（明治10）年に初代駐日公使何如璋とともに来日した黄遵憲（1848～1905）の文学を中心に研究を進めてきた。黄遵憲は滞日中の研究成果をもとに日本研究書『日本国志』を執筆しており、その姉妹篇とも言える「日本雑事詩」二百首を中国古典詩のスタイルで完成させている。黄遵憲から約30年後、「日本雑事詩」に倣い、郁曼陀が「東京雑事詩」を作った。

郁曼陀は今から100年ほど前の来日中国人留学生である。郁達夫の長兄として紹介した方が通りがよいかもしれない。本名は華、曼陀は字である。浙江省富陽の人。1905（明治38）年に来日し、初め早稲田大学清国留学生部で学び、08年、法政大学専門部法律科に入学、1910年7月に卒業した後、辛亥革命勃発の直前に帰国。本稿で扱う「東京雑事詩」七十三首の大半はこの留学期間中に作られたものである。

郁曼陀の生涯は、本訳注が底本とした『郁曼陀陳碧岑詩抄』（郁風編 学林出版社代理出版 1983）の巻頭に置く王昆侖撰「郁華烈士伝略」でそのあらましを知ることができる。また、稲葉昭二氏『郁達夫 その青春と詩』（東方書店 1982）も郁曼陀の紹介にかなりの紙幅を割いている。竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』（岩波書店 2006）には「東京雑事詩」其一・十二・三十九・四十三の4首の訳注を載せる。

「東京雑事詩」七十三首其一

【本文及び書き下し】

- 1 蓬觀蘭台久劫灰 蓬觀・蘭台 久しく劫灰（※「劫灰」、底本作「刼灰」）
- 2 金閨空数不凡才 金閨 空しく数ふ 不凡の才
- 3 文章衰後劉歆出 文章 衰へし後 劉歆 出で
- 4 解記西京雜事来 解く西京の雜事を記し来たる

【日本語訳】

- 1 宮中の書庫は戦火のために灰燼となって久しく、
- 2 金馬門で詔を待つ人の中に非凡の才を数え上げようとしても無駄。
- 3 文学が衰えてから劉歆が現われ、
- 4 前漢の様々な出来事を書き残すことができた。

【押韻】「灰」「才」「来」、上平十灰韻。

【語釈】

1 蓬觀蘭台久劫灰 2 金閨空数不凡才

〔蓬觀〕宮中の書庫。『初学記』職官部下・秘書監第九に「芸台蓬觀、魚豢『典略』曰、『芸台、香辟紙魚蠹。故藏書台称芸台蓬觀』。見仙室注中。（芸台蓬觀、魚豢『典略』に曰く、『芸台は、香もて紙魚蠹を辟く。故に藏書台を芸台蓬觀と称す』と。仙室注中に見ゆ。）」と。「仙室注」は

次の「蘭台」の語釈を参照のこと。

[蘭台] こちらも宮廷の書庫。『初学記』職官部下・秘書監第九に「仙室、魚豢『魏略』曰、『蘭台、台也。而秘書署耳』。華嶠『後漢書』曰、『学者称東觀為老氏藏室・道家蓬萊山』。(仙室、魚豢『魏略』に曰く、『蘭台は、台なり。而して秘書署なるのみ』と。華嶠『後漢書』に曰く、『学ぶ者 東觀を称して老氏藏室・道家蓬萊山と為す』と。))」とある。

[劫灰]「劫」、恐らくは「劫」の誤り。「劫灰」は、もともと劫火〔仏教語で、世界の終末に起こる大火〕によって生じた灰。後に戦火、或いは戦火の余燼を意味するようになった。梁・慧皎『高僧伝』訳経上・竺法蘭に、「昔漢武穿昆明池底、得黒灰、問東方朔。朔曰、『不知、可問西域胡人。』後法蘭既至、衆人追以問之、蘭云、『世界終尽、劫火洞焼、此灰是也。』(昔 漢武 昆明池の底を穿ち、黒灰を得て、東方朔に問ふ。朔 曰く、『知らず、西域の胡人に問ふべし』と。後 法蘭 既に至り、衆人 追ひて以て之れを問ふに、蘭 『世界 終尽し、劫火 洞焼す、此の灰 是れなり』と云ふ。))」とある。

[金閨] 金馬門を指す。正式の官に就いていない知識人がここで天子からの命を待つ。梁・江淹「別賦」(『文選』巻十六)に、「金閨之諸彦、蘭台之羣英。(金閨の諸彦、蘭台の羣英。))」とあり、李善注は「金閨、金馬門也。」と言ひ、『史記』滑稽列伝を「金門、宦者署、承明・金馬、著作之庭。東方朔曰、『公孫弘等待詔金馬門。』」と引く。現行の『史記』は「金馬門者、宦者署門也、門傍有銅馬、故謂之曰『金馬門』。(金馬門は、宦者の署門なり、門の傍に銅馬有り、故に之れを謂ひて『金馬門』と曰ふ。))」

3 文章衰後劉歆出 4 解記西京雜事来

[文章衰後] 文学が衰えてから。宋・蘇軾『東坡志林』に「舟中読『文選』、恨其編次無法、去取失当。齊梁文章衰陋、而蕭統尤為卑弱、『文選』序」斯可見矣。(舟中に『文選』を読み、恨其の編次に法無く、去取に当を失ふを恨む。齊梁 文章 衰陋して、而蕭統 尤も卑弱為るは、『文選』序」に斯れ見るべし。))」とある。

[劉歆] ?～23。前漢末から新にかけての学者。劉向の子。字は子駿。後に名を秀、字を穎叔と改めた。父向の事業を引き継いで漢王室の図書目録である『七略』を完成させた。彼は古文学を主張し、今文学派と激しく争った。王莽は歆を重用し国師の地位を与えた。しかし、後に王莽がその三子を殺したのを恨み、王莽の謀殺を企てるも失敗し、自殺した。『漢書』に伝がある。

[西京雜事]「西京」は東京である洛陽に対して長安をいう。ここは長安に都を置いた前漢のこと。ここは劉歆の撰した『西京雜記』をいう。『西京雜記』は、前漢時代の首都長安をめぐる逸話や逸聞を集めた書。作者について諸説あるが、西晋・葛洪(283～343?)「『西京雜記』跋」に「洪家世有劉子駿『漢書』一百卷。無首尾・題目、但以甲乙丙丁紀其卷数。先父伝之。歆欲撰『漢書』編録漢事、未得締構而亡。故書無宗本、止雜記而已、失前後之次無事類之辨。後好事者、以意次第之、始甲終癸為十秩。秩十卷合為百卷。洪家具有其書。試以此記考校班固所作、殆是全取劉書有小異同耳、并固所不取不過二万許言。今抄出為二卷名曰『西京雜記』。(洪の家 世よ劉子駿の『漢書』一百卷有り。首尾・題目無く、但だ甲乙丙丁を以て其の卷数を紀すのみ。先父 之

れを伝ふ。歆 『漢書』を撰して漢の事を編録せんと欲するも、未だ締構を得ずして亡^うす。故に書に宗本無く、止^ただ雑記なるのみにして、前後の次を失ひ事類の辨無し。後^{のち} 事を好む者、意を以て之れを次第し、甲より始め癸に終へ十秩と為す。秩十卷 合はせて百卷と為す。洪の家^{つぶ} 具さに其の書有り。試みに此の記を以て班固の作る所と考校するに、殆^{ほとん}ど是れ全く劉の書より取りて小異同有るのみにして、並びに固の取らざる所は二万許言に過ぎず。今 抄出して二卷と為し名づけて『西京雜記』と曰ふ。）」と元々は劉歆の撰だったとする説が見える。

「東京雜事詩」全体の序。この詩にはもともと「自注」がなかったようである。郁曼陀が「東京雜事詩」を『西京雜記』のような小説類、詩によるエピソード集として捉えていたことが窺える。そのため、この七十三首連作には終始一貫した構想のようなものは見当たらない。黄遵憲が「日本雜事詩」を詩による日本論として位置付けていたのとは対照的である。「日本雜事詩」は『日本国志』の姉妹篇として構想されたため、二百首全体を ①国勢 ②天文 ③地理 ④政治 ⑤文学 ⑥風俗 ⑦服飾 ⑧技芸 ⑨物産 の順序で分類でき、この構成は『日本国志』とほとんど同じになっている。

「東京雜事詩」七十三首其二

【本文及び書き下し】

- 1 飲到屠蘇一歲除 屠蘇を飲み到る 一歳の除
- 2 春華荳蔻十三余 春華 荳蔻 十三の余
- 3 新年依例称遥賀 新年 例に依りて称す 遥かに賀すと
- 4 手署同心絵葉書 手づから署す 同心の絵葉書

（自注）郵片之絵画者曰絵葉書、毎用以賀歳。（郵片の絵画ある者を絵葉書と曰ふ、毎に用ひて以て歳を賀す。）

【日本語訳】

- 1 お屠蘇を飲んで大晦日を迎えたのは、
- 2 春の花のような少女、年の頃は十三、四。
- 3 年が明けると慣例に従って賀状が届く。
- 4 どれも「おめでとう」と手書きされた絵葉書。

（自注）葉書で絵の描いてあるのを絵葉書といって、毎年新年を祝うのに用いる。

【押韻】「除」「余」「書」、上平六魚韻。

【語釈】

1 飲到屠蘇一歲除 2 春華荳蔻十三余

〔屠蘇〕薬酒の名。「屠酥」とも。南朝梁・宗懐『荊楚歳時記』に「〔正月一日〕長幼悉正衣冠、

以次拝賀。進椒柏酒、飲桃湯、進屠蘇酒・膠牙餠……凡飲酒次第從小起。（〔正月一日〕長幼悉く衣冠を正し、次を以て拝賀す。椒柏酒を進め、桃湯を飲み、屠蘇酒・膠牙餠を進め、……、凡そ飲酒の次第は小より起む。）と見える。屠蘇については、青木正児『中華名物考』（今、『青木正児全集』第八巻 1971 春秋社）に収める「屠蘇考」に詳しい。

[一歳除] 大晦日の夜。北宋・王安石「元日」に「爆竹声中一歳除、春風送暖入屠蘇（爆竹 声中一歳の除、春風 暖を送りて屠蘇に入らしむ）」とあるのを踏まえる。

[春華] 年若い、青春の頃。蘇武の作とされる「詩」（『文選』巻二十九、『玉台新詠』巻一）に「努力愛春華、莫忘歡樂時（努力して春華を愛し、歡樂の時を忘るる莫かれ）」とあり、李善注に「春華、少き時に喩ふなり。」とある。

[荳蔻十三余] 「荳蔻」、植物名。ズク。初夏、淡紅色の花が咲く。ここは、唐・杜牧「贈別二首」其一の「娉娉裊裊十三余、荳蔻梢頭二月初（娉娉裊裊たり 十三余、荳蔻の梢頭 二月の初め）」という表現を踏まえ、年若い女性を指す。明・楊慎『升菴詩話』巻九「荳蔻」に、

杜牧之詩「娉娉裊裊十三余、荳蔻梢頭二月初」。劉孟熙謂、『本草』云『荳蔻未開者、謂之含胎花』。言少而娠也。」其所引『本草』是言少而娠、非也。且牧之詩、本詠娉女、言其美而且少、未經事人、如荳蔻花之未開耳。此為風情言、非為求嗣言也。若倡而娠、人方厭之、以為綠葉成陰矣。何事入詠乎。（杜牧之の詩に「娉娉裊裊たり 十三余、荳蔻の梢頭 二月の初め」と。劉孟熙 謂ふ、『本草』に『荳蔻の未だ開かざる者、之れを含胎花と謂ふ』と云ふ。少くして娠むを言ふなり」と。其の引く所の『本草』 是れ少くして娠むを言ふは、非なり。且つ牧之の詩、本と娉女を詠じ、其の美しくして且つ少く、未だ人に事ふるを経ざること、荳蔻の花の未だ開かざるが如きを言ふのみ。此れ風情の言為りて、嗣を求むるの言為るに非ざるなり。若し倡にして娠めば、人 方に之れを厭ひ、以て綠葉成陰と為さん。何事ぞ詠に入らんや。）

という。劉孟熙は明・劉績。楊慎が引くのは『霏雪錄』巻上に見える記事。「綠葉成陰」は同じく杜牧の「嘆花」詩に基づく語で、青春の頃を過ぎた女性が幾人かの子の母になることをいう。

3 新年依例称遥賀 4 手署同心絵葉書

[遥賀] 遠く離れたところからお祝いを述べる。唐・白居易「宣州崔大夫閣老忽以近詩数十首見示。吟諷之下窃有所喜。因成長句寄題郡齋（宣州の崔大夫閣老 忽ち近詩数十首を以て示さる。吟諷の下 窃かに喜ぶ所有り。因りて長句を成して郡齋に寄題す）」詩に「再喜宣城章句動、飛觴遥賀敬亭山（再び宣城章句の動くを喜び、觴を飛ばして遥かに賀す 敬亭山）」と見える。ここは年賀状に「おめでとう」としたためること。

[同心] 心をひとつにする。『易』繫辭伝上に「二人同心、其利断金。同心之言、其臭如蘭。（二人 心を同じくすれば、其の利 金を断つ。同心の言は、其の臭ひ 蘭の如し。）」とある。石井研堂『明治事物起源 5』（筑摩書房 1997）交通部「郵便の始め」に「（一六）年賀状特別扱ひの始め 年賀状が、年末歳首に一時に輻湊し、取り扱ひ上の混雑いはんかたなし。よりてこれを防ぐがために、十二月十五日より、集まるに随ひて一月一日の消印を捺し、これを元旦に配達

す。すなはち年賀状特別扱ひなり。明治三十九年末より行ひたるを始めとす。」とあるように、実は年賀状を今日と同様に元旦に一斉配達するようになったのは1906年からのことだった。明治40年元旦、日本全国津々浦々年賀状が一斉に配達される様は、郁曼陀にとっても目新しい出来事だったはずである。

[絵葉書] 通常の郵便葉書は1873（明治6）年から使用が認められた。上にも引いた『明治事物起源5』交通部「郵便の始め」に「(五) 郵便はがきの名付け親 前島密の『鴻爪痕』に、大蔵省五等出仕にて、紙幣局印刷部の監督なりし青江秀は、駅通権正前島密の旧友なり。その者の案にて、西洋のポストカードを、はがきの名とす。…（中略）…。郵便はがきの創始時代の現物には、いづれも『郵便はがき』または『郵便はがき印紙』など印記され、公文書類には、『はがき紙』『端書』『葉書』など、色々に書き、一定せる名はなかりし。」と見え、この語が翻訳和製漢語であるらしいことが分かる。絵葉書は1900（明治33）年10月、逓信省令によって私製葉書の発行が認められ、日露戦争期には逓信省が「戦役記念」絵葉書を発行するなど、絵葉書ブームが最高潮に達したそうである。

(自注)

[郵片] はがき。現代中国語では「明信片」。『漢語大詞典』は郭沫若『喀爾美蘿姑娘』に「你只要我偶爾写張郵片来告你以安否。」とあるのを引く。『喀爾美蘿姑娘（キャラメル娘）』は1924年の作。

「東京雑事詩」七十三首其三

【本文及び書き下し】

- 1 女牀星座聚天垣 女牀の星座 天垣に聚まり
- 2 表体装成寿至尊 表体 装 成りて 至尊を 寿ぐ
- 3 宮帽簪花春宴罷 宮帽 花を 簪して 春宴 罷み
- 4 小車輿夢過端門 小車輿 夢に端門を過ぐ

(自注) 表体装、女子夜会服也。微袒及肩。参謁時衣之。(表体装、女子の夜会服なり。微かに袒ぎて肩に及ぶ。参謁の時 之れを衣る。)

【日本語訳】

- 1 女牀の星々が天市垣につどうように、貴婦人方が宮中に集まり、
- 2 イブニングドレスを身にまとして、やんごとなきお方の長命をお祝いする。
- 3 新年祝賀の儀が終わると、帽子に花を挿した人々が、
- 4 馬車に乗り、夢のように星の門を通り過ぎていく。

(自注) 「表体装」は女性の夜会服である。肩まで露わになっている。参謁の時に着る。

【押韻】「垣」「尊」「門」、上平十三元韻。

【語釈】

1 女牀星座聚天垣 2 表体装成寿至尊

〔女牀〕^{せいしう} 星宿の名。星宿は星座。『晋書』天文志上に「女牀三星、在紀星北、後宮御也。主女事。

（女牀三星、紀星の北に在り、後宮の御なり。女事を^{つかさど}主る。）」とある。ここは宮中を訪れた女性たち。

〔天垣〕天市垣。三垣の一。中国古代では天球を北極星を中心として紫微垣（中垣）・太微垣（上垣）・天市垣（下垣）の三つの区域に区分した。三垣は紫微垣・太微垣・天市垣の総称。女牀は天市垣に属する。ここは宮中の意で用いる。

〔表体装〕自注にあるように女性の夜会服。イブニングドレス。現代中国語では「晚礼服」。「表体装」の語が何に拠るのかは未詳。郁曼陀の造語かもしれない。

〔寿〕長命を祝福する。

3 宮帽簪花春宴罷 4 小車輿夢過端門

〔宮帽〕宮中でかぶる帽子。宋・周必大「次韻楊廷秀待制瑞香花」詩に「禁庭侍史今同宿、宮帽花枝故自^{もと}簪（禁庭の侍史 今 宿を同じくし、宮帽の花枝 故より自ら簪たり）」と見える。

〔簪花〕花の咲いた枝で冠を髪に留める。『宋史』礼志十五・嘉礼三・聖節に、「是日早、文武百僚並簪花赴文德殿立班、聽宣慶寿赦。（是の日の^{あした}早、文武百僚 並びに花を^{かんざ}簪し文德殿に赴きて立班し、慶寿の赦を^{のたま}宣ふを聴く。）」とある。

〔春宴〕春の宴。ここは宮中での新年祝賀会。

〔小車輿〕小さめの車や輿。ここは馬車のこと。『論語』為政篇に「大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。（大車に^{げい}輓無く、小車に^{げつ}軌無くんば、其れ何を以てか之れを行らんや。）」とあり、『集解』は包咸を引いて「大車、牛車。輓者輓端横木以縛輓。小車、駟馬車。軌者輓端上曲鉤衡。

（大車は、牛車。輓なる者は輓端の横木にして以て縛輓を縛るなり。小車は、駟馬車。軌なる者は、輓端の上曲に衡を^か鉤くるなり。）」という。

〔端門〕宮殿の南にある正門。『史記』呂太后本紀に「代王即夕入未央宮、有謁者十人持戟衛端門。

（代王 即夕 未央宮に入るに、謁者十人有り戟を持ちて端門を^{まも}衛る。）」と見える。また、太微垣の南側にある左執法と右執法という二つの星の間を「端門」という。『晋書』天文志上に「太微、天子庭也、…（中略）…、南蕃中二星間曰端門。東曰左執法、廷尉之象也。西曰右執法、御史大夫之象也。（太微、天子の庭なり、…（中略）…、南蕃中の二星の間を端門と曰ふ。東を左執法と曰ふは、廷尉を之れ^{かたど}象るなり。西を右執法と曰ふは、御史大夫を之れ象るなり。）」とある。

日本人の服装に対する興味は黄遵憲「日本雜事詩」でも顕著である。例えば其三十四では、「肘挾氎冠挿錦貂、肩盤金縷繫紅綃（肘に氎冠の錦貂を挿したるを^さ挟み、肩に金縷の紅綃を^{さしはさ}繫ぐを^る盤らす）」と朝賀の際に着用される大礼服の様子を描く。

「東京雑事詩」七十三首其四

【本文及び書き下し】

- 1 樹底迷楼画裏人 樹底の迷楼 画裏の人
2 金釵沽酒醉余春 金釵 酒を沽る 醉余の春
3 鞭糸車影忽忽去 鞭糸 車影 ^{そうそう}忽忽として去る
4 十里桜花十里塵 十里の桜花 十里の塵

(自注) 原闕

【日本語訳】

- 1 樹の下に設けられた茶店で絵の中の人のように美人が、
2 金の髪飾りを着けて酒を売っている、酔いも醒めやらぬこの春。
3 馬車が慌ただしく行き交うので、
4 十里も続く桜並木に十里の塵が舞い上がる。

【押韻】「人」「春」「塵」、上平十一真韻。

【語釈】

1 樹底迷楼画裏人 2 金釵沽酒醉余春

[迷楼] 隋の煬帝が建てた楼の名。江蘇省揚州市西北の郊外にあった。唐・佚名『迷楼記』（今、李時人編校『全唐五代小説』 陝西人民出版社 1998、に拠る。）に「凡役夫数万、経歳而成。楼閣高下、軒窗掩映。幽戸・曲室、玉欄・朱楯、互相連属、回環四合、曲屋自通。…（中略）…。人誤入者、雖終日不能出。帝幸之大喜、顧左右曰、『使真仙遊其中、亦当自迷也。可目之曰迷楼。』（凡そ役夫 数万、歳を経て成る。楼閣 高下し、軒窗 掩映す。幽戸・曲室、玉欄・朱楯、互相に連属し、回環して四合し、曲屋 自ら通ず。…（中略）…。人 誤りて入れば、終日と雖も出づる能はず。帝 之れに ^{みゆき}幸して大いに喜び、左右を顧みて曰く、『真仙をして其の中に遊ばしむるも、亦た当に自ら迷ふべきなり。之れを目して迷楼と曰ふべし』と。）とある。後には妓楼の意でも用いるようになった。ここはお花見のために設けられた茶店。

[金釵] 髪に挿す部分が二股になっている黄金の髪飾り。転じて美女の意。南朝宋・鮑照「擬行路難」十八首其九に「還君金釵玳瑁簪、不忍見之益愁思（君に金釵・玳瑁の簪を還す、忍びず 之れを見て愁思を益すに）」とあるが『玉台新詠』卷九は「金」を「玉」に、「愁」を「悲」に作る。
[沽酒] 酒を売る。唐・劉禹錫「百花行」に「無人不沽酒、何処不聞樂（人の酒を沽らざる無く、何れの処か樂を聞かざる）」と。

[醉余] 酔後。酒の酔いがまだ醒めやらぬ頃。明・王世貞「同年故劉侍御德純、枉駕行營、對酌有感往事、因贈劉戍窮辺始歸」詩に「戍楼談後月、野店醉余春（戍楼 談後の月、野店 酔余の春）」と。

3 鞭糸車影忽忽去 4 十里桜花十里塵

[鞭糸車影] 鞭糸は馬を操るのに用いる鞭。南宋・陸游「齊天樂・左綿道中」詞に「塞月征塵、鞭糸帽影、常把流年虚占（塞月 征塵、鞭糸 帽影、常に流年を把りて虚しく占ふ）」、また「乍晴出游」詩に「本借微風欹帽影、却乘新暖弄鞭糸（本と微風を借りて帽影を^{そばだ}てんとするも、却^{かへ}って新暖に乗じて鞭糸を弄ぶ）」などとあることから、「鞭糸帽影」で仕官や遊学のために故郷を離れて旅をすることをいうようになった。ここは道を行き交う馬車を描写するのに洒落て用いる。

[忽忽去] 慌ただしく立ち去る。宋・蘇軾「^{てう}刁同年草堂」詩に「主人不用忽忽去、正是紅梅着子（主人 用て忽忽として去るなかれ、正に是れ紅梅 ^み子を着くる時）」と。

[十里塵] 人や車の雑踏が十里も続く。唐・方干「獻王大夫二首」其二に「功成猶自更行春、塞路旌旗十里塵（功 ^{な ほ}成りて 猶自 更に行春すれば、路を塞ぐの旌旗 十里の塵）」と。

花見については黄遵憲も、『日本国志』礼俗志三・游宴・賞花にやや詳しい説明をしているばかりでなく、「日本雜事詩」其百二十二、百二十三、「不忍池晚遊詩」其七（本誌第6号掲載「黄遵憲『不忍池晚遊詩』訳注（二）」参照）で取り上げ、また「桜花歌」という詩も作っている。『大河内文書』（さねとうけいしゅう編訳 平凡社東洋文庫 1964）には黄遵憲も参加した「向島の花見」の様が描かれる。『文人外交官の明治日本 中国初代駐日公使団の異文化体験』（張偉雄 柏書房 1999）第二部第二章「桜文化論」に詳しい。

「東京雜事詩」七十三首其五

【本文及び書き下し】

- 1 春城帰馬蹴花驕 春城 帰馬 花を^ふ蹴みて驕り
- 2 回首三台近絳霄 ^{かうべ}首を^{めぐ}回らせば 三台 絳霄に近し
- 3 昨夜侍中新拝表 昨夜 侍中 新たに拝表す
- 4 酒家到处売金貂 酒家 到る処 金貂を売ると

（自注）議院開閉、皆以春。今年議員坐貨敗、繫獄者且二十人。（議院の開閉、皆な春を以てす。

今年 議員 貨敗に坐し、獄に繋がるる者 且に二十人にならんとす。）

【日本語訳】

- 1 帝国議会からお帰りになる馬は居丈高に花を踏んで走っていくが、
- 2 振り返ってみれば、三台の星々が天の極に近寄っている。
- 3 昨夜、侍中が上奏したばかり、
- 4 料亭ではあちらこちらで収賄が行われています、と。

（自注）議院の会期は始まるのも終わるのも春である。今年、議員が収賄の罪に問われ、獄に繋がれた者が二十人近くいる。

【押韻】「驕」「霄」「貂」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 春城帰馬蹴花驕 2 回首三台近絳霄

〔春城〕春の都市。ここは自注に「議院開閉、皆以春。」とあるのからすると、帝国議会の意で用いる。現在の国会議事堂は1936（昭和11）年竣工。「東京雑事詩」が作られた明治末年の頃は、霞ヶ関の仮議事堂で貴族院、衆議院が開かれていた。

〔蹴花〕花を踏む。陸游「昭君怨」詞に「簾外蹴花双燕、簾下有人同見（簾外 花を蹴るの双燕、簾下 人の同に見る有り）」とある。多く燕が枝から枝へ飛び移る様を描くの用に用いられるが、ここは馬車が慌ただしく走り抜ける様を描く。

〔三台〕星官の名。『晋書』天文志上に「三台六星、兩兩而居、起文昌、列抵太微。一曰天柱、三公之位也。在人曰三公、在天曰三台、主開德宣符也。（三台の六星、兩兩として居り、文昌より起こりて、列 太微に^{いた}抵る。一に天柱と曰ひ、三公の位なり。人に在りては三公と曰ひ、天に在りては三台と曰ひ、開德宣符を^{つかさど}主るなり。）」とあるように、古来「三公」になぞらえられ、ここも明治政府の高位高官を指している。

〔絳霄〕空の最も高い辺り。明・王達『蠡海集』天文類に「天之色蒼蒼然也。而前輩曰丹霄、曰絳霄、河漢曰銀河、可也。而曰絳河、蓋觀天者以北極為標準、所仰視而見者、皆在於北極之南、故稱之曰丹、曰絳、借南之色以為喻也。（天の色は蒼蒼然たるなり。而も前輩の丹霄と曰ひ、絳霄と曰ひ、河漢を銀河と曰ふは、可なり。而も絳河と曰ふは、蓋し天を觀る者 北極を以て標準と為せば、仰視して見る所の者は、皆な北極の南に在り、故に之れを稱して丹と曰ひ、絳と曰ふは、南の色を借りて以て^{たと}喻へと為すならん。）」とある。ここは皇居を指すのだろう。

3 昨夜侍中新拝表 4 酒家到处売金貂

〔侍中〕中国古代の官名。天子の側近に侍する役。

〔拝表〕臣下が君主に文書を奉る。魏・曹植「上責躬応詔詩表」（『文選』卷二十）に「謹拝表并献詩二篇。（謹みて拝表し^{あは}并せて詩二篇を献ず。）」と。

〔金貂〕天子の側近が冠につける飾り。潘岳「秋興賦」（『文選』卷十三）に「登春台之熙熙兮、珥金貂之炯炯。（春台の熙熙たるに登り、^{きむてう}金貂の^{けいけい}炯炯たるを^{さしはさ}珥む。）」とあり、李善注は『漢書』、谷永対詔曰、『戴金貂之飾、執常伯之職也。』董巴『輿服志』曰、『侍中冠金璫、附蟬為文、貂尾為飾。』（『漢書』に、谷永^{みことのり}詔^{こた}に^{こた}対へて曰く、『金貂の飾を^{いただ}戴き、常伯の職を執るなり』と。董巴『輿服志』に曰く、『侍中は^{きむたう}金璫を冠し、蟬を附けて文と為し、貂尾を飾と為す』と。）とする。また、『晋書』阮孚伝に「遷黃門侍郎・散騎常侍。嘗以金貂換酒、復為所司彈劾、帝有之。（黃門侍郎・散騎常侍に遷る。^{つね}嘗に金貂を以て酒に換へ、復た所司に弾劾せらるるも、帝^{ゆる}之れを宥す。）」とあり、後に「金貂換酒」の語で文人の放埒な行為をいうようになったが、ここは自注にあるとおり、政府高官の汚職をいう。

（自注）

〔坐貨敗〕 収賄の罪に問われること。明・湛若水「成均觀善録序」（『四庫全書』所収『欽定国子監志』卷五十九芸文三）に「毋以貨敗官。（貨を以て官を敗る^な毋かれ。）」と見える。「貨」は賄賂の意。『韓非子』亡徴に「官職 重を以て求むべく、爵禄 貨を以て得べき者、亡ぶべきなり。」と見える。「敗官」は官でありながら不正をなすこと。『春秋左氏伝』昭公十四年に「己惡而掠美為昏、貪以敗官為墨、殺人不忌為賊。（己 惡にして美を掠^{かす}むるを昏と為し、貪^{むさぼ}りて以て官を敗るを墨と為し、人を殺して忌^いまざるを賊と為す。）」とある。ここで郁曼陀が言及しているのは「日本製糖汚職事件」である。1908（明治41）年4月、日本製糖が帳簿操作で不正金を捻出して衆議院議員20名を買収した事実を、取締役秋山一裕自供して事件が発覚した。

「東京雑事詩」七十三首其六

【本文及び書き下し】

- 1 恒星見後数年華 恒星の^{あらは}見れし後 年華を数へ
- 2 曆日推尋有歳差 曆日 推尋すれば 歳差有り
- 3 兒女家家雛祭早 兒女 家家^{ひなまつり}雛祭 早く
- 4 禁城二月売桃花 禁城 二月 桃花を売る

（自注）旧俗、三月三日、女子以桃花・白酒祭土偶人、曰雛祭、謂之女兒節。今改用太陽曆、適旧曆二月耳。時無桃花、均用唐花法蒔之。（旧俗に、三月三日、女子 桃花・白酒^{しろざけ}を以て土偶人を祭るを、雛祭と曰ひ、之れを女兒節と謂ふ。今 改めて太陽曆を用ひ、旧 曆^{（ママ）} 二月に^あ適ふのみ。時に桃花無ければ、均しく唐花の法を用ひて之れを^う蒔う。）

【日本語訳】

- 1 太陽曆を採用してから歳月を経て、
- 2 時節を探てみるとズレを生じていた。
- 3 若い娘さんたちが家々で雛を祭るけれども少し早すぎて、
- 4 都では二月だというのに桃の花を売っている。

（自注）旧来の習俗では、三月三日に、若い女性が桃の花・白酒で人形を祭り、「ひなまつり」といい、女の子の節句という。今は太陽曆を用いるようになっているが、旧曆の二月に当たるのである。この時期には桃の花がないので、いずれも温室を用いて栽培している。

【押韻】「華」「差」「花」、下平六麻韻。

【語釈】

1 恒星見後数年華 2 曆日推尋有歳差

〔恒星〕 夜空の星の内、見掛けの相対的な位置をほとんど変えず、星座を形づくる天体。語は、古く『春秋経』莊公七年に「夏、四月辛卯、夜、恒星不見。（夏、四月辛卯、夜、恒星 見え

ず。)」と見え、杜預注に「恒、常也。謂常見之星也。(恒は、常なり。常見の星を謂ふなり。)」とある。一句、太陽暦が採用されてから数年を経たことをいう。

[年華] 歲月。唐・許稷「閏月定四時」詩に「乍覺年華改、翻憐物候遲（乍ち覺ゆ 年華の改まる、翻^{かへ}って憐れむ 物候の遅きを）」とある。一句、太陽暦が採用されてから数年を経たことをいう。日本で太陽暦が採用されたのは1873（明治6）年。黄遵憲も「日本雜事詩」其十四に「紀年史創春王月、改朔書焚夏小正。四十余周伝甲子、竟占龜兆得横庚（紀年 史は創む 春 王の月、改朔 書は焚く 夏小正。四十余周 甲子を伝へ、竟に龜兆を占って横庚を得たり）」と我が国の改暦について詠う。中国で太陽暦が採用されたのは辛亥革命以降のことであった。

[曆日] もとはこよみのことだったが、後に時節、季節の移り変わりの節目をいうようになった。

『周礼』春官・馮相氏に「掌十有二歳・十有二月・十有二辰・十日・二十有八星之位、辨其叙事、以会天位。（十有二歳・十有二月・十有二辰・十日・二十有八星の位を 掌^{つかさど}り、其の叙事を辨じ、以て天位を会す。）」とあり、鄭玄注に「会天位者、合此歳日月辰星宿五者、以為時事之候、若今曆日大歳在某月、某日某甲朔日直某也。（天位を会すとは、此の歳・日・月・辰・星宿の五者を合はせて、以て時事の候を為し、今の曆日の大歳 某月に在り、某日某甲 朔日某に直たるが若きなり。）」とある。また、白居易「十二月二十三日作、兼呈晦叔」詩に「案頭曆日雖未尽、向後唯残六七行（案頭 曆日 未だ尽きずと雖も、向後 唯だ六七行を残すのみ）」とある。

[推尋] 追求する。探求する。漢・蔡邕「文恭侯胡公碑」に「率慕『黄鳥』之哀、推尋『雅』意、彷徨旧之。（『黄鳥』の哀しみを率慕し、『雅』の意を推尋し、彷徨して之れを旧^{ふる}しとす。）」とある。「黄鳥」は『詩経』小雅の篇名。

[歳差] 中国語でも日本語と同じ意味で用いられるが、ここは、詩意から推して、旧暦と新暦とのズレをいうに過ぎない。『中国古代天文学詞典』（徐振韜主編 中国科学技術出版社 2009）は、『宋史』律曆志に「虞喜云、『堯時冬至日短星昴、今二十七百余年、乃東壁中、則知每歳漸差之所至。』（虞喜 云ふ、『堯の時 冬至 日は短く星は昴、今 二十七百余年、乃ち東壁の中に、則ち每歳 漸差の至る所を知る』と。）」とあるのを引き、「歳差」の語がこれに由来するという。虞喜（281～356）、字は仲寧、東晋の天文学者。著に『安天論』があった。

3 兒女家家難祭早 4 禁城二月売桃花

[兒女] 婦女子をいうが、ここは特に女の子の意。語は、『三国志』魏志・賈詡伝に「少時人莫知、唯漢陽閻忠異之、謂詡有良・平之奇。（少き時 人の知る莫きも、唯だ漢陽の閻忠のみ之れを異として、謂へらく詡に〔張〕良・〔陳〕平の奇有りと。）」とあり、その裴松之注に引く『九州春秋』に「韓信……、拒蒯通之忠、忽鼎峙之勢、利劍已揣其喉、乃歎息而悔、所以見烹於兒女也。（韓信……、蒯通の忠を拒み、鼎峙の勢^{ゆるが}ひを忽^{さぐ}せにし、利劍 已に其の喉を揣りて、乃ち歎息して悔ゆるも、兒女に烹らるる所以なり。）」と見える。

[難祭] 和語。もとは旧暦三月三日に行われた。1873（明治6）年の改暦以降は新暦三月三日に行われるのが一般的になっていったが、ここでは旧暦で祝っている。

[禁城] 宮城。南朝宋・顔延之「拝陵廟作」詩（『文選』卷二十三）に、「夙御嚴清制、朝駕守禁

城（夙に御して清制を厳め、朝に駕して禁城を守る）」と。

（自注）

〔白酒〕和語の「しろざけ」もどぶろくの異称として用いることもあるが、ここは雛祭りで飲まれる甘く白く濁った酒。中国語の「白酒」は濁り酒の意。『太平御覧』巻八四四に引く三国魏・魚豢『魏略』に「太祖時禁酒、而人窃飲之。故難言酒、以白酒為賢人、清酒為聖人。（太祖の時酒を禁ずるも、人^{ひそ}窃かに之れを飲む。故^{もとよ}り酒と言ひ難ければ、白酒を以て賢人と為し、清酒を聖人と為す。）」とある。また、現代中国語では透明で度数の高い焼酎をいう。

〔土偶人〕泥人形。『戦国策』齊策に「今者臣来過於淄上、有土偶人与桃梗相与語。（今者^{いま}臣来たるとき淄上を過ぐるに、土偶人と桃梗と相ひ与^{とも}に語る有り。）」と見える。ここは雛人形。

〔女兒節〕ここは桃の節句を言うが、中国の「女兒節」は明清期に京師で見られた習俗で、その時期は五月一日から五日まで、或いは九月九日だった。

〔唐花〕温室で栽培した花。清・王士禛『居易録談』に「今京師臘月即売牡丹・梅花・緋桃・探春、諸花皆貯暖室、以火烘之、所謂堂花、又名唐花是也。（今^{いま}京師臘月には即ち牡丹・梅花・緋桃・探春を売る、諸花^い皆な暖室に貯へ、火を以て之れを烘く、所謂堂花なり、又た唐花と名づくるは是れなり。）」

「東京雑事詩」七十三首其七

【本文及び書き下し】

- 1 血色紅裙六幅拖 血色の紅裙 六幅を拖き
- 2 踏青齊上鳳児坡 踏青して齊しく上る 鳳児の坡
- 3 金環窄約兜羅韞 金環 窄約す 兜羅の韞
- 4 高著黄皮短鞞靴 高く著く 黄皮短鞞の靴

（自注）黄皮靴色浅宜夏。女学生之奢者、亦履之以為飾。（黄皮の靴 色 浅く 夏に宜し。女学生^{よろ}の奢る者も、亦た之れを履きて以て飾りと為す。）

【日本語訳】

- 1 海老茶袴がゆったりと、
- 2 ピクニックに出掛け、一斉にハウセンカの花が咲く坂を登っていく。
- 3 金のリングが木綿の靴下をキュッと締め、
- 4 茶色い短革靴を履いている。

（自注）茶革靴は色が薄く夏に適している。女学生の中で贅沢な者は、やはりこれを履いてファッションにしている。

【押韻】「拖」「坡」「靴」、下平五歌韻。

【語釈】

1 血色紅裙六幅拖 2 踏青齊上鳳児坡

[血色紅裙]「血色」は暗赤色、また鮮紅色。「紅裙」は赤いスカート。南朝陳後主「日出東南隅行」に「紅裙結未解、緑綺自難微（紅裙は結びて未だ解けず、緑綺は自ら^{つな}微ぎ難し）」と見える。語は唐・白居易「琵琶引」に「鈿頭雲篋擊節碎、血色羅裙翻酒汚（鈿頭の雲篋^{でんとう うんぺい} 節を撃ちて碎け、血色の羅裙 酒を翻して汚る）」とあるのを踏まえるだろうが、ここは女学生たちの海老茶袴。

『明治事物起原7』衣装部「女学生の袴」に「女学生の袴の海老茶色なるは、華族女学校にはじまり、校長下田歌子の案なりといふ。これより、女学生にえび茶式部の俗称あり。」と見える。[六幅拖]「幅」は布の横の広さ。「拖」は引く。スカートのゆったりとした様をいう。唐・李群玉「同鄭相并歌姬小飲戲贈」（『全唐詩』題下注「一作杜丞相惊筵中贈美人。」）詩に「裙拖六幅湘江水、鬢聳巫山一段雲（裙は^ひ拖くこと六幅 湘江の水のごとく、鬢は巫山より聳えて一段の雲のごとし）」とあるのに基づくだろう。

[踏青]「蹋青」とも。春分から十五日目である清明節の前後に郊外へピクニックに出掛ける習慣。唐・孟浩然「大堤行」に「歳歳春草生、踏青二三月（歳歳 春草 生じ、踏青 二三月）」とある。

[鳳児] ホウセンカ。明・田汝成『西湖遊覧志余』巻二十四に「鳳僊花、有紅白紫数種、宋時謂之金鳳花、又曰鳳児。（鳳僊花、紅白紫の数種有り、宋の時 之れを金鳳花と謂ひ、又た鳳児と曰ふ。）」とある。或いは、「鳳雛」と同じく、将来すぐれた人物になる子供のことをいうかもしれない。

3 金環窄約兜羅襪 4 高著黄皮短勒靴

[金環窄約]「金環」、金属でできたリング状の装身具。「窄約」、用例が見当たらない。「金環」「約」は三国魏・曹植「美女篇」（『文選』巻二十七）の「攘袖見素手、皓腕約金環（袖を攘^{かか}げて素手^{あらは}を見せば、皓腕^ま 金環を約ふ）」に見える。腕輪が女性の白い腕に巻き付いている様子。「窄」はせまい。ここは、金属製の靴下留めキュッと締まっている様子。

[兜羅襪]「兜羅」、梵語tulaの音訳で綿花の意、「兜羅綿」とも。『翻訳名義集』沙門服相に、「兜羅綿、……或名妒羅綿。妒羅、樹名。綿從樹生、因而立称如柳絮也。亦翻楊華。（兜羅綿、……或いは妒羅綿と名づく。妒羅は、樹名なり。綿 樹より生ず、因りて称を立つること柳絮の如きなり。亦た楊華と翻す。）」と見える。「襪」は足袋。宋・陸游「天氣作雪戲作」に、「細衲兜羅襪、奇温吉貝裘（細かに衲^つぐ 兜羅の襪、奇^{はなは}だ温し 吉貝^{きつばい}の裘）」とある。「吉貝」も綿。

[黄皮短勒靴]「勒」、靴や足袋の筒状になった部分。『中華古今注』靴笏に「靴者、蓋古西胡也。昔趙武靈王好胡服、常服之。其制短勒黄皮、閑居之服。（靴は、蓋し古への西胡ならん。昔 趙の武靈王 胡服を好み、常に之れを服す。其の制 短勒黄皮、閑居の服なり。）」と見える。

「東京雑事詩」七十三首其八

【本文及び書き下し】

- 1 金縷歌残酒未消 金縷 歌は残し 酒は未だ消えず
- 2 迎人更折小蛮腰 人を迎へて更に小蛮の腰を折る
- 3 朱門十里伝箋去 朱門 十里 箋を伝へ去けば
- 4 舞袖郎当過柳橋 舞袖 郎当として 柳橋を過ぐ

（自注）伎多居新橋・柳橋間、毎呼侑酒、則以小車輿至。（伎 多く新橋・柳橋の間に居り、呼びて酒を侑めしむる毎に、則ち小車輿を以て至る。）

【日本語訳】

- 1 金縷の歌がやがて終わろうとしても、酔いはまだ醒めぬまま、
- 2 客を迎えては、また小蛮のような豊かなものの腰で舞を舞う。
- 3 お偉方やお金持ちから伝言が来れば、
- 4 着物の袖をひらひらと、柳橋を渡っていく。

（自注）芸者は多く新橋から柳橋にかけてにおり、酒興のために呼ばれば、小さな車に乗ってやって来る。

【押韻】「消」「腰」「橋」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 金縷歌残酒未消 2 迎人更折小蛮腰

〔金縷〕「金縷衣」、歌曲の名。唐・杜牧が「杜秋娘詩」で描いた杜秋娘のイメージを用いる。「杜秋娘詩」序に「杜秋、金陵女也。年十五、為李錡妾。（杜秋、金陵の女なり。年十五にして、李錡の妾と為る。）」とあり、詩に「秋持玉斝醉、与唱金縷衣（秋 玉斝を持って酔ひ、与に唱ふ金縷の衣）」とある。原注に「『勸君莫惜金縷衣、勸君須惜少年時。花開堪折直須折、莫待無花空折枝』、李錡長唱此辞。（『君に勸む 惜しむ莫かれ 金縷の衣、君に勸む 須らく惜しむべし 少年の時。花 開きて折るに堪へなば 直ちに須らく折るべし、花無きを待って空しく枝を折る莫かれ』、李錡 長に此の辞を唱ふ。）」とある。この歌詞を『唐詩別裁集』や『唐詩三百首』などは杜秋娘の作とするが、『全唐詩』は無名氏の作とする。

〔歌残〕歌が終わろうとする。宋・舒亶「浣溪沙・和葆先春晚飲会」に「金縷歌残紅燭稀、梁州舞罷小鬟垂、酒醒還是獨歸時（金縷 歌 残し 紅燭 稀なり、梁州 舞ひ 罷み 小鬟 垂る、酒の醒むるは還た是れ独り歸るの時）」とある。

〔未消酒〕まだ酔いが醒めない。唐・白居易「醉吟」に「耳底齋鐘初過後、心頭卯酒未消時（耳底に齋鐘の初めて過ぐるの後、心頭に卯酒の未だ消えざるの時）」とある。

〔折小蛮腰〕芸者が舞いで客を接待する。「折腰」舞う様。南朝梁・吳均「小垂手」に「折腰応兩笛、頓足轉双巾（折腰応兩笛、頓足轉双巾）」とある。「小蛮腰」、舞いの上手な女性の腰。唐・

孟榮『本事詩』事感に「白尚書姫人樊素善歌、妓人小蛮善舞。嘗為詩曰、『櫻桃樊素口、楊柳小蛮腰』。年既高邁、而小蛮方豊艶。(白尚書〔白居易〕の姫人 樊素 善く歌ひ、妓人 小蛮 善く舞ふ。嘗て詩を為りて曰く、『櫻桃は樊素の口、楊柳は小蛮の腰』と。年 既に高邁なるも、小蛮 方に豊艶たり。)」とあるのに拠る。

3 朱門十里伝箋去 4 舞袖郎当過柳橋

[朱門] 赤い漆で塗られた正門。貴族や富豪の家をいう。唐・杜甫「自京赴奉先県詠懷五百字」に「朱門酒肉臭、路有凍死骨(朱門は酒肉 臭^{なまぐさ}く、路に凍死の骨有り)」と見える。

[伝箋] 伝言の書かれた書き付けを送る。宋・趙以夫「大酺・牡丹」「貴客伝箋、趁良辰、賞心行楽(貴客 箋を伝ふ、良辰に^よ趁り、賞心行楽せん、と)」と見える。

[舞袖郎当] 「舞袖」、踊り手が着ている服の袖。「郎当」、晷韻、衣服がゆったりとしている様。宋・陳師道『後山詩話』に「楊大年『傀儡』詩云、『鮑老当筵笑郭郎、笑他舞袖太^{はなは}郎当。若教鮑老当筵舞、転更郎当舞袖長』。語俚而意切、相伝以為笑。(楊大年の『傀儡』詩に云ふ、『鮑老筵に当たりて郭郎を笑ふ、他の舞袖の太^{はなは}だ郎当なるを笑ふ。若し鮑老をして筵に当たりて舞はしめば、転^{かへ}って更に郎当 舞袖 長し』と。語は俚なるも意は切、相ひ伝へて以て笑ひと為さん。)」とある。

[柳橋] 東京都台東区の南端。神田川が隅田川に合流する辺りに「柳橋」という橋があり、その界限に隅田川の船遊び客のための船宿が多く、やがて花街として発展した。

(自注)

[新橋] 東京都港区北東端。北に銀座があり、その間を流れる汐留川に架けられた橋を新橋また芝口橋と称したのに由来する。江戸時代には芸妓屋の多い花街として栄えた。

[侑酒] 酒を勧める。また、宴席を盛り上げるための酒興。宋・蘇軾「次韻曹子方運判雪中同遊西湖」に「尊前侑酒只新詩、何異書魚餐蠹簡(尊前 酒を侑むるは只だ新詩のみ、何ぞ書魚の蠹簡^とを餐らふに異ならん)」と見える。

「東京雜事詩」七十三首其九

【本文及び書き下し】

- 1 霏雨声中夜漏沈 霏雨 声中 夜漏 沈^{しづ}かに
- 2 泥人煤麝故深深 泥人 煤麝^{ばいじや} 故より深深^{もと}たり
- 3 篆文百曲香銷後 篆文 百曲 香 銷えし後
- 4 冷到余灰冷到心 冷たきこと 余灰に到り 冷たきこと心に到る

(自注) 夏五月雨日霏雨。着物易敗、毎閉戸熱香、言銷其冷厲也。(夏五月の雨を霏雨^{ばいう}と曰ふ。着物 敗れ易く、毎に戸を閉ざして香を熱^たき、其の冷厲^けを銷^けすと言ふなり。)

【日本語訳】

- 1 梅雨の雨音の中、夜の時間が音もなく過ぎていき、
- 2 晴天を祈る土人形とよい香りの炭を置いた部屋はひっそりと。
- 3 篆文のように曲がりくねったお香の香りが消えてしまうと、
- 4 燃え残りの灰ほどに寒々として、冷やかさが心にまでしみこんでくる。

(自注) 夏五月の雨を霉雨という。着物が傷みやすいので、つねづね家を閉め切って香を焚き、その寒さと厳しさを紛らすのだと言う。

【押韻】「沈」「深」、下平二蕭韻。「心」、下平四豪韻。

【語釈】

1 霉雨中夜漏沈 2 泥人煤麝故深深

〔霉雨〕梅雨。霉、黴に同じ。

〔夜漏沈〕「夜漏」、夜間に用いる水時計。梁・陸 倕「新刻漏銘」序(『文選』卷五十六)に「揆景測辰、徼^{はか}叫宮戒井、守以水火、分茲^{めぐ}日夜。(景を揆り辰を測り、宮を徼り井を戒め、守るに水火を以てし、茲の日夜を分かつ。)」とあり、李善注に「『揆景測辰』、謂昼夜漏也。(『景を揆り辰を測る』とは、昼夜の漏を謂ふなり。)」とある。「沈」、ここは「沈沈」の意で用い、静かでひっそりとした様。唐・李益「漢宮少年行」に「暗聞弦管九天上、宮漏沈沈清吹繁(暗かに聞く 弦管 九天の上、宮漏 沈沈として 清吹 繁し)」とあり、宋・呂南公「風雨」に「風雨蕭蕭夜漏沈、北窗灯影見傷心(風雨 蕭蕭として 夜漏 沈かに、北窗 灯影 心を傷ましめらる)」とある。

〔泥人〕泥で作った人形。雨乞や晴天を祈るのに用いた。宋・曾慥『類説』事始・泥人祈晴に「天宝中、秋雨兩月余、敕人家門前作泥人、長三尺、左手指天、右手指地以祈晴。(天宝中、秋 雨 ふること兩月余、敕して人家の門前に泥人を作らしめ、長さ三尺、左手は天を指し、右手は指地を指して以て晴れを祈る。)」と見える。

天宝中秋雨兩月余勅人家門前作泥人長三尺左手指天右手指地以祈晴」

〔煤麝〕「麝煤」、平仄のために転倒させたのだろう。「麝墨」に同じ。香りのよい墨のことだが、ここは梅雨時の湿気対策に用いた炭のことだろう。

〔深深〕ひっそりとした様。五代蜀・欧陽炯「賀明朝」の「碧梧桐鎖深深院、誰料得兩情。(碧梧桐 鎖^とざす 深深たるの院、誰か料り得ん 兩つの情。)」のように、しばしば屋敷の中の庭を形容するのに用いるが、ここは自注に見える通り、部屋の中の様子をいう。宋词によく現れる語。

3 篆文百曲香銷後 4 冷到余灰冷到心

〔篆文〕ここは「香篆」のこと。篆文の形をした線香、篆文のように曲がりくねって見えることから。宋・洪芻『香譜』香篆に「鑲木以為之、以範香塵為篆文、然於飲席或仏像前、往往有至二三尺徑者。(木を鑲^ありて以て之れを為りて、以て香塵に範^{のつと}りて篆文を為す、飲席或いは仏像の前に然^もやし、往往にして二三尺の徑に至る者有り。)」とある。また、風がないために線香からゆらゆ

らと立ち上る煙をいう。この語も宋詞にしばしば見える。

[余灰] ここは平仄のために「余燼」の意で用いるのだろう。

[冷到心] 心まで冷え切ってしまう。杜甫「曲江三章章五句」其二に「吾人甘作心似灰、弟姪何傷淚如雨」とある。『莊子』齊物論に「形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎。(形は固より槁木の如くならしむべきも、心は固より死灰の如くならしむべけんや。)」と。

(自注)

[着物] 和語。身に着る物の総称であるが、明治以降は洋装に対して和服をいうようになった。

[爇香] 香を焚く。「爇」、焼くの意。

[冷厲] 冷ややかで厳しい。

「東京雜事詩」七十三首其十

【本文及び書き下し】

- 1 水蝕寒沙戦鉄銷 水は寒沙を蝕^{むしば}み 鉄銷^{てつせう}と戦ひ
- 2 桃根古渡暗通潮 桃根の古渡^{ひそ} 暗かに潮を通ず
- 3 北条游侠南条伎 北条は游侠 南条は伎
- 4 三月煙花両国橋 三月煙花 両国橋

(自注) 南条・北条、亦号南北朝。両国橋在隅田川上、傍多伎家。(南条・北条、亦た南北朝と号す。両国橋 隅田川上に在り、傍に伎家多し。)

【日本語訳】

- 1 川の流れは寒々とした砂洲を浸食し、鉄の橋と戦っている。
- 2 芸妓が集まる古い渡し場は図らずも海からそう遠くない。
- 3 北側には男伊達、南側には芸妓。
- 4 三月の花がすみがかかる両国橋。

(自注) 両国橋の南側と北側は南北朝とも呼ばれる。両国橋は隅田川に架かっており、その側は妓楼が多い。

【押韻】「銷」「潮」、下平二蕭韻。「橋」、下平四豪韻。「消」「腰」「橋」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 水蝕寒沙戦鉄銷 2 桃根古渡暗通潮

[寒沙] 秋冬の頃の砂洲。梁・范雲「倣古詩」(『文選』卷三十一)「寒沙四面平、飛雪千里驚(寒沙 四面に平らかに、飛雪 千里に驚く)」と。

[鉄銷] 鉄くず。『漢書』五行志上に「征和二年春、涿郡鉄官鑄鉄、鉄銷、皆飛上去、此火為変使

之然也。(征和二年春、^{たく}涿郡の鉄官 鉄を鑄るに、鉄銷、皆な飛上して去る、此れ火の変を為して之れをして然らしむるなり。)」と見える。ここは両国橋を指す。両国橋は1904（明治37）年に鉄橋になっていた。

[桃根] 晋・王献之の愛妾、桃葉の妹。宋・張敦頤『六朝事迹編類』桃葉渡に「桃葉者、晋王献之愛妾名也。其妹曰桃根。(桃葉は、晋 王献之の愛妾の名なり。其の妹を桃根と曰ふ。)」と見える。後には「桃葉桃根」で広く美女や妓女を指すようになった。梁・費昶^{ちやう}「行路難」二首（『玉台新詠』卷九）其一に「君不見長安客舍門、娼家少女名桃根（君 見ずや 長安 客舍の門、娼家の少女 名は桃根）」と見える。

[古渡] 古い渡し場。ここは王献之「桃葉歌」三首（『玉台新詠』卷十作「情人桃葉歌」）其一に「桃葉復桃葉、渡江不用楫。但渡無所苦、我自迎接汝（桃葉 復た桃葉、江を渡るに^{かち}楫を用ひず。但だ渡れ 苦しむ所無し、我 自ら汝を迎接せん）」とあるのに拠る。

[通潮] 海にまで通じている。海が近いこと。梁・庾肩吾「詠蔬圃堂詩」に「疎林不礙日、澗浦暫通潮（疎林は日を^{さまた}礙 げず、澗浦は暫く^{うしほ}潮に通ず）」と。

3 北条游侠南条伎 4 三月煙花両国橋

[北条…南条] 両国橋の北側と南側かと思う。

[三月煙花] 李白「黃鶴樓送孟浩然之広陵」に「故人西辞黃鶴樓、煙花三月下揚州（故人 西のかた黃鶴樓を辞し、煙花三月 揚州に下る）」とあるのに拠る。。”

[両国橋] 江戸時代の初めに架けられた。当初は大橋と名づけられたが、橋の西が武蔵国、東が下総国だったので、両国橋と呼ばれるようになった。橋の東側は東両国、また向う両国と呼ばれた。橋の西側は西両国と呼ばれ、北に隣接する柳橋も含め、江戸屈指の歓楽街として栄え、両国橋西詰の両国広小路は見世物などの小屋が建ち並んで賑わった。

「東京雑事詩」七十三首其十一

【本文及び書き下し】

- 1 平明閭闔九重開 平明 ^{しやうかう} 閭 闔 九重 開き
- 2 紅粉千行夜獵回 紅粉 千行 夜獵^{かいへ}より回る
- 3 百万市民斉脱帽 百万の市民 斉しく帽を脱し
- 4 春風輦路女王来 春風 輦路 女王 来たる

(自注) 俗名皇族女曰女王、車過則脱帽為敬。有時獵鴨離宮以示武。(俗に皇族の女^{むすめ}に名づけて女王と曰ひ、車 過ぐれば則ち帽を脱して敬を為す。時に鴨を離宮に獵して以て武を示す有り。)

【日本語訳】

- 1 夜が明ける頃、宮城の九重の門が開いて

2 美しい女性たちが千列にもなって夜の狩りから帰ってくる

3 百万の市民は一斉に帽子を脱いでご挨拶

4 春風の吹く大通り、皇族の女性たちのお出まし

(自注) 俗に皇族の女性たちを女王と呼び、車が通りすぎると帽子を脱いでご挨拶申し上げる。離宮で鴨猟をして武威をお示しになることがある。

【押韻】「開」「回」「来」、上平十灰韻。

【語釈】

1 平明閶闔九重開 2 紅粉千行夜獵回

[平明] 黎明。夜が明ける頃。南朝齊・謝朓「觀朝雨詩」(『文選』卷三十)に「平明振衣坐、重門猶未開(平明 衣を振ひて坐するも、重門 猶ほ未だ開かず)」とある。

[閶闔] 宮城の門。『後漢書』寇榮伝に「而閶闔九重、陷阱歩設、挙趾触罌置、動行絀羅網。(而るに閶闔は九重にして、陷阱は歩ごとに設けられ、趾を挙げれば罌置に触れ、動き行けば羅網に絀る。)」とあるが、ここは唐・李嶠雜詠「門」に「阿房万戸列、閶闔九重開(阿房 万戸 列び、閶闔 九重 開く)」とあるのを踏まえる。

[紅粉] 美しい女性。宋・計有功『唐詩紀事』卷五十六に載せる杜牧の詩(『全唐詩』は「兵部尚書席上作」とし、「兵部」の下に「一作李」。)に「忽発狂言驚満座、兩行紅粉一時迴(忽ち狂言を發して満座を驚かし、兩行の紅粉 一時に迴る)」とある。同様の記事は『本事詩』高逸にも見える。

[夜獵] 夜に狩りをする。唐・儲光羲「王昭君」に「強来前帳看歌舞、共待单于夜獵帰(強ひて前帳に來たり 歌舞を看、共に单于の夜獵より帰るを待つ)」と。

3 百万市民齊脱帽 4 春風輦路女王来

[市民] 都市の住民。漢・荀悦『申鑑』時事に「皇民敦、秦民弊、時也。山民樸、市民玩、処也。

(皇の民の敦く、秦の民の弊るは、時なり。山の民の樸にして、市の民の玩なるは、処なり。)」と見える。

[脱帽] かぶり物を脱いで敬意を表する。漢・無名氏「陌上桑」(『玉台新詠』卷一作「日出東南隅行」)に「少年見羅敷、脱帽著幘頭(少年 羅敷を見れば、帽を脱して幘頭を著く)」と見える。但し、『玉台新詠』は「脱帽」を「脱巾」に作る。日本では帽子が流行した明治以降の風習だろう。

[輦路] 天子の車が通る道。漢・班固「西都賦」(『文選』卷一)に「輦路経営、脩除飛閣。(輦路 経営し、脩除に飛閣あり。)」とあり、李善注に「輦路、輦道也。」とある。

[女王] 女性の王。語は『三国志』魏書・東夷伝に「女王国東渡海千余里、復有国、皆倭種。(女王国 東のかた海を渡ること千余里、復た国有り、皆な倭種なり。)」と邪馬台国に関する記事に見えるが、古い中国では常用語とは言えないようである。ここは自注に「俗名皇族女曰女王。

(俗に皇族の女^{むすめ}に名づけて女王と曰ふ。)」とあるので、女性の皇族。1889(明治22)年制定の「皇室典範」第七章皇族・第三十一條に「皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマテハ男ヲ親王女ヲ内親王トシ五世以下ハ男ヲ王女ヲ女王トス」とある。

(自注)

[獵鴨離宮] 浜離宮(現在の浜離宮恩賜庭園。東京都中央区)に鴨場^{かもば}があり、宮内省の管理で鴨猟が行われた。

[示武] 武威を人々に知らしめる。晋・庾貞「晋武帝華林園集詩」(『文選』卷二十)に「示武懼荒、過亦為失(武を示して荒^{おど}を懼し、過ぐるも亦た失と為す)」とある。

「東京雜事詩」七十三首其十二

【本文及び書き下し】

- 1 万家井竈^{せいそう}緑楊煙 万家 井竈 緑楊の煙
- 2 桜筍初開四月天 桜筍 初めて開く 四月の天
- 3 十里隅田^{すみだ}川上路 十里 隅田 川上の路
- 4 春帆細雨看花船 春帆 細雨 花を看るの船

(自注) 隅田川上、有堤、長十里、満植桜桃。花時遊人成市、路為之塞。其懦夫弱女懼傾跌者、買舟堤下、溯岸觀之。(隅田川^{ほとり}の上に、堤有り、長さ十里、桜桃を満植す。花時 遊人 市を成し、路^{みち}之れが為に塞がる。其の懦夫弱女の傾跌せんことを懼るる者、舟を堤下に買ひ、岸を溯りて之れを觀る。)

【日本語訳】

- 1 どの家でも井戸端のヤナギの青々と茂る葉にカマドから立ちのぼる煙がかかり
- 2 サクラやタケノコが市^{いち}に出回る、春四月の空
- 3 十里もつづく隅田川のほとりの道
- 4 春の水面に浮かぶ帆はこぬか雨の中、花見に仕立てた船

(自注) 隅田川のほとりに十里ほどつづく堤防がありサクラの樹がいっぱいに植えられている。満開の折には花見客が市を成し、往来がふさがりほどである。軟弱な男や年若い女で転ぶのが心配な者は、堤防のところで船を雇い、岸に沿って花見をする。

【押韻】「煙」「天」「船」、下平一先韻。

【語釈】

1 万家井竈緑楊煙 2 桜筍初開四月天

[井竈] 井戸とかまど。人の生活が営まれるところ。晋・陶淵明「歸園田居詩」五首其四に「井竈有遺処、桑竹殘朽株(井竈 遺処有り、桑竹 朽株 残る)」と見える。

[緑楊煙] 春になり青々と茂るヤナギの葉が靄のように見える様。晩唐、五代前蜀・韋莊「送福州王先輩南歸」詩に「明日一杯何處別、綠楊煙岸雨濛濛（明日 一杯 何れの處にか別れん、綠楊煙岸 雨 濛濛）」と見える。しかし、ここは『新古今和歌集』巻七に仁徳天皇御製として載せる「高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり」を意識し、東京の人々の平和な暮らしぶりを描くのではないかと思う。その場合は、かまどから立ち上る煙がヤナギの緑の葉にかかり靄のように見える様子。

[桜筍] サクラとタケノコ。「桜筍会」を意識する。桜筍会はユスラウメの実とタケノコをご馳走として開かれる春の宴。転じて広く春の宴を意味するになるが、ここは日本のお花見をいう。唐・韓偓「湖南絶少含桃偶、有人以新摘者見惠、感事傷懷、因成四韻」詩に「苦筍恐難同象匕、酪漿無復瑩蟻珠（苦筍 恐らくは象匕を同にし難く、酪漿 復た蟻珠を瑩らす無し）」とあり、自注に「秦中為桜筍之会、乃三月也。（秦中 桜筍の会を為すは、乃ち三月なり。）」という。

[四月天] 四月の空。宋・曾鞏「芍藥亭」詩に「小碧闌干四月天、露紅煙紫不勝妍（小碧の闌干 四月の天、露紅煙紫 妍に勝へず）」と見える。

3 十里隅田川上路 4 春帆細雨看花船

[十里] 「東京雜事詩」其四でも「鞭糸車影忽忽去、十里桜花十里塵（鞭糸 車影 忽忽として去る、十里の桜花 十里の塵）」と花見の様子を描いている。

[春帆細雨] 春の霧雨の中、船が浮かんでいる様子。杜甫「送翰林張司馬南海勒碑」詩に「野館濃花發、春帆細雨來（野館 濃花 發き、春帆 細雨 來たる）」とある。

[看花船] 花見のために仕立てた船。唐・寶翬「贈蕭都官」詩に「閒尋織錦字、醉上看花船（閒かに尋ぬ 織錦の字、酔ひて上る 看花の船）」と見える。

(自注)

[花時] 花が満開の頃。杜甫「遣遇」に「自喜遂生理、花時甘繻袍（自ら喜ぶ 生理を遂ぐるを、花時 繻袍に甘んず）」と。

[路為之塞] 道路の通行がふさがれる。明・徐宏祖『徐霞客遊記』卷一上「遊黄山日記」に「忽前澗乱石縦横、路為之塞。（忽ち前澗に乱石 縦横として、路 之れが為に塞がる。）」と見える。

[懦夫] 意気地のない臆病者。『孟子』万章下に「故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志。（故に伯夷の風を聞く者、頑夫も廉に、懦夫も志を立つる有り。）」と。

[弱女] 年若い女性。晋・陶淵明「和劉柴桑」詩に「弱女雖非男、慰情良勝無（弱女は男に非ずと雖も、情を慰むるは良に無きに勝れり）」と。

[傾跌] 傾き倒れる。『論語』郷党に「撰齊升堂、鞠躬如也。屏氣似不息者。（齊を撰げて堂に升るに、鞠躬如たり。氣を屏めて息せざる者に似たり。）」とあり、朱熹の「集註」に「『礼』、将升堂、両手摳衣、使去地尺、恐躡之而傾跌失容也。（『礼』に、将に堂に升らんとするや、両手もて衣を摳げて、地を去ること尺ならしむるは、之れを躡みて傾跌して容を失はんことを恐るなり。）」とある。

「東京雑事詩」七十三首其十三

【本文及び書き下し】

- 1 歌舞中宵月未斜 歌舞 中宵 月 未だ斜めならず
- 2 海紅簾底駐香車 海紅 簾底 香車 駐^{とど}まる
- 3 不知越後多獅子 知らず 越後に獅子多きとは
- 4 錯認河東柳氏家 錯^{あや}りて認む 河東柳氏の家かと

（自注）越後獅子、舞名、古出越後国、伎家多習之。（越後獅子、舞の名、古く越後の国より出で、伎家 多く之れを習はしむ。）

【日本語訳】

- 1 月が中天に懸かる真夜中に歌い舞う
- 2 カーテンの向こう、サザンカの花越しに女性の乗った車がとまる
- 3 まさか越後の国にこれほど獅子が多いとは
- 4 河東の柳氏の家と取り違えてしまった

（自注）越後獅子は、舞いの名で、古くは越後の国から広まり、今はしばしば芸妓に習わせている。

【押韻】「斜」「車」「家」、下平六麻韻。

【語釈】

1 歌舞中宵月未斜 2 海紅簾底駐香車

〔歌舞中宵〕夜中に歌い舞う。宋・辛棄疾「賀新郎・同父見和、再用韻答之」詞に「我最憐君中宵舞、道男兒到死心如鉄（我 最も憐む 君の中宵に舞ふを、道^いふ 男兒は死に到るも 心 鉄の如し、と）」とある。

〔月未斜〕月がまだ西に傾いていない頃、真夜中。唐・王起「賦花」詩に「花、点綴、分葩。露初裏、月未斜（花、点綴し、葩^{はな}を分かつ。露 初めて裏^{うら}ひ、月 未だ斜めならず）」と。

〔海紅〕サザンカの花。明・楊慎『升菴集』卷八十・四海亭に「花名、有海字者、皆從海外来、海棠・海榴是也。海紅花即山茶也。（花の名、海字^よ有る者は、皆な海外^よ從り来たり、海棠・海榴是れなり。海紅花は即ち山茶なり。）」とある。

〔香車〕婦人の乗る車。唐・許堯佐「柳氏伝」（『太平広記』卷四八五）に「偶於龍首岡、見蒼頭以駁牛駕輜輶、從兩女奴。翊偶隨之。自車中問曰、『得非韓員外乎。某乃柳氏也』。使女奴窃言失身沙吒利、阻同車者、請詰旦幸相待於道政里門。及期而往、以輕素結玉合、実以香膏、自車中授之曰、『当遂永訣。願眞誠念』。乃回車、以手揮之、輕袖揺揺、香車麟麟。目断意迷、失於驚塵。（偶^{たま}たま龍首岡に於いて、蒼頭の駁牛を以て輜輶を駕し、兩女奴を從ふるを見る。翊 偶たま之れに隨ふ。車中自り問ひて曰く、『韓員外に非ざるを得んや。某は乃ち柳氏なり』と。使女奴をして窃^{ひそ}かに身を沙吒利に失ひ、同車に阻まるれば、請ふ 詰旦 幸ひに道政里の門に相ひ待

てと言はしむ。期に及びて往けば、輕素を以て玉合を結び、実たすに香膏を以てし。自車中自り之れを授けて曰く、『当に遂に永訣すべし。願はくは誠念を眞かんことを』と。乃ち車を回らし、手を以て之れを揮ひ、輕袖 揺揺として、香車 鱗鱗たり。目は断え意は迷ひ、驚塵に失す。』と見えるのを踏まえる。

3 不知越後多獅子 4 錯認河東柳氏家

〔越後多獅子〕ここは越後獅子と「河東獅子吼」の故事とを掛けて言う。宋・宋洪邁『容齋三筆』陳季常に「陳慥字季常、…、自称龍邱先生、……。好賓客、喜畜声妓、然其妻柳氏絶兇妬。故東坡有詩云、『龍邱居士亦可憐、談空說有夜不眠。忽聞河東師子吼、拄杖落手心茫然』。河東獅子指柳氏也。（陳慥 字は季常、…、自ら龍邱先生と称す、……。賓客を好み、喜んで畜声妓を蓄はふも、然れども其の妻 柳氏 絶だ兇妬なり。故に東坡に詩有りて云ふ、『龍邱居士も亦た憐れむべし、空を談じ有を説きて夜も眠らず。忽ち聞く 河東の師子吼、拄杖 手より落ち 心茫然たり』と。河東の獅子は柳氏を指すなり。）」とあり、後に「河東獅子吼」は嫉妬深い妻、また恐妻家を嘲笑するのに用いられるようになった。「河東」は陳慥の妻、柳氏の郡望。蘇軾の詩は「寄吳德仁兼簡陳季常」。

〔錯認〕取り違えてしまう。唐末頃から見える語で、宋・蘇軾「西江月・佳人」詞に「為誰流睇不帰家、錯認門前過馬（誰が為にか流睇して家に帰らざる、錯りて認む 門前に 馬 過ぐるかと）」と。

〔河東柳氏家〕語は上に引いた「河東獅子吼」を用いるが、内容は許堯佐「柳氏伝」を踏まえ、美しい芸妓を置く家をいう。

「東京雜事詩」七十三首其十四

【本文及び書き下し】

- 1 杜鵑啼血浣靈衣 杜鵑 血に啼きて 靈衣を浣し
- 2 累我青衫淚一揮 我が青衫に累ひて 涙 一たび揮ふ
- 3 紅伎囿灯春晚晚 紅伎 灯を囿みて 春 晩晩
- 4 歌場聴唱不如帰 歌場に不如帰を唱ふを聴く

（自注）不如帰、小説名、復有演為戲劇者。見者莫不哀之、至有作歌謳詠之者。（不如帰、小説の名、復た演じて戲劇と為す者有り。見る者 之れを哀しまざる莫く、歌を作りて之れを謳詠する者有るに至る。）

【日本語訳】

- 1 ホトトギスが鳴きながら血を吐いて、今は亡き人の生前の衣服をけがすと
- 2 涙があふれて書生である私の服にまとわりつく
- 3 春が過ぎ去ろうとする頃、色町の女性たちも灯火を囲んで
- 4 芝居小屋で『不如帰』に耳を傾ける

(自注)『不如帰』は小説の名だが、さらに芝居に仕立てる者がいる。観客はいずれも非常に哀しみ、歌を作って朗詠する者さえいる。

【押韻】「衣」「揮」「帰」、上平五微韻。

【語釈】

1 杜鵑啼血澹靈衣 2 累我青衫淚一揮

[杜鵑] ホトトギス。杜宇、子規とも。晩春から初夏の頃、昼も夜も非常に哀切な声で鳴く。昔、蜀王だった杜宇の魂が杜鵑になったという伝説がある。唐・盧求『成都記』に「杜宇又曰杜主、自天而降、称望帝、好稼穡、治郫城。後望帝死、其魂化為鳥、名曰杜鵑。(杜宇 又た杜主と曰ひ、天よりして降り、望帝と称し、稼穡を好み、郫城を治む。後 望帝 死し、其の魂 化して鳥と為り、名づけて杜鵑と曰ふ。)」(宋・葛立方『韻語陽秋』卷十六などに引く)とある。南朝宋・鮑照「擬行路難」十八首其七に「中有一鳥名杜鵑、言是古時蜀帝魂。声音哀苦鳴不息、羽毛憔悴似人髡(中に一鳥有り 杜鵑と名づく、言ふ 是れ古時の蜀帝の魂なりと。声音 哀苦にして 鳴きて息まず、羽毛 憔悴して人の髡するに似る)」と。

[啼血] 血を吐く。ホトトギスはくちばしが赤いので、夜の間に哀鳴し血を吐いて草や木を赤く染めると考えられた。宋・陸佃『埤雅』積鳥に「杜鵑、一名子規。苦啼、啼血不止。一名怨鳥。夜啼達旦、血漬草木。(杜鵑、一に子規と名づく。苦啼し、血に啼きて止まず。一に怨鳥と名づく。夜 啼きて旦に達し、血 草木を漬む。)」とある。

[澹] 汚す。染める。唐・杜甫「虢国夫人」詩(『全唐詩』卷二三四には張祜の作とも)に「却嫌脂粉澹顔色、澹掃蛾眉朝至尊(却って嫌ふ 脂粉の顔色を澹すを、澹く蛾眉を掃ひて至尊に朝す)」と見える。

[靈衣] 死者が生前いつも着ていた服。晋・潘岳「寡婦賦」(『文選』卷十六)に「仰神宇之寥寥兮、瞻靈衣之披披。(神宇の寥寥たるを仰ぎ、靈衣の披披たるを瞻る。)」とある。

[累] まとわりつく。

[青衫] 書生の着る服。宋・劉過「水調歌頭・寿王汝良」詞に「斬樓蘭、擒頡利、志須酬。青衫何事、猶在楚尾与吳頭。(樓蘭を斬り、頡利を擒へ、志は須く酬ゆべし。青衫 何事ぞ、猶ほ楚尾と吳頭とに在り。)」と見える。

3 紅伎圍灯春晚晚 4 歌場聽唱不如歸

[紅伎] 紅妓に同じ。妓女。

[圍灯] 灯火を取り囲む。元・張昱「陪宴相府得芍藥花有賦」詩に「玉瓶盛露扶春起、錦帳圍灯照夜開(玉瓶 露を盛り 春を扶けて起ち、錦帳 灯を囲み 夜を照らして開く)」と。

[春晚晚] 春が暮れようとする。「春晚」は季節が移り変わろうとする様、暈韻。唐・李商隱「無題」四首其三に「含情春晚晚、暫見夜闌干(情を含む 春 春晚たるに、暫く見る 夜 闌干たるを)」とある。

〔歌場〕歌を歌うところ。中国の演劇は歌を伴っていたので、ここは劇場、芝居小屋の意。宋・張孝祥「醜奴兒」詞に「月滿星稀、想見歌場夜打围（月は満ち星は稀に、想見す 歌場に 夜 打围するを）」と見える。「打围」は狩りをすること。

〔聴唱〕歌声にじっと耳を傾ける。白居易「対酒」五首其四に「相逢且莫推辞醉、聴唱陽関第四声（相ひ逢へば且く酔ふを推辞する莫かれ、陽関第四声を唱ふを聴け）」と。

〔不如帰〕ホトトギス。宋・謝維新の編になる『古今合璧事類備要』別集卷六十八などに引く宋・陶岳『零陵記』に「其音云『不如帰去』。（其の音 『不如帰去』と云ふ。）」と見える。ここは、1898（明治31）年から翌年にかけて国民新聞に掲載され、後に出版されてベストセラーとなった徳富蘆花の小説、『不如帰』が新派によって上演された芝居を指す。

（自注）

〔莫不哀之〕哀しまない者はいなかった。『後漢書』孝順帝紀に「明年三月、安帝崩、北郷侯立。濟陰王以廢黜、不得上殿親臨梓宮、悲号不食、内外群僚莫不哀之。（明年〔延光四年〕三月、安帝 崩じ、北郷侯 立つ。濟陰王 廢黜^{はいちゆつ}せらるるを以て、上殿して親しく梓宮に臨むを得ず、悲号して食はず、内外の群僚 之れを哀しまざる莫し。）」と見える。

「東京雜事詩」七十三首其十五

【本文及び書き下し】

- 1 春動禪関蟾子飛 春 禪関に動きて 蟾子 飛び
- 2 四山花雨閉双扉 四山 花雨 双扉を閉ざす
- 3 僧家十五盈盈女 僧家 十五 盈盈たる女^{むすめ}
- 4 夜傍龕灯作嫁衣 夜 龕灯に傍ひて嫁衣を作る^{かむ}

（自注）地多古寺、寺僧娶妻食肉不為禁。長子孫称世襲焉。服御衣飾与世無殊。且多通書義、講内典諸經、較我国僧侶為精。（地 古寺多く、寺僧 妻を娶り肉を食らふを禁と為さず。長子孫を世襲^{よつぎ}と称す。服御衣飾 世と殊なる無し。且つ多く書義に通じ、内典諸經を講ずること、我が国の僧侶と較べて精しと為す。）

【日本語訳】

- 1 春がお寺に訪れ、めでたいことの触れか、クモの子が飛ぶ
- 2 扉を閉じてはいるが、周囲の山々には花の頃の雨が降り、ありがたい念仏の音が響く
- 3 住職の十五になる娘さんはたおやかに美しく
- 4 夜は厨子の灯りを頼りに花嫁衣装を縫っている

（自注）土地には古い寺が多く、僧侶は妻帯・肉食を禁じられていない。長男、長男の長男を世継ぎと呼ぶ。普段の服装や日常品は世間の人々と変わらない。しかも、書物の内容にしばしばよく通じており、仏典諸經について講義すれば、我が国の僧侶よりも詳しい。

【押韻】「飛」「扉」「衣」、上平五微韻。

【語釈】

1 春動禪関蟪子飛 2 四山花雨閑双扉

〔春動〕春の兆しが現れる。唐・杜甫「城上」詩に「風吹花片片、春動水茫茫（風 吹きて 花片片、春 動きて 水 茫茫）」と。

〔禪関〕僧侶が集まる寺院。唐・李白「同族姪評事黯遊昌禪師山池」二首其一に「遠公愛康樂、為我開禪関（遠公 康樂を愛し、我が為に禪関を開く）」と。

〔蟪子飛〕「蟪子」はアシダカグモ。北齊・劉昼『劉氏新論』鄙名に「今野人昼見蟪子者、以為有喜樂之瑞。（今 野人 昼に蟪子を見れば、以て喜樂の瑞有りと為す。）」とある。ここは唐・権徳輿「玉台体」詩十二首其十一に「昨夜裙帶解、今朝蟪子飛（昨夜 裙帶 解け、今朝 蟪子 飛ぶ）」とあるのを踏まえ、近く夫を迎えることになることを暗示する。

〔四山〕四方の山。唐・張祜「東山寺」詩に「半夜四山鐘磬尽、水精宮殿月玲瓏（半夜 四山 鐘磬 尽き、水精の宮殿 月 玲瓏たり）」と見える。

〔花雨〕花が咲く時期に降る雨。李白「同族姪評事黯遊昌禪師山池」二首其二に「客来花雨際、秋水落金池（客は来たる 花雨の際、秋水 金池に落つ）」とある。また、諸天が仏の説法の功德を賛嘆するため花を雨のように降らせることをいう。「仁王般若波羅蜜經」序品に「時無色界雨無量變大香華、香如車輪、華如須彌山王、如雲而下。（時に無色界より無量に変ぜる大香華を雨ふらせば、香は車輪の如く、華は須彌山王の如く、雲の如くにして下れり。）」とある。後に仏法を称揚する高僧の言葉を意味するようになった。李白「尋山僧不遇作」に「香雲遍山起、花雨從天来（香雲 山に遍く起こり、花雨 天^よ從り来たる）」と。

3 僧家十五盈盈女 4 夜傍龕灯作嫁衣

〔僧家〕寺院をいう。韓愈「題秀禪師房」詩に「橋夾水松行百歩、竹床莞席到僧家（橋 水松を^{さしはさ}夾 みて 行くこと百歩、竹床 莞席 僧家に到る）」と。

〔盈盈〕女性のたたずまいの美しい様。「古詩十九首」其二（『文選』卷二十九）に「盈盈楼上女、皎皎当窗牖（盈盈たる楼上の女、皎皎^{けうけう}として窗牖^{さういう}に当たる）」と。

〔龕灯〕「龕」は仏像を安置する容器、また石室。厨子。「龕灯」はその前に置かれた灯明。唐・温庭筠「宿秦生山齋」詩に「龕灯落葉寺、山雪隔林鐘（龕灯 葉 落つるの寺、山雪 林を隔^{かへ}つるの鐘）」と。

〔作嫁衣〕花嫁衣装を作る。唐・秦韜玉「貧女」詩（『全唐詩話』卷五）に「苦^{はなは}だ恨む 年年 金線を圧し、他人の為に嫁衣裳を作るを」と。

（自注）

〔娶妻食肉〕1872（明治5）年に「僧侶肉食妻帯蓄髪並ニ法用ノ外ハ一般ノ服着用随意タラシム」との太政官布告が出て、僧侶の妻帯、肉食が許された。

[世襲] 日本語の「世継」「世嗣」。

[服御衣飾] 日常生活に用いる道具類のこと。「服御」は服馭とも。唐・沈既濟「枕中記」(『文苑英華』卷八三三)に「由是衣裝服馭、日益鮮盛。(是れに由りて衣裝・服馭、日^ひび益^{ます}ます鮮盛なり。)」と見える。「衣飾」は衣服やアクセサリ。

[内典] 仏教の經典をいう。北齊・顔之推『顔氏家訓』帰心に「内典初門、設五種禁。外典仁義礼智信、皆与之符。(内典の初門、五種の禁を設く。外典の仁義礼智信、皆な之れと符す。)」と見える。

「東京雑事詩」七十三首其十六

【本文及び書き下し】

- 1 久無月姉駕雲梯 久しく月姉の雲梯を駕する無く
- 2 金獸銜鑲鎖碧閨 金獸 鑲を銜みて 碧閨を鎖^{とざ}す
- 3 蛩狩今宵門禁解 蛩狩り 今宵 門禁 解け
- 4 得携小妹過清溪 小妹を携へ得て 清溪に過^よぎる

(自注) 夜間至水畔、捕流蛩、囚以紗籠曰蛩狩。猶言獵蛩也。士女之放者爭以為戲。(夜間 水畔に至り、流蛩を捕り、囚^{とら}ふるに紗籠を以てするを蛩狩りと曰ふ。猶ほ蛩を獵^かると言ふがごときなり。士女の放なる者 争ひて以て戯れと為す。)

【日本語訳】

- 1 月の女神が雲の通路をお渡りになることも久しく無く
- 2 門扉に鑲を銜えた虎の飾りのある月の宮殿は閉ざされたまま
- 3 今宵は蛩狩りのために門の出入りが許され
- 4 かわいい娘を連れて清らかな川の流を訪れることができた

(自注) 夜、水辺に行き、ホタルを捕まえ、薄絹の虫かごに入れることを「蛩 狩^{ほたるがり}」という。「獵蛩^か(蛩を獵る)」の意である。奔放な若い男女が競って遊びとする。

【押韻】「梯」「閨」「溪」、上平八齊韻。

【語釈】

1 久無月姉駕雲梯 2 金獸銜鑲鎖碧閨

[月姉] 原文は「月姊」に作る。「姊」は「姉」の異体字。「月姊」は嫦娥をいう。嫦娥は月の宮殿に住む女神。もと姮娥と表記していたが、漢の文帝、劉恒の諱を避けて嫦娥とした。『淮南子』覽冥訓に「羿請不死之藥於西王母、姮娥窃以奔月。(羿 不死の藥を西王母に請ひしに、姮娥^{がぬす} 窃みて以て月に奔^{はし}る。)」とある。「月姊」の話は唐・李商隱「水天閑話旧事」詩に「月姊曾逢下彩蟾、傾城消息隔重簾(月姊 曾^{かつ}て逢ふ 彩蟾より下るに、傾城 消息 重簾を隔つ)」と見える。

[雲梯] 仙人が天に昇る通路。晋・郭璞「遊仙詩」十九首其一（『文選』卷二十一）に「靈谿可潛盤、安事登雲梯（靈谿 潛盤すべく、安くんぞ雲梯に登るを事とせん）」とあり、李善注は「雲梯、言仙人昇天、因雲而上。故曰雲梯。（雲梯は、仙人 天に昇るに、雲に因りて上るを言ふ。故に雲梯と曰ふ。）」という。

[金獸] 金色で虎の頭の形をした鋪首。鋪首は口に環をくわえた虎・螭・亀・蛇などの形をしており、これを門扉に着けて飾りとする。唐・薛逢「宮詞」に「鎖銜金獸連環冷、水滴銅龍昼漏長（鎖は金獸に銜^{ふく}まれて 連環 冷く、水は銅龍に滴りて 昼漏 長し）」と見える。

[碧閨] 空にある宮殿。「碧」は碧空、「閨」は宮中の小さな門、転じて宮殿。ここは嫦娥の住まう月の宮殿をいう。明・虞淳熙「中秋西湖社集分韻得齊字一百韻」（『列朝詩集』丁集第十五）に「斜漢傾幽渚、涼雲鎖碧閨（斜漢は幽渚に傾き、涼雲は碧閨を鎖^{とざ}す）」と。

3 蚩狩今宵門禁解 4 得携小妹過清溪

[蚩狩] 和語。ほたるがり。

[門禁] 出入口の警備、検査。劉宋・范曄「宦者伝論」（『文選』卷五十）に「閹者守中門之禁、寺人掌女宮之戒。（閹者は中門の禁を守り、寺人は女宮の戒めを掌^{こんしや}る。）」とある。

[小妹] 若い女性。元は姉妹の内、最も年少の者。後には妹を意味するようになる。唐・王維「偶然作」六首其三に「小妹日成長、兄弟未有娶（小妹 日びに成長し、兄弟 未だ娶る有らず）」と。さらに後には年若い女性を意味する「小妹妹」の意でも用いられるようになった。

[清溪] 清らかな水の流れ。劉宋・謝靈運「登臨海嶠初發彊中作与従弟惠連見羊何共和之（臨海の嶠に登らんとし、初めて彊中を發して作り、従弟の惠連に与へ羊と何とに見^{しめ}して共に之れに和せしむ）」詩（『文選』卷二十五）に「攢念攻別心、旦發清溪陰（攢念^{さんねん} 別心を攻むるも、旦^{あした}に清溪の陰を發す）」と。

(自注)

[流螢] ふわふわと飛ぶホタル。南朝齊・謝朓「玉階怨」詩（『玉台新詠』卷十）に「夕殿下珠簾、流螢飛復息（夕殿 珠簾を下ろし、流螢 飛びて復た息^やむ）」と。

[紗籠] ここは虫籠の意で用いるだろうが、もとは薄絹を張った灯籠。唐・白居易「宿東亭曉興」詩に「温温土爐火、耿耿紗籠燭（温温たり 土爐の火、耿耿^{かうかう}たり 紗籠の燭）」と。

[士女] 若い男女。特に未婚の男女を指す。『楚辭』招魂に「吳歛蔡謳、奏大呂些。士女雜坐，乱而不分些（吳歛^{ご め} 蔡謳^{さいおう}、大呂を奏す。士女^{たいりよ} 雜^{まじ}り坐し，乱れて分かれず）」とあり、王逸注に「言醉飽酣樂、合罇促席、男女雜坐、比肩齊膝、恣意調戲、乱而不分別也。（言ふところは醉飽酣樂して、罇を合はせ^{せま}席を促らせ、男女 雜^{なら}り坐し、肩を比べ膝を齊へ、意を恣^{そろ}にして調戲し、乱れて分別せざるなり。）」という。

[放者] ここは王逸注「恣意調戲」とあるように「放恣」の意。

「東京雜事詩」七十三首其十七

【本文及び書き下し】

- 1 織肥量尽楚宮腰 織肥 ^{はか}量り尽くす 楚宮の腰
2 蟬翼輕衣透紫綃 蟬翼の輕衣 ^{し せう とほ}紫綃を透す
3 花影四廂新浴後 花影 四廂 新浴の後
4 輦簾風動海初潮 ^{なんれん}輦簾 風 動き 海 初めて潮す

(自注) 品川多海水浴場、毎至盛夏、士女之浴者甚衆。(品川 海水浴場多く、盛夏に至る毎に、
士女の浴する者 ^{おほ}甚だ衆し。)

【日本語訳】

- 1 うら若い女性の腰も細いか太いか、すべて押し量ることができる
2 蟬の羽のように薄い衣裳は紫のうすぎぬが透けて見える
3 海から上がると、花のように美しい姿が四方に見え
4 風が柔らかなカーテンを動かす頃、海が満ち始める

(自注) 品川には海水浴場が多く、真夏がやって来ると、海水浴を楽しむ若い男女がとても多い。

【押韻】「腰」「綃」「潮」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 織肥量尽楚宮腰 2 蟬翼輕衣透紫綃

[織肥量尽] 腰回りが太いか細いかすべて押し量ることができる。

[楚宮腰] 「楚腰」とも。『韓非子』二柄に「楚靈王好細腰、而國中多餓人。(楚の靈王 細腰を好みて、國中に餓人多し。)」とあるのに基づき、後に女性の細い腰を表すようになった。「楚宮腰」の語は南朝梁・蕭子顯「日出東南隅行」(『玉台新詠』卷八)に「逶迤梁家髻、冉弱楚宮腰(逶迤たり 梁家の髻、冉 弱たり 楚宮の腰)」と見える。

[蟬翼] 蟬の羽。非常に軽い、また薄いことの比喩に用いる。『楚辭』卜居に「蟬翼為重、千鈞為輕。(蟬翼を重しと為し、千鈞を軽しと為す。)」洪興祖補注に「李善云、『蟬翼、言薄也』。(李善 云ふ、『蟬翼は、薄きを言ふなり。])」とあるのは、曹植「七啓」(『文選』卷三十四)に「蟬翼之割、剖織析微。(蟬翼の割、織を^さ割き^{わか}微を析つ。)」とあるのに対する注。蟬翼

[輕衣] 軽い衣裳。西晋・潘尼「三月三日洛水作詩」に「臨岸濯素手、涉水攀輕衣(岸に臨んで素手を濯ひ、水を^{わた}渉りて 輕衣を^{かか}攀ぐ)」と見える。

[紫綃] 紫のうすぎぬ。唐・陳鴻「長恨歌伝」に「見一人冠金蓮、披紫綃、佩紅玉、曳鳳鳥。(一人の金蓮を冠し、紫綃を披ひ、紅玉を佩ひ、鳳鳥を曳くを見る。)」と。

3 花影四廂新浴後 4 輦簾風動海初潮

[四廂] 四方、周囲。唐・張籍「学仙」詩に「先生坐中堂、弟子跪四廂(先生は中堂に坐し、弟子は四廂に ^{ひざまづ}跪く)」と。

〔新浴〕語は『楚辞』漁父辞に「新沐者必彈冠、新浴者必振衣（新たに沐する者は必ず冠を弾き、新たに浴する者は必ず衣を振ふ）」と見えるが、ここは海水浴を終えたばかり、の意。

〔輓簾〕布など柔らかなもので作ったカーテン。「輓」は「軟」の異体字。

〔風動〕風が動かす。南朝梁・沈約「」

〔海初潮〕潮が満ち始めたばかり。清・黄遵憲「歳暮懷人詩」三十六首其二十九に「珠江月上海初潮、酒侶詩朋次第邀（珠江 月 上り 海 初めて潮し、酒侶 詩朋 次第に邀ふ）」と。

（自注）

〔海水浴場〕『明治事物起源 7』病医部「海水浴場の始め」に「潮水に浴して病を治療することはすでに神代に始まり、古事記にもそのこと見ゆ。明治後、はじめて海水浴場の設備あり。直接に病を治すといふよりも、主として道楽の目的にて、今日の盛を致せり。」とあるように、日本では明治10年頃から主に医療目的で海水浴が行われ始め、明治の終わり頃には娯楽として楽しめるようになったようである。品川の大森海岸に海水浴場が開かれたのは明治24年頃のこと。

「東京雑事詩」七十三首其十八

【本文及び書き下し】

- 1 五月蒲人解辟邪 五月 蒲人 解く邪を辟き
- 2 更開黄屋建高牙 更に黄屋を開き高牙を建つ
- 3 生児不相淮陰背 生児 淮陰の背くを相けざれ
- 4 赤幟分明属漢家 赤幟 分明 漢家に属す

（自注）俗生児、毎五月五日為張幟於門上、繪鯉魚形曰五月幟、示武也。故以端陽為男児節。（俗に児を生まば、五月五日毎に為に幟を門上に張り、鯉魚の形を絵きて五月幟と曰ひ、武を示すなり。故に端陽を以て男児節と為す。）

【日本語訳】

- 1 五月の菖蒲人形は男の子のために邪気を祓うことができるばかりでなく
- 2 大きくなったら、王侯の宮殿を開いたり、將軍の旗を立てたりすることを願う
- 3 生まれたばかりの男の子が、どうか韓信が謀反を起こしたのを助けませんように
- 4 赤い五月幟が漢王朝に帰属することははっきりしているのだから

（自注）俗に男の子が産まれると、毎年五月五日にのぼりを玄関先に立て、鯉の絵を描いて五月幟と呼んで、将来の武勇を示す。そこで、端午の節句を男の子の節句という。

【押韻】「邪」「牙」「家」、下平六麻韻。

【語釈】

- 1 五月蒲人解辟邪 2 更開黄屋建高牙

[蒲人] 菖蒲人形の別称。『佩文韻府』卷十一之二「艾人」に引く『歳時記』に「楚人午日懸蒲人・艾人於門以禳毒氣。(楚人 午日 蒲人・艾人を門に懸けて以て毒氣を禳^{はら}ふ。)」とある。

『荆楚歳時記』には「五月五日、謂之浴蘭節。四民並蹋百草之戲。採艾以為人懸門戸上、以禳毒氣。以菖蒲或、鏤或屑以泛酒。(五月五日、之れを浴蘭節と謂ふ。四民 並びに蹋^{たふ}百草の戲あり。艾を採りて以て人を為り門戸の上に懸けて、以て毒氣を禳ふ。菖蒲を以て或いは鏤^{きざ}み或いは屑^{こな}にして以て酒に泛^{うか}ぶ。)」とほぼ同じ内容が見えるが、「蒲人」の語は見えない。

[辟邪] 人に害を為す妖しげなものを祓い除ける。宋・李石『続博物志』に「陶隱居云、『学道之士、居山宜養白犬・白鷄、可以辟邪』。(陶隱居 云ふ、『道を学ぶの士、山に居れば宜しく白犬・白鷄を養ふべし。以て邪を辟^さくべし』と。))」。

[黄屋] 帝王の住む宮殿。『太平御覽』卷四三一人事部・儉約に引く漢・応劭『風俗通』に「殷湯寐寢黄屋、駕而乘露輿。(殷湯 黄屋に寐寢し、駕して露輿に乗る。)」とある。また、明・李夢陽「鄱陽湖十六韻」に「水上開黄屋、雲中下赤烏(水上に黄屋を開き、雲中より赤烏下る)」と。

[高牙] 將軍の旗。晋・潘岳「閔中詩」(『文選』卷二十)に「桓桓梁征、高牙乃建(桓^{くわん}桓^{くわん}たる梁征、高牙 乃ち建てり)」とあり、李善注に「牙、牙旗也。兵書曰、『牙旗、將軍之旗』。(牙、牙旗なり。『兵書』に曰く、『牙旗、將軍の旗なり』と。)」とある。

3 生兒不相淮陰背 4 赤幟分明属漢家

[生兒] 男の子を出産する。ここは生まれたばかりの男の子の意で用いる。

[淮陰背] 淮陰は漢の韓信(？～前196)。張良、蕭何と並ぶ高祖劉邦の功臣。淮陰(江蘇省)の出身。天才的な軍略家であり、趙・斉の地を攻略して漢の優勢を導き、斉王に封ぜられたが、漢が天下を統一すると楚王に移され、ついで反逆の疑いで淮陰侯に落とされ、前196年、呂後の策略で滅ぼされた。

[赤幟] 漢の旗。『史記』淮陰侯列伝に描かれる次のようなエピソードに基づく。韓信が漢軍を率いて趙を攻撃した時、井陘口に到着する直前、輕騎二千人を選び、ひとりひとりに赤幟を持たせ、近道をして趙軍の砦近くにひそませた。そして、背水の陣を敷いて趙を誘い込み、趙軍が出撃すると、漢軍は逃げるふりをした。すると趙軍は砦を空にして追撃した。韓信が出撃させた伏兵二千騎は、趙軍が砦を空にして戦利を追い掛けたので、趙の砦に侵入し、「皆拔趙旗、立漢赤幟二千。(皆な趙の旗を抜き、漢の赤幟二千を立つ。)」趙軍は進撃したけれども勝利を挙げることができず、砦に帰ろうとすると、砦の中はすべて漢軍の赤い幟だったので、「漢皆已得趙王・将矣。(漢 皆な已に趙の王・将を得たり。)」と大いに驚き、かくて趙軍は潰滅してしまった。

[属漢家] 漢王朝に帰属している。「漢家」は漢朝、漢室。唐・王維「送宇文三赴河西充行軍司馬」に「蒲類成秦地、莎車属漢家(蒲類は秦地と成り、莎車は漢家に属す)」と。

(自注)

[絵鯉魚形曰五月幟] 鯉のぼり。黄遵憲「日本雜事詩」其九十五にも「五月吾妻橋上望、画旗争颺鯉魚風(五月 吾妻橋上より望めば、画旗 争ひて颺^{あが}る 鯉魚の風)」と端午の節句について詠

じており、その自注に「初生、逢五月、製旗如鯉、高挿門楣、以祝子。或曰、『取鯉登龍門之意』。(初めて生まれ、五月に逢はば、旗を製ること鯉の如くし、高く門楣に挿して、以て子を祝す。或いは、『鯉の龍門を登るの意を取る』と曰ふ。))」と。「五月幟」は、5月5日の端午の節句に戸外にたてるのぼり。江戸時代には鍾馗などの武者絵を描いたが、後に鯉の滝登りの絵が流行し、明治には今日の鯉のぼりになった。

[端陽] 端午。清・富察敦崇『燕京歳時記』端陽に「京師謂端陽為五月節、初五日為五月単五、蓋端字之転音也。(京師 端陽を謂ひて五月節と為し、初五日を五月単五と為すは、蓋し端字の転音ならん。))」と。

「東京雑事詩」七十三首其十九

【本文及び書き下し】

- 1 旅行西去路漫漫 旅行して 西に去けば 路 漫漫として
- 2 地入函根夏亦寒 地 函根に入れば 夏も亦た寒し
- 3 海日五更窓底出 海日 五更 窓底より出で
- 4 万山飛瀑捲簾看 万山 飛瀑 簾を捲きて看る

(自注) 函根距京師約四百里、地有温泉、避暑最適。都人士咸趨之、因以成市。(函根 京師を距つこと約四百里、地に温泉有り、避暑に最も適す。都人士 咸之れに趨り、因りて以て市を成す。)

【日本語訳】

- 1 西に旅をすると、道は長く遠く
- 2 やがて地が箱に入るので、夏でも寒い
- 3 明け方には海上の太陽の光が窓から射し込み
- 4 周囲の山々や滝はカーテンを巻き上げて眺める

(自注) 箱根は都から約四百里、土地に湯泉があつて、暑さを避けるには最適である。都でやや余裕のある者は誰もが行くので、市が立つほどである。

【押韻】「漫」「寒」「看」、上平十四寒韻。

【語釈】

1 旅行西去路漫漫 2 地入函根夏亦寒

[旅行] 古くは集団で行動することだったが、唐代には旅をするという意味で用いられるようになったようである。唐・耿湜「客行贈人」詩に「旅行雖別路、日暮各思帰(旅行 路を別にすと雖も、日暮 各おの帰るを思ふ)」と。

[西去路漫漫] 西へ向かう道は長く遠い。宋・蘇軾「王定国自彭城往南都、時子由在宋幕、求家書、僕醉不能作、独以一絶句与之(王定国 彭城より南都に往き、時に子由 宋の幕に在りて、家書

を求むるも、僕 酔ひて作る能はず、独だ一絶句を以て之れに与ふるのみ)」詩に「王郎西去路漫漫、野店無人霜月寒（王郎 西に去りて 路 漫漫、野店 人無く 霜月 寒し）」とある。
[地入函根]「函根」は「箱根」とも。ここは、地勢が箱の底の方に入っているの、と洒落てみた。

3 海日五更窓底出 4 万山飛瀑捲簾看

[海日] 海上の太陽。唐・李白「夢遊天姥吟留別（夢に天姥^{てんぼ}に遊ぶの吟 留別))」に「半壁見海日、空中聞天鷄（半壁 海日を見、空中 天鷄を聞く）」と。

[五更] 一晚を初更(甲夜)、二更(乙夜)、三更(丙夜)、四更(丁夜)、五更(戊夜)の五等分した内の、最後の時刻。夜明け前頃。

[窓底]「底」は「裏」、内側の意。唐・劉言史「葛巾歌」に「草堂窓底漉春醅、山寺門前逢暮雨（草堂 窓底 春醅^{はい}を漉し、山寺 門前 暮雨に逢ふ）」と。

[万山飛瀑] 多くの山々と滝。明・曹学佺編『石倉歷代詩選』卷四百八十五に引く明・顧応祥「漳水合流為張西林郡守賦」詩に「千山飛瀑響雷車、雨後洪濤勢轉加（千山 飛瀑 響き 雷車のごとく、雨後 洪濤 勢ひ 転^{うた}た加はる）」と見え、「○山飛瀑画」の形でしばしば画題とされる。

[捲簾看] カーテンを巻き上げて眺める。語は唐・崔顥「代閨人答輕薄少年」詩に「桃李花開覆井欄、朱樓落日捲簾看（桃李 花 開きて 井欄^{おほ}を覆ひ、朱樓 落日 簾^{すだれ}を捲きて看る）」と見えるが、ここは白居易「香爐峰下新卜山居、草堂初成、偶題東壁（香爐峰下に新たに山居を卜し、草堂 初めて成り、偶たま東壁に題す）」詩の「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看（遺愛寺の鐘は枕^{そばだ}を 欹てて聴き、香爐峰の雪は簾^はを撥ねて看る）」を意識するだろう。

(自注)

[都人士] 都に住まい、経済的にやや恵まれている人々。『詩経』小雅・都人士に「彼都人士、狐裘黃黃（彼の都人士、狐裘 黃黃たり）」とあり、鄭箋に「古明王時、都人之有士行者。（古への明王の時、都人の士の行ひ有る者なり。）」と。

[成市] 市場と同じように人で賑わう。漢・鄒陽「上書呉王」（『漢書』鄒陽伝・『文選』卷三十九）に「夫全趙之時、武力鼎士、絃服叢台之下者、一旦成市。（夫れ全趙の時、武力鼎士、叢台の下に絃服^{げんぷく}する者、一旦 市を成す。）」と。

「東京雜事詩」七十三首其二十

【本文及び書き下し】

- 1 羽扇揮車過五陵 羽扇 車を揮^{ふる}ひて 五陵を過ぎ
- 2 翠微宮闕影層層 翠微の宮闕 影 層層
- 3 御門六月槐陰暗 御門^{ごもん} 六月 槐陰^{くわいいん} 暗く
- 4 日午銅街叫売氷 日午 銅街 売氷 叫ぶ

(自注) 皇城外環以高墜、鑿數門、寶通出入曰御門。聞為先代旧築。所存古樹下、每見有売氷者、

望之生涼。(皇城の外 環らずに高壘を以てし、数門を鑿ち、竇通して出入するを御門と曰ふ。先代の旧築^た為りと聞く。存する所の古樹の下、毎に氷を売る者有るを見、之れを望まば涼を生ず。)

【日本語訳】

1 ゆったりと車に指図して、皇城の辺りに通り掛かると

2 木々の緑に囲まれた宮殿は輪郭が幾重にも重なり合っている

3 皇城の門は六月になると、葉が青々と生い茂るエンジュの陰^{かげ}になって薄暗く

4 昼日中の繁華街では氷売りの声が響く

(自注) 皇城の外周は高い土塁がめぐらせてあり、そこに数門が設けられ、くぐり抜けて出入りするようになっているのを御門という。先の御代の建築だと耳にしている。今も残っている古い樹木の下には、いつも氷を売る者を見掛け、眺めていると涼しくなる。

【押韻】「陵」「層」「氷」、下平十蒸韻。

【語釈】

1 羽扇揮車過五陵 2 翠微宮闕影層層

[羽扇揮車] 白羽扇でゆったりと車に指図する。『晋書』顧榮伝に「榮廢橋斂舟於南岸、敏率万余人出、不獲濟、榮麾以羽扇、其衆潰散。(榮 橋を廢し舟を南岸に斂^{をさ}むれば、敏 万余人を率ゐて出づるも、濟るを獲^{わた}ず、榮 麾^えくに羽扇を以てし、其の衆 潰散す。)」とある記事から、「羽扇揮兵」でゆったりと指揮し、敵に勝利することを表すようになった。顧榮は羽扇をなびかせて、敵軍を潰走させた。

[五陵] 長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵の五県を合わせた呼び名。いずれも渭水の北岸にあった。今の陝西省咸陽市の近郊。前漢の五人の陵墓があった所。漢の元帝以前は陵墓を造るたびにあらこちらの富豪や外戚を移住させて、園陵に供奉させた。『漢書』游侠伝・原涉に「郡国諸豪及長安・五陵諸為気節者、皆歸慕之。(郡国の諸豪 及び長安・五陵の諸もろの気節を為す者、皆な歸して之れを慕ふ。)」とあり、顔師古注に「五陵、謂長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵也。班固『西都賦』曰『南望杜・霸、北眺五陵』。是知霸陵・杜陵非此五陵之数也。而説者以為高祖以下至茂陵為五陵、失其本意。(五陵は、長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵を謂ふなり。班固『西都賦』に『南のかた杜・霸を望み、北のかた五陵を眺む』と曰ふ。是れ霸陵・杜陵は此の五陵の数に非らざるを知るなり。而も説く者 以て為高祖より以下 茂陵に至るまでを五陵と為すは、其の本意を失せり。)」とある。班固「西都賦」(『文選』卷一)に「若乃觀其四郊、浮遊近県、則南望杜・霸、北眺五陵。(若し乃ち其の四郊を觀、近県に浮遊すれば、則ち南のかた杜・霸を望み、北のかた五陵を眺む。)」という。ここは、貴顕の住まう地域の意で用いており、自注「皇城」の語からすると、皇居周辺をいう。

[翠微] 緑に掩われた山の中腹。唐・王維「敕借岐王九成宮避暑、応教(敕して岐王に九成宮を借

し避暑せしむ、応教)」詩に「帝子遠辞丹鳳闕、天書遥借翠微宮（帝子 遠く辞す丹鳳の闕、天書 遥かに借す 翠微の宮）」とある。後に広く山間に建つ宮殿を意味するようになる。ここは、夏の木々の緑に囲まれた皇居。

3 御門六月槐陰暗 4 日午銅街叫売氷

〔御門〕ここは「自注」にあるように皇居の門をいう。

〔槐陰〕古来、中国の宮中にはエンジュが植えられた。『周礼』秋官・朝士に「面三槐、三公位焉。（面の三槐には、三公 位す。）」と見え、後には「三槐」が「三公」を意味するようになる。王維「資聖寺送甘二」詩に「柳色蘸春余、槐陰清夏首（柳色は春余に蘸として、槐陰は夏首に清し）」と。皇居の周囲には実際に槐の並木道がある。

〔日午〕正午。唐・柳宗元「夏昼偶作」詩に「日午独覺無余声、山童隔竹敲茶臼（日午 独り覺ゆ 余声無く、山童の竹を隔てて茶臼^{たた}を敲くを）」と。

〔銅街〕洛陽にあった銅駝街。晋・陸機『洛陽記』に「洛陽有銅駝街、漢鑄銅駝二枚、在宮南、四会道相對。俗語曰、『金馬門外聚衆賢、銅駝陌上集少年』。（洛陽に銅駝街有り、漢鑄の銅駝二枚、宮の南に在り、四会の道に相ひ対す。俗語に曰く、『金馬門外に衆賢^{あつ}聚まり、銅駝陌上に少年集ふ』。）」（「四会」、『太平御覽』卷百五十八作「西会」、拠『太平寰宇記』卷三改。「聚衆賢」、『御覽』作「集」、拠『說郛』卷六十一上改。）と見える。後に「銅街」が繁華な通りの意で用いられるようになる。『芸文類聚』卷十八に引く南朝梁・沈約「麗人賦」に「狹斜才女、銅街麗人。」とある。

（自注）

〔皇城〕皇居。1868（慶応4）年、江戸城が新政府軍に明け渡され、東京^{とうけいじょう}城と改名された。翌1869（明治2）年、皇城と称されることとなり、1948（昭和23）年、皇居と改称された。

〔寶通〕「寶」は、あなを通すの意。ここは門をくぐり抜けること。

「東京雜事詩」七十三首其二十一

【本文及び書き下し】

- 1 半閒宰相老風流 半閒の宰相 老風流
- 2 修得功名到白頭 功名を修得^{しゅとく}して白頭に到る
- 3 仙子樓台人富貴 仙子の樓台 人 富貴
- 4 教坊争説牡丹侯 教坊 争ひて説く 牡丹侯

（自注）伊藤相国、風流放誕、至老益肆、難伎苦之。号牡丹侯、時未進公爵也。後以難死哈爾賓。

（伊藤相国、風流放誕、老ゆるに至りて益^{ます}す 肆^{ほしいまま}にし、難伎^{すうぎ}之れに苦しむ。牡丹侯と号し、時に未だ公爵に進まざるなり。後に難を以て哈爾賓^{ハルビン}に死す。）

【日本語訳】

- 1 南宋の賈似道のような宰相は老いてなお勝手気儘
- 2 功績をたて名誉を得る道を修行して白髪頭になった
- 3 仙人が住まう楼台が建ち並ぶ日本では、人までが富貴で
- 4 妓楼では競って牡丹侯のことを話題にする

(自注) 伊藤総理は、豪放磊落な性格で、老いてますます勝手気儘になり、半玉はそれに苦しめられた。牡丹侯と呼ばれたが、当時はまだ公爵に進んでいなかった。後にハルビンで難に遭って客死した。

【押韻】「流」「頭」「侯」、下平十尤韻。

【語釈】

1 半閒宰相老風流 2 修得功名到白頭

[半閒] ここは半閒堂をいう。半閒堂は南宋末期の賈似道が今の杭州市西湖の西に作った堂の名。

宋・周密『齊東野語』賈相寿詞に「賈師憲当国日、臥治湖山、作堂曰半閒。(賈師憲 国に当たるの日、臥して湖山を治め、堂を作りて半閒と曰ふ。)」と見える。賈似道、字は師憲、『宋史』でも姦臣伝に収められるほど後世の評判は悪い。後に「半閒」「半閒堂」で賈似道その人を指したり、広く姦臣を意味するようになった。

[風流] 洒脱で磊落。『後漢書』方術伝論に「漢世之所謂名士者、其風流可知矣。(漢の世の所謂名士なる者、其の風流 知るべし。)」と見える。鈴木修次氏『『風流』考』(『中国文学と日本文学』 東京書籍 1978)に詳しい。後には情事を意味するようになる。また、正岡子規『松蘿玉液』に「風流宰相」なる記事があり、そこで牡丹侯伊藤博文について述べている。

[修得到]「修得」はもと仏教語。道を修行すること。転じて、学問や技術などを習い覚えて身に付ける。宋・謝枋得「武夷山中」詩に「天地寂寥山雨歇、幾生修得到梅花(天地 寂寥として山雨 歇み、幾生か 修得して梅花に到る)」とあり、「修得到～」は修行を積んで～の境地に到達するというような意味で用いられる。ここには伊藤博文への皮肉が込められているのだろう。

[白頭] 白髪頭、また老年。唐・張籍「胡山人帰王屋因有贈」詩に「転転無成到白頭、人間拳眼尽堪愁(転転として成る無く 白頭に到り、人間 拳眼 尽く愁ふるに堪ふ)」と。

3 仙子楼台人富貴 4 教坊争説牡丹侯

[仙子楼台]「仙山楼閣」に同じ。ここは日本を指す。『史記』封禅書に「自威・宣・燕昭使人入海求蓬萊・方丈・瀛洲。此三神山者、其傳在勃海中、……、蓋嘗有至者、諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸尽白、而黄金・銀為宮闕。(威・宣・燕昭より人をして海に入り蓬萊・方丈・瀛洲を求めしむ。此の三神山は、其の傳して勃海の中に在り、……、蓋し嘗て有至る者有り、諸もろの僊人及び不死の藥 皆な焉に在り。其の物 禽獸 尽く白くして、黄金・銀もて宮闕と為す。)」とあり、白居易「長恨歌」に「忽聞海上有仙山、山在虚無縹緲間。楼閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子(忽ち聞く 海上に仙山有りと、山は虚無縹緲の間に在り。楼閣 玲瓏として 五

雲 起こり、其の中に綽約として仙子多し)」とあって、後に日本に比せられるようになった。
[教坊] もとは唐代、宮中の歌舞や音楽の専門家を養成するための官署だったが、白居易「琵琶引」に「十三学得琵琶成、名属教坊第一部（十三にして琵琶を学び得て成り、名は教坊第一部に属す）」とあるように、妓女が歌舞音曲の訓練を受ける教習所を指すようになり、さらには妓楼を意味するようになった。

[牡丹侯] 伊藤博文は1898（明治31）年に現在の横浜市金沢区の野島公園内に金沢別邸を建てた。邸内の牡丹園は有名で、今でも4月末から5月初めにかけて「ぼたん祭り」が開催されている。

（自注）

[伊藤] 伊藤博文（1841～1909）。彼の女好きは当時から有名であった。黄遵憲も「続懷人詩」十六首其一（1892年の作）で伊藤博文とのタバコに関する会話を詩に描いており、その自注に「君能通古今事、多智謀、口含煙不輟。嘗問余、『哥倫坡得南北美洲、始有淡巴菰、今四百年耳。而華人乃有蔦字・菸字、何故』。余言『蔦本香草、菸為敗葉、皆假借字』。君意积然。（君 能く古今の事に通じ、智謀多く、口に煙を含んで輟めず。嘗て余に問ふ、『哥倫坡 南北の美洲を得て、始めて淡巴菰^{たばこ}有り、今 四百年なるのみ。而も華人 乃ち蔦字・菸字有り、何の故ぞ』と。余言ふ『蔦は本香草、菸は敗葉^{もと}為り、皆な假借字』と。君の意 积然たり。）」と記す。

[相国] 宰相。『戦国策』東周策に「昭献在陽翟、周君将令相国往、相国将不欲。（昭献 陽翟に在り、周君 将に相国をして往かしめんとするも、相国 将に欲せざらんとす。）」と見える。

[放誕] 勝手気儘に振る舞う。『世説新語』任誕に「阮籍乃求為步兵校尉。（阮籍 乃ち求めて歩兵校尉と為る。）」とあり、劉孝标注は晋・張隱『文士伝』に「籍放誕、有傲世情、不樂仕宦。（籍 放誕にして、世に傲^{おご}るの情有り、仕宦を楽しまず。）」と。

[難伎] 和語。まだ一人前になっていない芸者。半玉。

[公爵] 伊藤博文が侯爵に進んだのは1895（明治28）年、公爵は1907（明治40）年。

[難死哈爾賓] 1909（明治42）年10月、ロシア帝国蔵相ココフツォフと満州・朝鮮問題について非公式に話し合うために訪れたハルビン駅で、民族運動家安重根によって狙撃され死亡した。

「東京雑事詩」七十三首其二十二

【本文及び書き下し】

- 1 宮禁争伝艶事新 宮禁 争ひて伝ふ 艶事の新たなるを
- 2 掖庭麗市号多春 掖庭 麗市 春多きを号^{さけ}ぶ
- 3 相公垂老功名重 相公 老いに垂^{なん}んとして 功名 重し
- 4 金印何堪換美人 金印 何ぞ堪^たへん 美人に換^かふるに

（自注）田中宮相、見少女小林某惑之、欲以為妻。朝議非之、遂掛職去曰、「一宮内大臣足以嚇老夫哉」。（田中宮相、少女 小林 某^{なにがし}を見て之れに惑ひ、以て妻と為さんと欲す。朝議 之れを非とし、遂に職を掛けて去りて曰く、「一宮内大臣 以て老夫を嚇^{おど}すに足りんや」と。）

【日本語訳】

- 1 宮中では新しいスキャンダルを競うように伝え
- 2 宮内省での事は、やんごとなき方々も市井の人々も女好きにもほどがあると叫んでいる
- 3 大臣は老境も近く、功績も名声も重きをなしているのに
- 4 官職は美女と交換することができようか

（自注）田中宮内大臣は、うら若い女性、小林某を目にして溺れてしまい、妻に迎えようとした。

朝廷での会議はこれを正しくないとしたので、職を辞して言うには「たかが宮内大臣の職が、どうしてこの老人をおびやかすことができようか」と。

【押韻】「新」「春」「人」、上平十一真韻。

【語釈】

1 宮禁争伝艶事新 2 掖庭麗市号多春

〔宮禁〕宮中。漢以後、皇帝の居処をいう。『後漢書』皇后紀上・和熹鄧皇后に「宮禁至重、而使外舍久在内省、…、誠不願也。（宮禁 至って重し、而るに外舍をして久しく内省に在らしむるは、…、誠に願はざるなり。）」と。一句、杜甫「奉贈韋左丞丈二十二韻」の「毎於百僚上、猥誦佳句新（毎に百僚の上に於いて、猥りに誦す 佳句の新たなるを）」を意識するか。

〔艶事〕色ごと、情事。中国の古典にはほとんど見当たらない。

〔掖庭〕後宮を管理する役所。ここは宮内省を指す。『後漢書』百官志三に「掖庭令一人、六百石。本注曰、宦者。掌後宮貴人采女事。（掖庭令 一人、六百石。本注に曰く、宦者なり。後宮の貴人・采女の事を掌る、と。）」。

〔麗市〕都のやんごとなき方々も市井の人々も。他に用例が見当たらないが、例えば元・李好文『長安志図』序に「城郭宮室之巨麗、市井風俗之阜繁。（城郭 宮室の巨麗、市井 風俗の阜繁。）」とあるのに基づく表現だろうと解した。

〔多春〕「多春思」に同じ。唐・楊巨源「崔娘詩」に「風流才子多春思、腸断蕭娘一紙書（風流才子 春思多く、腸は断たる 蕭娘 一紙の書）」と。「春思」は春のものの思いのことだが、ここは恋心の意。

3 相公垂老功名重 4 金印何堪換美人

〔相公〕宰相に対する敬称。魏・王粲「從軍詩」（『文選』卷二十七）に「相公征関右、赫怒震天威（相公 関右を征し、赫怒 天威を震ふ）」とあり、李善注に「曹操為丞相、故曰相公也。（曹操 丞相為り、故に相公と曰ふなり。）」と。

〔垂老〕老境に近付く。唐・杜甫「垂老別」に「四郊未寧靜、垂老不得安（四郊 未だ寧靜ならず、老ゆるに 垂んとして安らかなるを得ず）」と。

〔金印〕帝王や高官の金の印璽。転じて官職を指す。唐・杜甫「陪李梓州王閬州蘇遂州李果州四使

君登恵義寺」詩に「誰能解金印、瀟灑共安禪（誰か能く金印を解き、瀟灑^{せうしや}として共に安禪せん）」とある。

[何堪] どうして～できようか。

[換美人] 美しい女性と交換する。元・宋無「席上贈歌者」詩に「家徒四壁門如水、那得明珠換美人（家は徒^ただ四壁のみにして 門は水の如し、那^{なん}ぞ明珠を得て美人に換へん）」と。

（自注）

[田中宮相] 田中光顕^{みつあき}、一八四三（天保十四）年～一九三九（昭和十四）年、土佐の人。一八九八（明治三十一）年宮内大臣となり、一九〇九（明治四十二）年一月、六十七歳になる田中が当時二十一歳だった小林孝子を後妻に迎えようとしているという記事が新聞紙上を賑わせ、周囲から猛反対されたばかりでなく、宮内大臣の職も辞することになった。

[掛職] 現代中国語では、出向する、本来の職場に籍を置いたまま臨時に他の職務を担当することだが、ここは「挂冠」の意で用いると解した。晋・袁宏『後漢紀』光武帝紀に「（逢萌）聞王莽居摂、子宇諫、莽殺之。萌会友人曰、『三綱絶矣、禍将及人』。即解衣冠挂東都城門、将家属客於遼東。（〔逢萌〕 王莽 摂に居り、子の宇 諫むるも、莽 之れを殺すを聞く。萌 友人と会して曰く、『三綱 絶えり、禍ひ将に人に及ばんとす』と。即ち衣冠を解きて東都の城門に挂け、家属^{ひき}を将^{ひき}ゐて遼東に客たり。）」とあり、後に「挂冠」で官職を辞することを表すようになった。「挂冠」は「掛冠」とも。

[老夫] 年老いた男性。『易』大過・九二に「枯楊生稊、老夫得其女妻、无不利。（枯楊^{ひこばえ} 稊を生ず、老夫 其の女妻を得たり、利あらざる^な無し。）」とあるのを意識するのかもしれない。

「東京雑事詩」七十三首其二十三

【本文及び書き下し】

- 1 帳幅青紗論女権 帳幅 青紗 女権を論じ
- 2 未甘嚙口学寒蟬 未だ口を嚙んで寒蟬に学ぶに甘んぜず
- 3 維摩病後雄談減 維摩 病後 雄談 減じ
- 4 姉妹双携拜弁天 姉妹 双つながら携^{たづさ}へて 弁天を拝す

（自注）俗貴男賤女。女好媚鬼神。弁天祠在上野公園内、祀弁才天。遊公園者、争拝之、以乞慧。

（俗 男を貴び女を賤^{いや}しむ。女 好んで鬼神を媚す。弁天祠 上野公園内に在り、弁才天を祀^{まつ}る。公園に遊ぶ者、争ひて之れを拝して、以て慧を乞ふ。）

【日本語訳】

- 1 青い薄絹のカーテンのような森で女性の権利について論じ
- 2 秋の蟬のまねをして黙っているようなことはしない
- 3 維摩詰は病を得てから、盛んな議論は減ったのに
- 4 若い女性たちは手をつないで弁才天を拝んでいる

(自注) 俗習では男性が貴ばれ女性は賤しまれる。女性は好んで神様を拝む。弁天堂は上野公園の中にあって、弁才天を祀っている。公園を訪れる者は、競って拝み、智恵を授かろうとする。

【押韻】「権」「蟬」「天」、下平一先韻。

【語釈】

1 帳幅青紗論女権 2 未甘噤口学寒蟬

〔帳幅青紗〕「帳幅」、ベッドの周りにめぐらせたカーテンの裾。「青紗」、青い薄絹。青々と茂った夏の植物がベッドのカーテンのように辺りを取り囲む様子を「青紗帳」と表現する。語は後蜀・閬選「虞美人」詞に「水紋簾映青紗帳、霧罩秋波上（水面の波紋が青い薄絹のカーテンに敷物のように広がり映え、霧が秋の波をおおっている。）」と見える。

〔女権〕women's rightの訳語。日本では明治20年頃から用いられたようである。『漢語大詞典』は陳家鼎（1876～1928）の「洞庭湖中感唐希陶見贈原韻酬之」に「民権容易女権難、一葉危舟渡此関（民権は容易なるも 女権は難く、一葉の危舟 此の関を渡る）」とあるのを引く。

〔噤口〕口を閉じてものを言わない。『史記』袁盎晁錯列伝に「且臣恐天下之士噤口、不敢復言也。（且つ臣 天下の士の口を噤^{つぐ}み、敢て復た言はざるを恐るるなり。）」と。

〔寒蟬〕秋の蟬。秋が深まると蟬は鳴かなくなるので、問題があって発言しなくなることに喩える。

『後漢書』党錮伝・杜密に「劉勝位為大夫、見礼上賓、而知善不薦、聞惡無言、隱情惜己、自同寒蟬、此罪人也。（劉勝 位は大夫と為り、上賓に礼せらるるも、善を知るも薦めず、惡を聞くも言ふこと無く、情を隠し己れを惜しみ、自づから寒蟬に同じく、此れ罪人なり。）」とあり、李賢注は「寒蟬謂寂默也。（寒蟬 寂默を謂ふなり。）」と言い、『楚辞』九弁の「悲哉秋之為氣也、……。蟬寂漠而無声（悲しい哉 秋の氣^た為るや、蟬 寂漠として声無し）」を引く。

3 維摩病後雄談滅 4 姉妹双携拜弁天

〔維摩病後雄談滅〕「維摩」は維摩詰^{ゆい ま きつ}、初期大乘仏教經典の一つ『維摩經』の中心人物。中部インドの都市、バイシャーリー（毘耶離）の富裕な在家信者（居士）、ヴィマラキールティ。釈迦がバイシャーリーの近くで説法をしていたが、維摩詰は病のために参席できなかった。釈迦は弟子たちに「汝行詣維摩詰問疾。（汝 行きて 維摩詰に詣り疾^{いた}ひを問へ。）」（『維摩詰所説經』弟子品第三）と命じるが、いずれも維摩詰に論破される経験があったため辞退したので、文殊菩薩が代表となって見舞いに行く。維摩詰の居室では「不二法門」について議論が交わされるが、最後に文殊菩薩が維摩詰に訊ねると、「時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰、『善哉、善哉。乃至無有文字語言。是真入不二法門』。（時に維摩詰 默然として言無し。文殊師利 歎じて曰く、『善い哉、善い哉。乃至 文字語言有ること無し。是れ真に不二の法門に入る』と。）」（入不二法門品第九）と、維摩詰は沈黙によって答えた。

〔双携〕「携」は手をつなぐ。

[弁天] 弁才天。仏教で智恵、弁舌、技芸の女神。サンスクリット語のサラスバティーの訳。ここは自注にあるように、上野恩賜公園の不忍池に浮かぶ弁天堂を指す。

(自注)

[媚鬼神] 神を崇拝する。宋・洪邁『夷堅志』丁卷九・王直夫に「兗州萊蕪人王直夫、雖出於田家、而賦性剛介、不媚鬼神。(兗州萊蕪の人 王直夫、田家に出づと雖も、賦性 剛介にして、鬼神を媚せず。)」と見える。

「東京雜事詩」七十三首其二十四

【本文及び書き下し】

- 1 箇中影事費疑猜 箇の中の影事 疑猜を費やし
- 2 汗膩生綃午夢回 汗膩 綃に生じて 午夢より回る
- 3 九陌春雲高不落 九陌 春雲 高くして落ちず
- 4 紅闌風雨稻荷来 紅闌 風雨 稻荷より来たる

(自注) 俗媚狐。稻荷、狐神名、能為人崇。(俗 狐を媚す。稻荷、狐神の名、能く人に崇りを為す。)

【日本語訳】

- 1 夢の中の幻のような出来事をムダに疑ってしまい
- 2 昼寝から目覚めると脂汗が薄絹を濡らしていた
- 3 東京の空に春の雲が厚く広がっているが雨はまだ降っていない
- 4 若い女性たちの噂話は稻荷から広がる

(自注) 俗習では狐を祀る。稻荷は狐神の名で、人を崇めることができる。

【押韻】「猜」「回」「来」、上平十灰韻。

【語釈】

1 箇中影事費疑猜 2 汗膩生綃午夢回

[箇中影事] 「箇中」、この中。塩見邦彦『唐詩口語の研究』(中国書店 一九九五)に

『詩語解』卷下によると、「箇中」は「此中」と同じであるとし、『助語審象』では「就中」と同じであるとする。しかし「就中」は「なかんずく、とりわけ」の意であり、『助語審象』の方は誤りである。この「箇中」は唐詩では寒山詩の二例のみであった。

不識箇中意、逐境乱紛紛(寒山詩)

若得箇中意、縦横处处通(寒山詩)

とある。「影事」、仏教語。俗世間のあらゆる事物が夢幻に過ぎないことをいう。『宏智禪師広録』卷六に「俱現尽是箇中影事。的的体取。(俱現は尽く是れ箇の中の影事なり。的的として体

取す。)」と。ここは第2句「午夢」、昼寝の間に見た夢を喩える。

[汗膩] ここは昼寝から覚めた時の脂汗。元・貫雲石「美人篇」に「肌濃汗膩朱粉勻、背人揮淚粧無痕（肌は濃く汗は膩らかに 朱粉 勻しく、人に背きて涙を揮ひ 粧 痕無し）」と見える。

[生絹] まだ漂白されていない絹織物。

[午夢回] 昼寝から覚める。宋・范成大「午窓遣興家人謀過石湖」詩に「燠爐花氣朝醒解、茶鼎松風午夢回（燠爐 花氣 朝醒 解け、茶鼎 松風 午夢より回る）」と。

3 九陌春雲高不落 4 紅閨風雨稻荷来

[九陌] 東京の大通り。漢の長安に九本の大通りがあったことから、都会の大通りや繁華街を意味するようになった。唐・駱賓王「帝京篇」に「三条九陌麗城隅、万戸千門平旦開（三条 九陌 城隅に麗き、万戸 千門 平旦に開く）」と。

[春雲高不落] 春の雲は厚いが雨はまだ降っていない様子。宋・蘇軾「四時詞」に「春雲陰陰雪欲落、東風和冷驚羅幕（春雲 陰陰として 雪 落ちんと欲し、東風 冷たきと和して 羅幕を驚かす」とある。次句の「風雨」に対応する。

[紅閨風雨]「紅閨」は「紅樓」に同じく若い女性が住まうところ。唐・王諱「後庭怨」に「君不見紅閨少女端正時、夭夭桃李仙容姿（君 見ずや 紅閨の少女 端正なりし時、夭夭たる桃李 仙容の姿を）」と。「風雨」はあまりよくない様々な噂。宋・釈惠洪『冷齋夜話』巻四に、臨川の謝無逸が潘大臨に詩の新作があるかどうかを書簡で問い合わせたのに対し、潘大臨は

……。「秋来景物、件件是佳句、恨為俗氛所蔽翳。昨日閒卧、聞攪林風雨声、欣然起、題其壁曰、『滿城風雨近重陽』。忽催租人至、遂敗意。止此一句奉寄」。……。（……。「秋来 景物、件件 是れ佳句なるも、俗氛の蔽翳する所と為るを恨む。昨日 閒卧して、林を攪すの風雨の声を聞き、欣然として起ち、其の壁に題して曰く、『滿城 風雨 重陽近し』と。忽ち催租の人 至り、遂に意を敗る。止だ此の一句のみ寄せ奉らん」と。……。）

と答えたという記事を載せる。後に「滿城風雨」の語は噂話があつという間に広がることを意味するようになった。ここは「紅閨風雨」でうら若い女性たちの噂話、と解した。

「東京雜事詩」七十三首其二十五

【本文及び書き下し】

- 1 知郎蛩語解姪隅 知る 郎の蛩語の姪隅を解するを
- 2 欲寄相思字態殊 相思に寄せんと欲して 字態 殊なり
- 3 故作諫言欺阿母 故に諫言を作して 阿母を欺き
- 4 艷書屈曲写佞盧 艷書 屈曲として 佞盧を写す

（自注）男女私簡、俗名艷書、亦有書西洋文者、為塗人耳目計也。善書者、日必数通。（男女の私簡、俗に艷書と名づけ、亦た西洋の文を書する者有り、人の耳目を塗らんが為の計なり。善く書する者、日に必ず数通。）

【日本語訳】

- 1 彼氏が外国語を理解できることが分かります
- 2 思い人に手紙を送るにも文字の様子がすてきです
- 3 わざと忠告をするふりでお母さんを騙しておいて
- 4 恋の言葉はくねくね横文字で書いてありますから

(自注) 男女間の私的な手紙を、世間では艶書と呼び、西洋の言葉で書く者もいるが、それは他人の目を欺くための計略である。文章の上手い者は一日に必ず数通も書く。

【押韻】「隅」「殊」「盧」、上平七虞韻。

【語釈】

1 知郎蛮語解媛隅 2 欲寄相思字態殊

[郎] 女性が夫や恋人に呼び掛ける人称代名詞。『世説新語』賢媛に「郝嘉賓喪、婦兄弟欲迎妹還、終不肯歸。曰、『生縦不得与郝郎同室、死寧不同穴』。(郝嘉賓^{ち か ひん} 喪^しし、婦の兄弟 妹を迎へて還らんと欲するも、終に帰るを^{つひ} 肯^{がへん}ぜず。曰く、『生きては縦ひ郝郎と室を同じくするを得ざるとも、死しては寧ぞ穴を同じくせざらんや』と。)」と見える。

[蛮語解媛隅] 自注に「西洋文」とあるように英語など西洋の言語ができること。「蛮語」は中国南方の少数民族の言語。「媛隅」は蛮語で魚の意。『世説新語』排調に「郝隆為桓公南蛮参軍、三月三日会、作詩。不能者、罰酒三升。隆初以不能受罰、既飲、攬筆便作一句云、『媛隅躍清池』。桓問、『媛隅是何物』。答曰、『蛮名魚為媛隅』。桓公曰、『作詩何以作蛮語』。隆曰、『千里投公、始得蛮府参軍、那得不作蛮語也』。(郝隆 桓公の南蛮参軍と為り、三月三日の会に、詩を作る。能はざる者は、罰酒 三升。隆 初め能はざるを以て罰を受け、既に飲むや、筆を攬りて便ち一句を作りて云ふ、『媛隅^{しゅぐ} 清池に^{をど}躍る』と。桓 問ふ、『媛隅とは是れ何物ぞ』と。答へて曰く、『蛮 魚に名づけて媛隅と為す』と。桓公 曰く、『詩を作るに何を以て蛮語を作す』と。隆 曰く、『千里 公に投じて、始めて蛮府の参軍を得たるに、那ぞ蛮語を作さざるを得んや』と。)」とあり、後に「隅隅句」で蛮語を表すようになった。また、「魚」は「吾」と古音が近く、しばしば男女間の情愛のシンボルとして描かれる。例えば古楽府「江南」に「江南可採蓮、蓮葉何田田、魚戲蓮葉間(江南 蓮を採るべし、蓮葉 何ぞ田田たる、魚は戯る 蓮葉の間)」と見える。

[欲寄相思] 恋人に手紙を送る。唐・杜牧「寄遠」詩に「欲寄相思千里月、溪邊殘照雨霏霏(相思に寄せんと欲す 千里の月、溪邊 殘照 雨 霏霏たり)」と。

[字態] 文字のありさま。恋文に書かれた文字の様子。宋・朱長文『墨池編』字学に「字態心之輔也。(字態は心の輔なり。)」と。

3 故作諫言欺阿母 4 艶書屈曲写佞盧

[阿母] 母。「古詩為焦仲卿妻作」(『玉台新詠』卷一)に「府吏得聞之、堂上啓阿母(府吏 之れ

を聞くを得て、堂上 阿母に啓す)」と。

[艶書] 和語。古くは「えんじょ」とも。恋文。

[屈曲] 折れ曲がる様。恋文に用いられた外国語の文字が曲がりくねっていること。

[佉盧] ^{きやろしつた} 佉盧虱吒の略称。佉盧虱吒（カローシュタ）はインドの伝説上の仙人。この仙人が作ったとされる文字を佉盧虱吒書（カローシュティ）といい、紀元前二世紀頃から紀元後三世紀にかけてインド北西部で用いられた。右から左へ横書きした。佉羅、佉楼などとも表記される。南朝梁・僧祐『出三蔵記集』卷一に「昔造書之主凡有三人。長名曰梵、其書右行。次曰佉楼、其書左行。少者蒼頡、其書下行。（昔 書を造るの主 凡そ三人有り。長を名づけて梵と曰ひ、其の書 右行す。次を佉楼と曰ひ、其の書 左行す。少なる者は蒼頡、其の書 下行す。）」とある。アルファベットを「佉盧」の語で表現することは黄遵憲が先行する。例えば「日本雜事詩」其六十三に「至今再变佉盧字、終恨王仁教未工（今に至り再び変ず 佉盧の字、終に恨む 王仁の教へ 未だ 工 ならざるを）」と。

（自注）

[私簡] 私緘、私函とも。私的な書簡の意。中国古典にはあまり用例が見られない。

[塗人耳目] 他人に知られないようにする。『史記』貨殖列伝に「輒近世塗民耳目、則幾無行矣。

（近世を輒き民の耳目を塗れば、則ち 幾 どり行ひ無きなり。）」と。

「東京雜事詩」七十三首其二十六

【本文及び書き下し】

- 1 手摩角枕眼含羞 手づから角枕を摩して 眼は 羞 ひを含み
- 2 春動眉尖帶暗愁 春 眉尖に動きて 暗愁を帶ぶ
- 3 為恐横陳廂髮乱 ^{ため} 為に恐る ^{ひさし} 横陳して 廂髮の乱るるを
- 4 晚妝卸後更梳頭 晚妝 卸して後 更に頭を 梳る

（自注）廂髮、髻名、形鬆秀如倭墮髻。弱年婦女多梳之、睡時以高角枕承肩、下髻不著席、防散乱也。（^{ひさしがみ} 廂髮、^{けい} 髻の名、形 ^{しょうしゅう} 鬆秀なること倭墮髻の如し。弱年の婦女 多く之れを ^{くしけづ} 梳り、睡時 高角枕を以て肩を承け、髻を下ろすも席に著けず、散乱を防ぐなり。）

【日本語訳】

- 1 手で角の枕を撫でながら、眼にははにかみを浮かべ
- 2 ひそやかな愁いを帯びて、艶めかしさが眉間に表れる
- 3 横になるとひさし髪が乱れてしまうのではないかと
- 4 夜化粧を落とした後も、あらためて髪の毛を梳かしている

（自注）廂髮は、まげの名で、その形は倭墮の ^{もとり} 髻のように柔らかく秀でている。年若い女性はしばしば梳かし、眠る時には角の高い枕で肩を支えて、まげを下ろしても敷き布団には触れさせず、バラバラに乱れてしまうのを防ぐ。

【押韻】「羞」「愁」「頭」、下平十一尤韻。

【語釈】

1 手摩角枕眼含羞 2 春動眉尖帶暗愁

〔角枕〕動物の角で作られた枕。或いは角で飾られた枕。『詩経』唐風・葛生に「角枕粲兮、錦衾爛兮（角枕 粲たり、錦衾 爛たり）」と。

〔春動〕春が急ぎ足で訪れる。唐・杜甫「城上」詩に「風吹花片片、春動水茫茫（風 吹きて 花片片、春 動きて 水 茫茫）」と。ここは女性の表情に艶めかしさが表れること。

〔眉尖〕眉間。多く若い女性の表情をいう。宋・張先「江城子」詞に「夜厭厭、下重簾、曲屏斜燭、心事入眉尖（夜は物憂く、重なり合ったカーテンを下ろし、屏風に傾けた灯火が映り、様々な思いが眉間に表れる）」と見える。

〔暗愁〕ひそやかな愁い。宋・周邦彦「風流子・大石 秋怨」詞に「多少暗愁密意、唯有天知（どれほどのひそやかな愁いや思いを抱えているのか、天だけが知っている）」と。

3 為恐横陳廂髮乱 4 晚妝卸後更梳頭

〔横陳〕横たわる、横になる、横臥する。語は宋玉「諷賦」（『古文苑』巻二）に「内懣惕兮徂玉牀、横自陳兮君之傍。（内は^{じゆつてき}懣 惕として玉牀に^ゆ徂き、横たはりて自ら君の傍らに^の陳ぶ。）」とあるのに拠る。

〔廂髮〕ひさし髪。庇髪、廂髪とも。前髪と鬢とを前に突き出すように結う髪型。『明治事物起源 1』人事部「廂髪を始め」に「（明治三十五、六年頃より、女子大学、女子美術学校の生徒等、これが中堅となり、他一般の女学生、靡然としてこれを学び、三十七、八年戦役中をもって、その頂点となせり。」との記述がある。

〔晚妝〕夜化粧。南朝梁・鮑泉「寒閨詩」に「風急朝機燥、鏡暗晚妝難（風 急にして 朝機^{かわ} 燥き、鏡 暗くして 晚妝^{かた} 難し）」と。

〔卸〕「卸妆」、装身具を取り、化粧を落とすこと。宋・李清照「訴衷情」詞に「夜来沈醉卸妆遲、梅萼插殘枝（昨夜からずっと深酒をして化粧を落とす手が進まず、梅の花を）」と。

〔梳頭〕髪を梳かして整える。「子夜歌」四十二首其三に「宿昔不梳頭、糸髮被兩肩（宿昔^{くしけつ} 頭を梳 らず、糸髪 兩肩を被ふ）」と。

（自注）

〔鬆秀〕柔らかく秀でている。

〔倭墮髻〕中国古代の女性の髪型。古楽府「陌上桑」に「頭上倭墮髻、耳中明月珠（頭上には倭墮^{あだ}の髻、耳中には明月の珠）」と見えるが実際の形については諸説ある。晋・崔豹『古今注』雑注に「墮馬髻、今無復作者。倭墮髻、一云墮馬之余形也。（墮馬髻、今^な 復た作す者無し。倭墮髻、一に云ふ、墮馬之余形なり、と。）」とある。

「東京雜事詩」七十三首其二十七

【本文及び書き下し】

- 1 描花試手恨粗疏 花を描き手を試みるも 粗疏なるを恨み
- 2 斑管烏糸学字初 斑管 烏糸 字を学ぶの初め
- 3 自撰誄文修筆塚 自ら誄文を撰^{ふでづか}して筆塚を修め
- 4 蕉窓日課六朝書 蕉窓 日び課す 六朝の書

(自注) 近時都下盛行六朝書法。聞為中村不折氏所提倡。筆画整飾明晰可認。(近時 都下 六朝書法を盛行す。中村不折氏の提倡する所と為ると聞く。筆画 整飾にして 明晰 認むべし。)

【日本語訳】

- 1 お手本をなぞって腕前を試してみるけれど、粗雑なのが残念
- 2 筆とマス目のある紙でお習字を始めたばかり
- 3 自分で自分の死者を記念する文章を作り、筆塚を建て
- 4 外に芭蕉が見える窓際で毎日六朝風の書を課題とする

(自注) この頃、東京では六朝の書法が盛んに行われている。中村不折氏によって提唱されているそう。筆画は整然と飾られ、はっきりとしていて読みやすい。

【押韻】「疏」「初」「書」、上平六魚韻。

【語釈】

1 描花試手恨粗疏 2 斑管烏糸学字初

〔描花試手〕お手本通りに書いて腕前を試す。宋・欧陽修「南歌子」詞に「弄筆俚人久、描花試手初（あなたに手紙を書こうと筆を手にしたまま長い時間が経つのに、わたしはお手本をなぞって腕前を試し始めたばかり。）」とあるのを踏まえる。「花」は「花様」、お手本。「手」は「身手」、腕前、技量。

〔斑管〕毛筆。斑竹を筆の軸にすることから。唐・王〔邕＋頁〕(『全唐詩』卷二〇四、題下注に「一本作王邕詩。今從『統籤』另編。」とある。)の「懷素上人草書歌」に「銅瓶錫杖倚閒庭、斑管秋毫多逸意（銅瓶 錫杖 閒庭に倚り、斑管 秋毫 逸意多し）」と見える。

〔烏糸〕烏糸欄の略。烏糸欄とも。墨でマス目が書いてある用紙。唐・唐李肇『唐国史補』卷下に「宋・毫間、有織成界道絹素、謂之烏糸欄・朱糸欄。(宋・毫の間、織りて界道を成すの絹素有、之れを烏糸欄・朱糸欄と謂ふ。）」と見える。後に墨でマス目が書いてある用紙を指すようになった。宋・陸游「遣興」詩に「烏糸欄上詩初就、緑綺声中酒半消（烏糸欄上 詩 初めて就り、緑綺声中 酒 半ば消ゆ）」

〔学字〕文字の書き方を学ぶ。『南史』齊高帝諸子伝下・武陵昭王曄に「高祖雖為方伯、而居處甚

貧、諸子学書無紙筆、曄常以指画空中及画掌学字、遂工篆法。(高祖 方伯と為ると雖も、而も居処 甚だ貧しく、諸子 書を学ぶに紙筆無く、曄 常に指を以て空中に^{あが}画き及び^{たなごころ}掌に画きて字を学び、遂に篆法に^{たくみ}工なり。)」とある。

二句、字を習い始めたばかりの女の子を描く。

3 自撰誄文修筆塚 4 蕉窓日課六朝書

〔誄文〕死者の生前の事跡を述べ、哀悼の意を表した文章。

〔筆塚〕使い古した筆を埋め供養のために築いた塚。

〔蕉窓〕外に芭蕉が見える窓。宋・無名氏「眉峰碧」詞に「窓外芭蕉窓裏人、分明葉上心頭滴（窓の外の芭蕉と窓の内側の人、芭蕉の葉にも人の心にも雨が滴る）」と。

〔日課〕毎日の課題とする。唐・元稹「敘事、寄樂天書（事を叙して、樂天に寄するの書）」に「与詩人楊巨源友善、日課為詩。（詩人楊巨源と友善し、日び課して詩を^{つく}為る。）」と。

〔六朝書〕中田勇次郎責任編集『書道藝術』別巻第四（中央公論社 1977）に「明治時代の書道史において、もっとも大きな事件といえば、清国の楊守敬の来朝であろう。楊守敬（1839～1915）は、字は惺吾、鄰蘇老人と号した。湖北宜都の出身。明治十三年（1880）四月、清国駐日大使何如璋に招かれて、公使館員として来朝し、明治十七年（1884）五月まで、満四年のあいだ滞在した。……。楊守敬が来朝するにあたって、その収蔵する碑版法帖を多数たずさえてきた。そのなかには、わが国において江戸時代以来ほとんど知られなかった北碑のものがあつた。巖谷一六、日下部鳴鶴、松田雪柯の三人が、楊守敬の滞在中、しばしば訪れてその碑版を鑑賞し、その精審な鑑識を傾聴して啓蒙を受けたことは、わが国の書道史において、特筆すべき出来事である。」とあるように、楊守敬の来日を契機として、漢魏六朝の碑帖による書法の研究が盛んになり、六朝の書が流行した。

二句、書家、漢学者などの知識人を描く。

（自注）

〔中村不折〕1866（慶応2）年～1943（昭和18）年。明治、大正、昭和期に活躍した洋画家、書家。

1914年、康有為の『広芸舟双楫』を井土靈山とともに『六朝書道論』の題で翻訳している。

〔整飾〕整え飾り付ける。

「東京雑事詩」七十三首其二十八

【本文及び書き下し】

- 1 明珠胎後数年華 明珠 胎^{はら}みし後 年華を数へ
- 2 八字分眉正破瓜 八字 眉を分かつは 正に破瓜
- 3 月事争如飛燕薄 月事 争^{いかで}か飛燕の薄きに如かんや
- 4 私裁腹卷滌羊花 私^{ひそ}かに腹卷を裁ちて 羊花^{あら}を滌ふ

（自注）俗名袜肚曰腹卷、用以防寒殊妙。（俗 袜肚^{ばつと}に名づけて腹卷と曰ひ、用ふるに防寒を以て

すれば殊に妙なり。)

【日本語訳】

- 1 ドブガイが真珠を胎むように初潮を迎えてから数年が経って
 - 2 眉を八字に画く十六の頃
 - 3 月のものは趙飛燕ほどには軽くないので
 - 4 こっそり縫った羊柄の腹巻きを洗っている。
- (自注) 世間では「袜肚」を腹巻きと呼び、冷えを防ぐのに効果がある。

【押韻】「華」「瓜」「花」、下平六麻韻。

【語釈】

1 明珠胎後数年華 2 八字分眉正破瓜

[明珠胎] ここは初潮をいう。語は漢・蔡邕「漢津賦」に「明珠胎於靈蚌兮、夜光潜乎玄洲。(明珠は靈蚌に^{はら}胎まれ、夜光は玄洲に潜む。)」とあるのに拠る。「明珠」は夜でも光を放つ真珠。古代の人々は、ドブガイが真珠を孕み、月の満ち欠けと関係があると考えた。晋・左思「吳都賦」に「蚌蛤珠胎、与月虧全。(蚌蛤 珠胎し、月と虧^き全す。)」とあり、劉逵注は『呂氏春秋』季秋紀・精通に「月也者羣陰之本也。月望則蚌蛤実羣陰盈。月晦則蚌蛤虚羣陰虧。(月なる者は羣陰の本なり。月 望なれば則ち蚌蛤 実ち 羣陰 盈つ。月 晦なれば則ち蚌蛤 虚しく 羣陰 虧^かく。)」とあるのを「月望則蚌蛤実、月晦則蚌蛤虚。」と省略して引く。

[年華] 歳月。北周・庾信「竹杖賦」に「潘岳『秋興』、嵇生倦遊。桓譚不樂、吳質長愁。竝皆年華未暮、容貌先秋。(潘岳は『秋興』、嵇生は遊ぶに倦む。桓譚は楽しまず、吳質は長に愁^{つね}ふ。竝びに皆な年華 未だ暮れざるに、容貌 秋に先んず。)」と。

[八字分眉] 八字眉。漢から唐に流行した宮女の眉化粧。唐・韋応物「送官人入道」詩に「金丹擬駐千年貌、宝鏡休勻八字眉(金丹 駐^{とど}めんと擬す 千年の 貌、宝鏡 勻^{ととの}ふを休む 八字の眉)」と。

[破瓜] 女性が十六歳になること。また、十六歳の女性。「瓜」字を分けると二つの「八」字になることからいう。晋・孫綽「情人碧玉歌」(『玉台』卷十)二首其二に「碧玉破瓜時、相為情顛倒(碧玉 破瓜の時、相ひ為に情 顛倒す)」(「相」、『樂府詩集』卷四十五作「郎」)。

3 月事争如飛燕薄 4 私裁腹卷滌羊花

[月事] 月経。『黄帝内経素問』上古天真論に「女子七歳、腎氣盛、齒更髮長、二七而天癸至、任脈通、太衝脈盛、月事以時下、故有子。(女子 七歳にして、腎氣 盛んに、齒 更^かはり 髮長じ、二七にして天癸 至り、任脈 通じ、太衝脈 盛んに、月事 時を以て下る、故に子有り。)」と。

[飛燕] 趙飛燕。妹とともに漢の成帝に寵愛されたが、いずれも子宝に恵まれなかった。『漢書』

外戚伝下・孝成趙皇后に「皇后既立、後寵少衰、而弟絶幸、為昭儀。……。姉弟顯寵十余年、卒皆無子。(皇后 既に立ち、後 寵 少しく衰ふるも、弟は絶^{はなは}だ幸せられ、昭儀と為る。……。姉弟 寵^{もつぱ}を顯^{はなは}らにすること十余年、卒に皆な子無し。)」と見える。

[羊花] 羊柄。

(自注)

[袜肚] はらまき。「袜」は「襪」にも作る。五代馬縞『中華古今注』襪肚に「蓋文王所制也。謂之腰巾、但以繒為之。宮女以綵為之、名曰腰綵。至漢武帝以四帶、名曰襪肚。(蓋し文王の制る所ならん。之れを腰巾と謂ひ、但だ繒^{そう}を以て之れを為るのみ。宮女 綵を以て之れを為り、名づけて腰綵と曰ふ。漢の武帝に至り四帶を以てし、名づけて襪肚と曰ふ。)」とある。

「東京雜事詩」七十三首其二十九

【本文及び書き下し】

- 1 入画崔徽已自傷 画に入りて 崔徽 已に自ら傷つけ
- 2 更誰鏡裏証空王 更に誰か 鏡裏 空王に証せん
- 3 写真寄到知肥瘦 真を写して寄せ到れば 肥瘦を知る
- 4 莫問腰围帶短長 問ふ莫かれ 腰围 帶の短長を

(自注) 照相俗名写真、語頗典切。遠行者、毎用以贈戚友。(照相 俗に写真と名づけ、語 頗だ典切なり。遠行する者、毎に用ひて以て戚友に贈る。)

【日本語訳】

- 1 崔徽は画の中の人となって病を得てしまい
- 2 今さら鏡に映った生き写しの姿で仏に証しを立てようとするのか
- 3 写真を送れば太っているか痩せているかが分かるのだから
- 4 腰帯の長短を訊ねるまでもない

(自注) 「照相」を世間では写真と呼んでいるが、この語はかなり典雅で適切だろう。遠く旅に出る者は、いつも親戚や友人にプレゼントする。

【押韻】「傷」「王」「長」、下平七陽韻。

【語釈】

1 入画崔徽已自傷 2 更誰鏡裏証空王

[入画] 絵に描かれる。絵のような。唐・韓偓「冬日」詩に「景状入詩兼入画、言情不尽恨無才(景状 詩に入り 兼ねて画に入り、言情 尽きず 才無きを恨む)」と。

[崔徽] 唐の歌妓の名。裴敬中と相思相愛の仲だったが、後に別れなければならなかった。崔徽は病に臥し、自分の肖像画を裴敬中に贈った後、発狂して死んでしまった。唐・元稹「崔徽

歌』序」(今『全唐詩』に拠る。)に「崔徽、河中府娼也。裴敬中以興元幕使蒲州、与徽相従累月。敬中便還、崔以不得従為恨、因而成疾。有丘夏善写人形。徽托写真寄敬中曰、『崔徽一旦不及画中人。且為郎死』。發狂卒。(崔徽は、河中府の娼なり。裴敬中 興元の幕なるを以て蒲州に使ひし、徽と相ひ従ふこと累月。敬中 便ち還るに、崔 従ふを得ざるを以て恨みと為し、因りて疾^{やま}ひを成す。丘夏の善く人の形を写す有り。徽 写真に托し敬中に寄せて曰く、『崔徽 一旦 画中の人に及ばず。且く郎の為に死せん』と。發狂して卒す。))」と見える。

[空王] 仏教語。仏の尊称。仏教では世界の一切が空であると説くので。唐・沈佺期「樂城白鶴寺」詩に「無言謫居遠、清淨得空王(言無くして謫居せらるること遠く、清淨 空王を得たり)」と。

3 写真寄到知肥瘦 4 莫問腰圍帶短長

[写真] 人の姿を写し取る。北齊・顔之推『顔氏家訓』雜芸に「武烈太子偏能写真。坐上賓客、隨宜点染、即成数人、以問童孺、皆知姓名矣。(武烈太子 偏^{ひとへ}に能く真を写す。坐上の賓客、宜に隨ひて点染し、即ち数人を成して、以て童孺に問ふに、皆な姓名を知る。))」とある。フォトグラフの訳語としての「写真」については、『現代漢語詞匯の形成—十九世紀漢語外来詞研究』(馬西尼著 黄河清訳 漢語大詞典出版社 1997)に「黄遵憲也使用過日語詞“写真”(日語読 shashin、即photograph) ……、“写真”這詞在中国不曾流行開来、因為此前在中国已經有了“照相”這個本族詞。(黄遵憲も日本語の『写真』という語を使ったことがあり、『写真』という語が中国で広く用いられなかったのは、それ以前に中国には『照相』という語が存在していたからである。)」とある。黄遵憲の1877(明治10)年、来日直前の作に「将之日本、題半身写真、寄諸友(将に日本に之^いにかんとし、半身の写真に題して、諸友に寄す)」詩がある。

[知肥瘦] 食が進んで太っているか、食欲がなくなって痩せてしまったかが分かる。「古詩十九首」(『文選』卷二十九)其一到「相去日已遠、衣帶日已緩(相ひ去ること 日に已に遠く、衣帶 日に已に緩^{ゆる}し)」と。

[腰圍帶短長] 腰帶の長さ。『梁書』昭明太子統伝に「体素壯、腰帶十圍、至是減削過半。(体^{もと} 素 壯にして、腰帶 十圍なれど、是に至りて減削すること半ばを過ぐ。))」とあり、後に「帶減腰圍」で病氣や憂愁のために痩せてしまうことを表すようになった。

(自注)

[典切] 典雅で適切。「写真」の語が中国古典中に見出せることから言う。

[遠行] 遠い旅。「古詩十九首」其三に「人生天地間、忽如遠行客(人生 天地の間、忽ち遠行の客の如し)」と。

「東京雜事詩」七十三首其三十

【本文及び書き下し】

1 双渦酒量醉東風 さうくわ しゅうん 双渦 酒量 東風に酔ひ

2 塗沢燕支恨未工 ^{えん し}燕支を塗沢するも未だ ^{たくみ}工 ならざるを恨む

3 争説阿姨顔色好 争ひて説く 阿姨 顔色 好しと

4 西京初買小町紅 西京 初めて買ふ ^{こ まちべに}小町紅

(自注) 小町紅、^{えん じ}胭脂の名、西京より出でたる者 佳なりと聞く。

【日本語訳】

1 春風に酔って、えくぼが二つ、目の縁はほんのり桜色

2 口紅をさしてはいるが、残念なことにまだあまり上手くない

3 「おばさん、きれいね」と皆が囁し立てているのは

4 京都で小町紅を買ったばかり

(自注) 小町紅は、口紅の名で、京都のものがよいとのことである。

【押韻】「風」「工」「紅」、上平一東韻。

【語釈】

1 双渦酒暈酔東風 2 塗沢燕支恨未工

[双渦] えくぼ。酒渦、^{さうえふ}双靨とも。清・劉鶚『老残遊記』第十回に「却看那顰姑、豊頬長眉、眼如銀杏、口輔双渦、脣紅齒白。(その顰姑を見てみると、ふくよかな頬に長い眉、眼は銀杏のように、口のあたりに二つのえくぼ、唇は赤く歯は真っ白。)」と。

[酒暈] 酔いで顔に浮かぶ赤み。宋・蘇軾「紅梅」三首其一に「寒心未肯随春態、酒暈無端上玉肌(寒心 未だ^{あへ}肯て春態に随はず、酒暈 ^{はし}端無くも玉肌に上る)」と。

[酔東風] 春風に酔う。宋・王思「燭影搖紅」詞に「惜春長待醉東風、却恨春歸早(ゆく春を惜しんでずっと春風に酔っていたのに、春の終わりがあまりに早いのが恨めしい。)」と。また後に詞牌の名として用いられた。「清平樂」の別名。『詞譜』巻五・清平樂に「張翥詞有『明朝來醉東風』句、名『醉東風』。(張翥の詞に『明朝 來たりて 東風に酔ふ』の句有り、『醉東風』と名づく。)」とある。

[塗沢] お化粧をする。『新唐書』后妃伝上・則天武皇后に「太后雖春秋高、善自塗沢、雖左右不悟其衰。(太后 春秋 高しと雖も、善く自ら塗沢し、左右と雖も其の衰へたるを悟らず。)」と。

[燕支] 胭脂、或いは燕脂とも。赤い顔料。徐陵『玉台新詠』序に「南都石黛、最發双蛾、北地燕支、偏開兩靨。(南都の石黛は、最も双蛾^{ひら}を発き、北地の燕支は、偏へに兩靨を開く。)」と。

3 争説阿姨顔色好 4 西京初買小町紅

[阿姨] おばさん。子どもが母と同世代の女性に対して言う。

[西京] 明治以降、東京に対して京都を指して言うようになった。

[小町紅] 江戸時代の口紅の商標。京都で作られた上質な口紅を指したが、後に口紅の総称となった。

「東京雑事詩」七十三首其三十一

【本文及び書き下し】

- 1 残妝卸後怯春寒 残妝^{おろ} 卸して後 春の寒さに怯え
- 2 偷傍灯檠带笑看^{ひそ} 偷^{ひそ}かに灯檠^{とうい}に傍^そひ笑ひを帯びて看る
- 3 簾外荔支紅映肉 簾外の荔支 紅 肉に映じ
- 4 動人情処是中单 人の情を動かす処は是れ中单

（自注）女子襯衣、俗皆尚紅色。「中单」、『中華古今注』、襯衣也、又名汗衫。黄公度「日本雑事詩」謂是^(ママ) 褌、疑別有本。（女子の襯衣、俗 皆な紅色を 尚^{たつと}ぶ。「中单」、『中華古今注』に、襯衣なり、又た汗衫と名づく、と。黄公度の「日本雑事詩」に是れ褌^{こん}なりと謂ふ、疑ふらくは別に本づく有るならん。）

【日本語訳】

- 1 くずれかけた化粧をすっかりすっかり落とした後、春の寒さにびくびくしながら
- 2 ひそやかに灯火のそばで微笑みを浮かべて見つめている
- 3 カーテンの外の荔支が映って肌がほんのり紅く
- 4 人の心を掻き立てるのは中单

（自注）女性の肌着は、世間ではみな赤を好む。「中单」は、『中華古今注』に肌着である。また「汗衫」とも呼ぶ、とある。黄遵憲「日本雑事詩」に^(ママ) 褌 であるとするが、何か他に基づくところがあるのだろう。

【押韻】「寒」「看」「单」、上平十四寒韻。

【語釈】

1 残妝卸後怯春寒 2 偷傍灯檠带笑看

〔残妝〕落ちかけの化粧。南朝陳・江総「紫騮馬」に「願君憐織素、残妝尚有啼（願はくは 君素を織るを憐れまんことを、残妝 尚ほ啼く有り）」と。また「東京雑事詩」其二十六に「為恐横陳廂髪乱、晚妝卸後更梳頭（^{ため}為に恐る 横陳して ^{ひさし}廂髪の乱るるを、晚妝 卸して後 更に^{かうべ}頭を^{くしけづ}梳る」とあった。

〔怯春寒〕花冷えに怯える。唐・元稹「春游」詩に「不能辜物色、乍可怯春寒（物色に^{そむ}辜く能はず、乍ち春の寒きに怯ゆべし）」と。

〔灯檠〕灯火を載せる台。清・金農「晏歳山舎夜臥」詩に「夜惟粥鍋親、書就灯檠閱（夜は惟れ^{しゆくれき}粥鍋に親しみ、書は灯檠に^つ就きて^よ閲む）」とある。

〔带笑看〕笑みを含んで見る。唐・李白「清平調詞」三首其三に「名花傾国兩相歡、長得君王带笑看（名花 傾国 兩つながら相ひ^{つね}歡び、長に君王の笑ひを帯びて看るを得たり）」と。李白のこの詩は楊貴妃の美貌を描いたとされる。

3 簾外荔枝紅映肉 4 動人情處是中單

〔荔枝〕荔枝とも。楊貴妃が好んだとの逸話がある。唐・杜牧「過華清宮絶句三首」其一に「一騎紅塵妃子笑、無人知是荔枝来（一騎 紅塵 妃子 笑ひ、人の是れ荔枝の来たるを知る無し）」とあり、唐・李肇『唐国史補』卷上にも「楊貴妃生於蜀、好食荔枝。南海所生尤勝蜀者。故每歲飛馳以進。（楊貴妃 蜀に生まれ、好んで荔枝を食らふ。南海の生ずる所 尤も蜀の者に勝る。故に每歲 飛馳して以て進む。）」と。

〔映肉〕周囲の色が肌に映る。唐・杜甫「暮秋、枉裴道州手札、率爾遣興寄、近呈蘇渙侍御（暮秋、裴道州の手札を枉げ、率爾 興を遣りて寄せ、近く蘇渙侍御に呈す）」詩に「憶ふ 子 初めて永嘉に尉となりて去り、紅顔 白面 花 肉に映ぜしを）」と。

〔中單〕肌着。五代・馬縞『中華古今注』卷中に「汗衫、蓋三代之襯衣也。『礼』曰『中單』。漢高祖与楚交戰、帰帳中、汗透、遂改名汗衫。（汗衫は、蓋し三代の襯衣ならん。『礼』に『中單』と曰ふ。漢の高祖 楚と戦ひを交へ、帳中に帰るに、汗 透る、遂に名を汗衫と改む。）」と見える。二句、宋・蘇軾「四月十一日初食荔枝」詩に「垂黄綴紫煙雨裏、特与荔枝為先驅。海山仙人絳羅襦、紅紗中單白玉膚。不須更待妃子笑、風骨自是傾城姝（黄を垂れ紫を綴る 煙雨の裏、特に荔枝の与に先驅を為す。海山の仙人 絳羅の襦、紅紗の中單 白玉の膚。須ひず 更に妃子の笑ひを待つを、風骨 自らはれ傾城の姝）」とあるのに発想を得ているようである。

（自注）

〔黄公度「日本雜事詩」謂是褌〕「褌」、恐らくは「褲」の誤り。また、「日本雜事詩」其百四十一の自注に「女子亦不著褌、裏有紈裙、『礼』所謂中單。（女子も亦た褌を着けず、裏に紈裙有り、『礼』の所謂中單なり。）」とあるが、黄遵憲は「紈裙」を「中單」だとしていたのだろう。

「東京雜事詩」七十三首其三十二

【本文及び書き下し】

- 1 得食倉庚妬可療 倉庚を食らふを得れば 妬 療すべし
- 2 荒唐物理每疑妖 荒唐たる物理 毎に妖しと疑ふ
- 3 年来莫怪相思苦 年来 怪しむ莫かれ 相ひ思ふこと苦しと
- 4 衣底分明有黒焼 衣底 分明 黒焼有り

（自注）市有媚薬曰黒焼、分佩之令人相思。聞煨守宮等合成者。（市に媚薬の黒焼と曰ふ有り、分けて之を佩びれば人をして相ひ思はしむ。守宮等を煨きて合成せし者なりと聞く。）

【日本語訳】

- 1 ウグイスを食べることができれば怪気がおさまるというが
- 2 あまりにデタラメなモノの道理をいつも妖しげに感じていた
- 3 ここのところ胸が苦しくなるほど恋い焦がれるのを不思議に思う必要はない

4 衣服の中に黒焼きがあるのは明らかだ

(自注) 盛り場では黒焼きという媚薬を売っていて、分けて身に帯びさせれば相手に惚れさせることができる。ヤモリを焼いて作るのだそうだ。

【押韻】「療」、去声十八嘯韻。「妖」「焼」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 得食倉庚妬可療 2 荒唐物理每疑妖

[倉庚妬可療]「倉庚」はウグイスの別名。『詩經』豳風・東山に「倉庚于飛、熠燿其羽(倉庚于に飛び、^{いふえう}熠燿たる其の羽)」と見える。黄鳥もウグイスの別名。『山海經』北山經に「又東北二百里、曰軒轅之山。其上多銅、其下多竹。有鳥焉。其状如梟而白首。其名曰黄鳥。其鳴自詖。食之不妬。(又た東北二百里を、軒轅の山と曰ふ。其の上 銅多く、其の下 竹多し。鳥有り。其の状 梟の如くして白首。其の名を黄鳥と曰ふ。其の鳴くや自ら^よ詖ぶ。之れを食らへば妬^{ねた}まず。)」とあり、ここからウグイスを食べると嫉妬深いのを防ぐとする俗信が生じたいらしい。『文苑英華』卷三七八に引く唐・楊夔「止妒論」に、邨後の嫉妬に困った梁の武帝に対し側近の者が「臣嘗読『山海經』云、『以鵽鵽為膳、可以療其事使不忌』。陛下盍試諸。」(臣 嘗て『山海經』を読むに、『鵽鵽を以て膳と為さば、以て其の事を療^いして忌まざらしむべし』と云ふ。陛下^{なん}盍ぞ諸れを試みざる。)」と進言し、実際に試してみるとたところ、邨後の妬心が半減したというエピソードを載せる。

[荒唐] 疊韻。大げさでデタラメなこと。

[物理] 物事の道理、規則。『周書』明帝紀に「天地有窮已、五常有推移、人安得常在、是以生而有死者、物理之必然。(天地に窮已有り、五常に推移有り、人 安くんぞ常に在るを得んや、是を以て生まれて死する者有るは、物理の必然なり。)」と。

3 年来莫怪相思苦 4 衣底分明有黒焼

[相思苦] 苦しくなるほど相手を慕う。唐・王勃「採蓮曲」に「羅裙玉腕輕揺櫓、葉嶼花潭極望平、江謳越吹相思苦、相思苦(羅裙 玉腕 軽く櫓を揺らし、葉嶼 花潭 極望 平らかに、江謳^{かうおう}越吹 相ひ思ふこと苦し、相ひ思ふこと苦し)」と。

[黒焼] イモリの雌雄を黒焼きにして粉末にしたもの。媚薬として知られ、相手に知られぬように振り掛けたり、酒に入れて飲ませると思いがかなうという。

(自注)

[令人相思] 相手に惚れさせる。『太平御覽』卷九二一が引く『淮南万畢術』に「鵽腦令人相思。(鵽の腦は人をして相ひ思はしむ。)」と見える。

[煅] 鍛に同じ。

[守宮] ヤモリ。イモリは両生類、ヤモリは爬虫類。『漢書』東方朔伝に「上嘗使諸数家射覆、置

守宮孟下、射之、皆不能中。朔自賛曰、『臣嘗受易。請射之』。乃別著布卦而対曰、『臣以為龍又無角、謂之為蛇又有足、跂跂脈脈善縁壁、是非守宮即蜥蜴』。上曰、『善』。賜帛十匹。(上 嘗て諸数家をして射覆せしめ、守宮を孟の下に置き、之れを射てしむるに、皆な中つ能はず。朔自ら賛へて曰く、『臣 嘗て易を受く。請ふ 之れを射てしめよ』と。乃ち 著を別ち卦を布きて対へて曰く、『臣 龍ならんと以為ふも又た角無く、謂之れを謂ひて蛇と為すも又た足有り、跂跂脈脈として善く壁に縁るは、是れ守宮に非ざれば即ち蜥蜴ならん』と。上 曰く、『善し』と。帛十匹を賜ふ。)」とあり、顔師古注に「守宮、虫名也。術家云以器養之、食以丹砂、満七斤、擣治万杵、以点女人体、終身不滅、若有房室之事、則滅矣。言可以防閑淫逸、故謂之守宮也。(守宮、虫の名なり。術家 器を以て之れを養ひ、食らはすに丹砂を以てし、七斤に満ちれば、擣治すること万杵、以て女人の体に点ずれば、身を終ふるまで滅せず、若し房室の事有れば、則ち滅すと云ふ。以て淫逸を防閑すべしと言ふ、故に之れを守宮と謂ふなり。)」とある。イモリとヤモリとは時に混同される。

「東京雑事詩」七十三首其三十三

【本文及び書き下し】

- 1 細喘輕輦著意嬌 細く喘ぎ軽く輦めて 意を 嬌 しきに著け
- 2 每逢夏瘦更魂銷 夏瘦に逢ふ毎に 更に魂 銷ゆ
- 3 石家減食方如驗 石家 食を減じて 方に 驗 あるが如く
- 4 不惜明珠買細腰 明珠を惜しまず 細腰を買ふ

(自注) 夏瘦、即医書所言蛙夏也。女子每病肥、自喜夏瘦、举以為誇、亦有藥之令瘦者。(夏瘦は、即ち医書の言ふ所の蛙夏なり。女子 毎に肥えたるを病み、自ら夏瘦を喜んで、挙げて以て誇りと為し、亦た之れを藥して瘦せしむる者有り。)

【日本語訳】

- 1 呼吸を浅くし眉をちょっとひそめて、わざとナヨナヨとしてみせているのに
- 2 夏瘦せした人に出逢う度に、魂まで消え入りそうになる
- 3 金持ちの家では効果があるように食べ物まで減らし
- 4 宝石さえ惜しまずに細い腰を購おうとする

(自注) 夏瘦は、医学書にいう蛙夏のことである。女性はいつも太っていることを気に病んでいて、夏瘦せにも喜ぶだけでなく、こぞって自慢にするし、薬で瘦せようとする者さえいる。

【押韻】「嬌」「銷」「腰」、下平二蕭韻。

【語釈】

- 1 細喘輕輦著意嬌 2 每逢夏瘦更魂銷

〔細喘〕中国医学の用語で、病気などで体が衰弱し、呼吸が浅くなること。

〔輕顰〕眉をちょっと顰める。南唐・李煜「長相思」詞に「雲一縷、玉一梭、淡淡衫兒薄薄羅、輕顰雙黛螺（雲なす髪、玉のかんざし、淡い淡い上着に薄い薄い絹、ちょっと顰める ふたつの眉）」と。

〔著意〕気を配る。心を込める。宋・歐陽修「千秋歲」詞に「紅箋著意写、不尽相思意（紅い便箋に心を込めて書いたけれども、恋い焦がれる気持ちは書き尽くせない）」と。

〔嬌〕力のない様子。唐・白居易「長恨歌」に「侍兒扶起嬌無力、始是新承恩沢時（侍兒 ^{たす} 扶け起こすも 嬌として力無く、始めて是れ新たに恩沢を承^うけし時）」と。

〔魂銷〕魂消とも。激しい悲しみや喜びのために魂が消えて無くなりそうになること。歐陽修「玉樓春」詞に「画楼鍾動已魂銷、何況馬嘶芳草岸（美しい高殿では鐘が鳴り渡るだけでも魂が消えそうになるのに、まして馬が香り立つ草の生い茂る崖で嘶くのを耳にすればなおさらです）」と。

3 石家減食方如駿 4 不惜明珠買細腰

〔石家〕晋の石崇、富裕で知られる。後に「石家」で富貴の家をいう。南朝陳・劉刪「侯司空宅詠妓詩」に「石家金谷妓、粧罷出蘭閨（石家 金谷の妓、粧^{よそほ}ひ 罷^やみて 蘭閨より出づ）」と

〔減食〕食べ物を減らす。「殺食」とも。『淮南子』主術訓に「靈王好細腰、而民有殺食自飢也。（靈王 細腰を好みて、民に殺食して自ら飢うる有るなり。）」とあるのに拠る。

（自注）

〔蛀夏〕中国医学で夏瘦せのこと。「疰夏」とも。

「東京雜事詩」七十三首其三十四

【本文及び書き下し】

- 1 玄妙靈台帝座通 玄妙の靈台 帝座 通じ
- 2 万千恩怨亘胸中 万千の恩怨 胸中に亘る
- 3 強言学得耶穌愛 強ひて言ふ 耶穌の愛を学び得たりと
- 4 手指肩章十字紅 手づから指す 肩章 十字の紅

（自注）都下医院傭女子事病者曰看護婦、衣白衣・白冠、以紅色十字文加其上、示定服也。（都下の医院 女子を傭ひて病める者に事へしむるを看護婦と曰ひ、白衣・白冠^きを衣て、紅色の十字文を以て其の上に加へ、定服たるを示すなり。）

【日本語訳】

- 1 ありがたい建物が天子の御座所の近くにそびえ
- 2 あまたの恩愛と怨恨とが胸の中にわだかまる
- 3 イエスの愛を学んだのだと言い張って
- 4 肩章の赤十字を指さす。

（自注）東京の病院では女性を雇用して患者の世話をさせるのを看護婦と呼ぶ。白い服に白い帽子

をかぶり、赤十字をその上に描いて、制服であることを示している。

【押韻】「通」「中」「紅」、上平一東韻。

【語釈】

1 玄妙靈台帝座通 2 万千恩怨亘胸中

〔玄妙〕おもむきが深くすぐれている様。

〔靈台〕周の文王が建てた高台。『詩経』大雅・靈台に「経始靈台、経之営之（靈台を経始し、之れを経し 之れを営す）」とある。ここは日本赤十字社病院を指す。『明治事物起源7』病医部「日本赤十字社病院の始め」に「明治十九年十一月十七日、東京市麹町区飯田町に、博愛病院を創立す。陸軍軍医総監橋本綱常の建議に基づく。橋本綱常を初代院長となす。博愛社が、万国赤十字社に加盟し、日本赤十字社と改称するにおよび、本院もまた明治二十年五月、日本赤十字病院と改称し、明治二十四年五月、東京市渋谷区宮代町に移転す。この地はもと南豊島御料地なり。飯田町旧病院は、改築して看護婦教場および寄宿舎となせり。本院は、平時においては、救護員、看護婦、看護人を養成し、同時に患者の診療を行ふ。」とある。当時の看護婦養成は麹町区飯田町（現在の千代田区飯田町）と渋谷区宮代町（現在の渋谷区広尾）で行われており、いずれも宮城から近かった。

〔帝座〕天子の座所。ここは宮城を指す。

3 強言学得耶穌愛 4 手指肩章十字紅

〔強言〕言い張る、かたくなに言う。「烏夜啼」古辞八首其四（『樂府詩集』卷四十七・清商曲辞四・西曲歌）に「可憐烏白鳥、強言知天曙（憐れむべし 烏白鳥、強ひて言ふ 天の曙くるを知ると）」

〔耶穌〕キリスト。清・尤侗「外国竹枝詞」欧羅巴に「音声万変都成字、試作耶穌十字歌（音声万変するも 都て字を成し、試みに作れ 耶穌十字の歌）」と見える。

（自注）

〔定服〕制服のことと思われるが、中国語にも日本語にも用例をほとんど見出せない。

「東京雑事詩」七十三首其三十五

【本文及び書き下し】

- 1 手斟杯酒強君飲 手づから杯酒を斟^くんで君に強ひて飲ばしむるも
- 2 慟哭何堪作女冠 慟哭 何ぞ堪へん 女冠と作^なるを
- 3 別有凄凉心事在 別に凄凉たる心事の在る有り
- 4 背人初読結婚難 人に背きて初めて読む 結婚難

（自注）『結婚難』、小説名、俗亦有為尼者、皆有激之者耳。（『結婚難』は、小説の名、俗にも亦

た尼と為る者有り、皆な之れを激する者有るのみ。）

【日本語訳】

1 夫に喜んでもらおうとお酌をしています

2 泣き叫んでみたところで、尼さんにはなれません

3 心の中にはどうしようもない悲しみがあるのです

4 人に隠れてこっそりと『結婚難』を読み始めたところです

（自注）『結婚難』は、小説の名で、世間では尼僧になる者さえいるが、いずれも心を激しく揺さ振られたのである。

【押韻】「飲」「冠」「難」、上平十四寒韻。

【語釈】

1 手斟杯酒強君飲 2 慟哭何堪作女冠

〔女冠〕女道士。ここは「自注」にあるように尼僧。唐・王建「唐昌觀玉蕊花」詩に「女冠夜覓香来処、唯見階前碎玉明（女冠 夜 香りを覓めて来たる^{もと}処、唯だ見る 階前 碎玉の明）」と。

3 別有淒涼心事在 4 背人初読結婚難

〔淒涼〕悲痛な様。唐・李白「留別曹南群官之江南」に「懷君路綿邈、覽古情淒涼（君を懷^{おも}へば 路 綿邈^{めんぱく}として、古へを覽^みれば 情 淒涼たり）」。

〔背人〕他の人を避ける。他人に背を向ける。『紅樓夢』第五八回に「你只回去、背人悄悄問芳官就知道了。（おもどりになって、こっそり芳官におたずねになれば、すぐおわかりになりましよう。）」

（自注）

〔『結婚難』〕徳田秋声の作。1903（明治36）年12月から翌年2月まで「読売新聞」に全60回連載。

「東京雜事詩」七十三首其三十六

【本文及び書き下し】

1 珮解江皋結墜飲 珮は江皋に解きて 墜飲^{ついくわん}を結ばんとし

2 愧無長物報琅玕 愧づ 長物の琅玕に報ゆる無きを

3 指鐙愛買金剛石 指鐙 買ふを愛す 金剛石

4 牽袖低呼白牡丹 袖を牽きて 低く呼ぶ 白牡丹

（自注）白牡丹、宝石肆名、為市中第一。毎約婚、則以宝石指鐙為質、俗尚然也。故肆前車馬成市。

（白牡丹、宝石肆の名、市中第一と為す。婚を約す毎に、則ち宝石の指鐙を以て質と為し、俗 尚ほ然るなり。故に肆前 車馬 市を成す。）

【日本語訳】

1 川のほとりで腰の飾りを解いて、昔々のようなお付き合いをしようと約束しましたが

2 頂戴した琅玕に報いるような余裕がないのを気恥ずかしく思います

3 ダイヤの指輪を買いいたいと

4 袖を引いて「白牡丹で」とそっと言ってみます

(自注) 白牡丹は、宝石店の名で、東京で一番と言われる。婚約すると宝石の指輪を約束の印とするが、世間でもはやりそうである。そこで店の前には市場ができるほど車や馬が集まる。

【押韻】「歆」「玕」「丹」、上平十四寒韻。

【語釈】

1 珮解江皋結墜歆 2 愧無長物報琅玕

[珮解] 腰に帯びた飾りを解いて相手に渡し、結婚の約束とする。『列仙伝』江妃二女に「江妃二女者、不知何所人也。出遊於江漢之湄、逢鄭交甫。見而悦之、不知其神人也。……遂下与之言曰、『二女勞矣』。二女曰、『客子有勞、妾何勞之有』。交甫曰、『橘是柚也。我盛之以筥。令附漢水、將流而下。我遵其傍、採其芝而茹之。以知吾為不遜也。願請子之佩』。二女曰、『橘是柚也。我盛之以筥。令附漢水、將流而下。我遵其旁、採其芝而茹之』。遂手解佩与交甫。交甫悦受而懷之、中当心趨去、数十步視佩、空懷無佩、顧二女、忽然不見。(江妃の二女なる者は、何所の人なるかを知らざるなり。江漢の湄に出遊して、鄭交甫に逢ふ。見て之れを悦ぶも、其の神人なるを知らざるなり。……遂に下りて之れと言ひて曰く、『二女 勞れたり』と。二女 曰く、『客子 勞有り、妾 何の勞か之れ有らん』と。交甫 曰く、『橘は是れ柚なり。我 之れを盛るに筥を以てす。漢水に附し、將に流れて下らんとせしむ。我 其の傍らに遵ひ、其の芝を採りて之れを茹らふ。以て吾が不遜為るを知るなり。願はくは子の佩を請はん』と。二女 曰く、『橘は是れ柚なり。我 之れを盛るに筥を以てす。漢水に附し、將に流れて下らんとせしむ。我 其の傍らに遵ひ、其の芝を採りて之れを茹らふ』と。遂に手づから佩を解きて交甫に与ふ。交甫 悦び受けて之れを 懷にし、中てて心に当てて趨り去るも、数十歩にして佩を視れば、空懷にして佩無く、二女を顧みるに、忽然として見えず。)」とあるのに基づく。

[江皋] 川のほとり。『楚辞』九歌・湘夫人に「朝馳余馬兮江皋、夕濟兮西澨(朝に余が馬を江皋に馳せ、夕べに西澨を濟る)」と見える。右に引いた『列仙伝』では「江漢之湄」とあった。

[墜歆] 天子の寵愛を失うこと。転じて、過去の親しい交際を言うようになった。語は『後漢書』皇后紀・光武郭皇后紀論に「愛升、則天下不足容其高。歆隊、故九服無所逃其命。(愛 升れば、則ち天下も其の高きを容るに足らず。歆 隊つれば、故に九服も其の命を逃るる所無し。)」とあるのに基づく。「隊」は「墜」に同じ。

[長物] 余分なもの。『世説新語』德行に「王恭從会稽還、王大看之。見其坐六尺簟、因語恭、『卿東來、故宐有此物、可以一領及我』。恭無言。大去後、即舉所坐者送之。既無余席、便坐薦

上。後大聞之、甚驚曰、『吾本謂卿多、故求耳』。対曰、『丈人不悉恭、恭作人無長物』。(王恭の会稽^よ従り還るや、王大^{たかむしろ}之れを看る。其の六尺の簟^{たかむしろ}に坐するを見て、因つて恭に語ぐ、『卿東より来たる、故に応に此の物有るべし、一領を以て我に及ぼすべし』と。恭言無し。大の去りて後、即ち坐せし所の者を挙げて之れに送る。既に余席無く、便ち薦上に坐す。後大之れを聞き、甚だ驚きて曰く、『吾^{もと}本卿多しと謂へり、故に求めしのみ』と。対へて曰く、『丈人^{しつ}恭を悉せず、恭人^なと作り長物無し』と。))と見える。

[琅玕] 玉に似た美しい石。曹植「美女篇」(『文選』卷二十七、『玉台』卷二)に「攘袖見素手、皓腕約金環。頭上金爵釵、腰佩翠琅玕(袖を攘^{かか}げて素手^{あらは}を見^{かうわん}し、皓腕^{かんざし}金環を約す。頭上^{らうかん}金爵の釵、腰には佩ぶ翠琅玕)」と。

3 指鐙愛買金剛石 4 牽袖低呼白牡丹

[指鐙] 指環とも。ゆびわ。『晋書』四夷伝・大宛に「其俗娶婦、先以金同心指鐙為娉。(其の俗婦^{つま}を娶るに、先づ金の同心の指鐙を以て娉^{へい}と為す。))」と。

[金剛石] 金剛とも。ダイヤモンド。『太平御覧』卷八一三に引く『玄中記』に「金剛出天竺大秦国、一名削玉刀、削玉如鉄刀削木、大者長尺許、小者如稻米。(金剛天竺・大秦国に出で、一に削玉刀と名づけ、玉を削ること鉄刀の木を削るが如く、大なる者は長さ尺許、小なる者は稻米の如し。))」と見える。

(補注)

[白牡丹] 京橋区南伝馬町(現在の中央区京橋)にあった大西白牡丹かと思われる。

[為質] 盟約の印とする。

「東京雑事詩」七十三首其三十七

【本文及び書き下し】

- 1 曾伝窮袴漢宮来 曾て伝ふ 窮袴 漢宮より来たと
- 2 結束家家闘別裁 結束 家家 別裁^{きそ}を闘ふ
- 3 除是泥郎親解帶 是れ泥郎の親しく帶を解くを除きて
- 4 鳳文双紐不容開 鳳文 双紐^{まさ}容に開くべからず

(自注) 女子礼服中有長袴、長幾盈丈。女学生改用短紫袴、上加双結、一時称便。(女子の礼服中に長^{ながばかま}袴有り、長さ^{ほとん}幾^みど丈に盈つ。女学生 改めて短紫袴を用ひ、上に双結を加へて、一時 便なりと称す。)

【日本語訳】

- 1 袴は漢の宮廷から伝来したそうですけれども
- 2 今はどの家でもオシャレに装って意匠を競い合っています
- 3 恋しい人が帶を解いてくれるのでなければ

4 おおとり柄^{がら}の袴の紐は開こうはありません

(自注) 女性の礼服に長袴があり、その長さは一丈になろうかというほどである。女学生が短い紫の袴を用いるようになり、紐を二重に結んで、取り敢えずの方便だと言っている。

【押韻】「来」「裁」「開」、上平十灰韻。

【語釈】

1 曾伝窮袴漢宮来 2 結束家家闕別裁

[窮袴] 窮袴、窮褲とも。袴は袴の異体字、褲は俗字。股上が二つに分かれたズボン。ここは明治の女性が身に着けた女袴^{はかま}。『漢書』外戚伝上・孝昭上官皇后に「光欲皇后擅寵有子、帝時体不安、左右及医皆阿意、言宜禁内、雖宮人使令皆為窮袴、多其帶、後宮莫有進者。([霍] 光 皇后の寵を擅^{ほしいまま}にして子有らんと欲するも、帝 時に体 安からず、左右及び医 皆な意に阿^{おもね}りて、宜しく内^いるるを禁ずべしと言ひ、宮人と雖も皆な窮袴を為りて、其の帶を多からしむれば、後宮進む者有る莫し。)」とあり、顔師古注に「袴、古袴字也。窮袴即今之緹襠袴也。(袴、古への袴の字なり。窮袴は即ち今の緹襠袴なり。)」と。

[結束] おしゃれな衣装。唐・杜甫「陪王使君晦日泛江就黃家亭子」詩二首其一に「結束多紅粉、歡娛恨白頭(結束 紅粉多く、歡娛 白頭を恨む)」とあり、仇兆鰲注に「結束、衣裳・装束也。」と。

[別裁] 他とは異なるスタイル。

3 除是泥郎親解帶 4 鳳文双紐不容開

[除是] 唯一の条件であることを強調する。張相『詩詞曲語辭匯釈』(中華書局 1953) 卷四・除非是に「除非是、仮設一例外以見其只有此也。…。省去非字、則曰除是。(仮にひとつの例外を設けてこれがあるだけであることを表す。非字を省略すると、除是となる。)」とある。宋・王觀「木蘭花令・柳」詞に「銅駝陌上新正後。第一風流除是柳。(銅の駱駝が立つにぎやかな通りでは正月が過ぎると、天下第一の風流と言え柳しかない。)」

[泥郎] 用例が見当たらないが、「泥」、夢中になるの意で解した。唐・劉得仁「病中晨起即事寄場中往還」詩に「豈能為久隱、更欲泥浮名(豈に能く為に久しく隠れ、更に浮名^{なづ}に泥まんと欲せんや)」と。

[鳳文] ここは、袴に描かれた鳳凰の模様。唐・鮑溶「范真伝(一作伝真)侍御累有寄因奉酬十首(「真伝」、『全唐詩』注云「一作『伝真』。)」其三に「雲髻鳳文細、對君歌少年(雲髻 鳳文細やかに、君に対して少年を歌ふ)」と。

(自注)

[長袴] 後ろに引きずるほど長い袴。

[短紫袴] 『明治事物起源7』衣装部「女学生の袴」に「女学生の袴あるは、跡見女学校を始めと

す。同校の神田にある頃（同校は、二十年八月、小石川区柳町に移る）より、一様に紫色の袴を用ひしめ、明治末より、女学生が、海老茶の袴を一般に用ふれども、跡見だけは、なほ旧容を改めず。女学校の袴の海老茶色なるは、華族女学校にはじまり、校長下田歌子の案なりといふ。これより、女学生にえび茶式部の俗称あり。」と見える。

〔双結〕 雙結

〔称便〕 便利だと考える。

「東京雑事詩」七十三首其三十八

【本文及び書き下し】

- 1 紅錦纏頭百琲珠 紅錦 頭^{かうべ}に纏^{まと}ひ 百琲^ひの珠
- 2 芝居争愛主家奴 芝居 争ひて愛づ 主家の奴
- 3 漢書若列伶官伝 漢書 若し伶官^{れいくわん}の伝を列すれば
- 4 第一承恩衛子夫 第一は恩を承けし衛子夫

（自注）劇場名芝居。名優如高麗蔵等、貴家婦女争嬖之、人不為異。可想見其盛。近有設女優学校者。（劇場は芝居と名づく。名優の高麗蔵^{こまざう}等の如きは、貴家の婦女 争ひて之れを嬖^{へい}するも、人 異と為さず。其の盛んなるを想見すべし。近ごろ女優学校を設くる者有り。）

【日本語訳】

- 1 祝儀として頂戴した紅の錦を頭に載せ、百筋の真珠を身に着けた女優
- 2 芝居小屋では最良筋が争って役者を可愛がる
- 3 『漢書』にもしも「伶官伝」があったならば
- 4 その筆頭は天子の寵愛を受けた衛子夫だろう

（自注）劇場は芝居と呼ばれる。市川高麗蔵のような名優は、富貴の家の女性たちが競って最良にし、人々もそれを不思議に思わない。その盛んな様が手に取るように分かるだろう。最近では女優学校を設置するものもいる。

【押韻】「珠」「奴」「夫」、上平七虞韻。

【語釈】

1 紅錦纏頭百琲珠 2 芝居争愛主家奴

〔紅錦纏頭〕「錦纏頭」は歌舞など演技を終えた芸人に客が錦をプレゼントして頭に載せたことから、芸人への祝儀をいう。杜甫「即事」詩に「百宝装腰带、真珠絡臂鞲。笑時花近眼、舞罷錦纏頭（百宝 腰带に装ひ、真珠 臂鞲^{ひこう}に絡ふ。笑ふ時 花 眼に近く、舞ひ 罷^やみて 錦 頭に纏ふ）」とあり、『太平御覧』卷八一五引『唐書』に「旧俗、賞歌舞人以錦綵置之頭上、為之纏頭。（旧俗、歌舞人を賞するに錦綵を以て之れを頭上に置き、之れが為に頭に纏ふ。）」という。「紅」は女性であることを表す。

[百琲珠] 多くの真珠を紐で通した百筋の飾り。左思「吳都賦」(『文選』卷五)に「金鑑磊珂、珠琲闌干。(金鑑 ^{きんいつ} 磊珂^{らいら}にして、珠琲 ^{しゅひ} 闌干たり。)」とあり、劉逵注に「琲、貫也。珠十貫为一琲。(琲、貫なり。珠十貫を一琲と為す。)」と。

[芝居] ここは「自注」のように劇場の意で用いる。黄遵憲「日本雜事詩」其一六〇にも「阿母含辛兒忍淚、帰来重對話芝居(阿母は辛を含んで 兒は涙を忍び、帰り来たるも重ねて対し 芝居を話す)」と芝居を題材とし、自注に「…。其名曰芝居、因旧舞於興福寺芝之地、故縁以為名。(…。其の名を芝居と曰ふは、旧 ^{もと} 興福寺の芝の地に舞ふに因り、故に縁りて以て名と為すなり。)」という。

[主家奴] 漢の武将、衛青を指す。宋・陳淵「和韻呈李伯紀舍人」に「時来将相寧有種、衛青故是主家奴(時来 将相 寧くんぞ種有らん、衛青も故と是れ主家の奴)」と見える。衛青の生い立ちについては、『史記』衛將軍驃騎列伝に「大將軍衛青者、平陽人也。其父鄭季為吏、給事平陽侯家、与侯妾衛媼通、生青。……。青為侯家人、少時歸其父、其父使牧羊。先母之子皆奴畜之、不以為兄弟数。(大將軍衛青は、平陽の人なり。其の父 鄭季 吏と為り、平陽侯の家に給事し、侯の妾衛媼と通じて、青を生む。……。青 侯の家人と為り、少き時 其の父に歸し、其の父羊を牧せしむ。先母の子 皆な奴として之れを ^{やしな} 畜ひ、以て兄弟の数と為さず。)」とある。ここは客が役者を最上にする様子をいう。

3 漢書若列伶官伝 4 第一承恩衛子夫

[伶官伝] 伶官は樂官。『詩經』邶風・簡兮・序に「簡兮、刺不用賢也。衛之賢者、仕於伶官。

(簡兮は、賢を用ひざるを ^{そし} 刺るなり。衛の賢者、伶官に仕ふ。)」とあり、「鄭箋」に「伶官、樂官也。伶氏世掌樂而善焉、故後世多号樂官為伶官。(伶官は、樂官なり。伶氏 世よ樂を掌りて善し、故に後世 多く樂官を号して為伶官と為す。)」と。また『新五代史』には「伶官伝」がある。

[承恩] 恩沢を受けること。ここは天子の寵愛を受けること。陳・徐陵「侍宴詩」に「承恩豫下席、応阮独何人(恩を承けて 下席に ^{あづか} 豫り、応・阮 独り何人ぞ)」と。「応・阮」は建安七子の応瑒と阮瑀。

[衛子夫] 衛青の姉である衛子夫。女優に喩える。衛子夫は平陽公主の歌姫であったところを武帝に見初められた。『史記』外戚世家に「衛皇后字子夫、生微矣。…。出平陽侯邑。子夫為平陽主謳者。武帝初即位、数歳無子。平陽主求諸良家子女十余人、飾置家。武帝祓霸上還、因過平陽主。主見所侍美人。上弗説。既飲、謳者進、上望見、独説衛子夫。(衛皇后 字は子夫、生まるること微なり。…。平陽侯の邑に出づ。子夫 平陽主の謳者と為る。武帝 初めて位に即き、数歳子無し。平陽主 諸良家の子女十余人を求め、飾りて家に置く。武帝 霸上に ^{はらひ} 祓して還り、因つて平陽主に ^{よぎ} 過る。主 ^{たくは} 侍はふる所の美人を見えしむ。上 ^{よろこ} 説ばず。既に飲み、謳者 進み、上 望見し、独り衛子夫を説ぶ。)」とある。

(自注)

[高麗蔵] 八代目市川高麗蔵（1870～1949）のことだろうと思われる。1889（明治22）年、四代目市川染五郎襲名。1902年、八代目市川高麗蔵襲名。1911（明治44）年、七代目松本幸四郎襲名。
[可想見其盛] その盛んな様子が見て取れるほどだ。清・王士禎『居易録』卷十二に「以著述吟詠自樂、猶可想見其盛也。（著述吟詠を以て自ら楽しみ、猶ほ其の盛んなるを想見すべきなり。）」と。
[女優学校] 1908(明治41)年、新派の女優だった川上貞奴（1871～1946）により、帝国女優養成所が設立された。

「東京雑事詩」七十三首其三十九

【本文及び書き下し】

- 1 挿撥^{はさ}沈吟態更嬌 撥を挿^{はさ}み沈吟して 態 更に 嬌^{なまめか} しく
- 2 三弦奏後已魂銷 三弦 奏せし後 已に魂^き 銷ゆ
- 3 定知今夜多明月 定めて知る 今夜 明月多ければ
- 4 夢到揚州第幾橋 夢に揚州第幾橋に到るかを

（自注）新橋・柳橋間多伎家、毎応召至為奏三弦。三弦似琵琶而小、声極清遠。（新橋・柳橋の間伎家多く、応召する毎に至りて為に三弦を奏す。三弦 琵琶に似て小さく、声 極めて清遠。）

【日本語訳】

- 1 バチを弦の間に差し挟みもの思いに沈むと、佇^{たたず}まいがますます艶やかに
- 2 三味線を演奏した後は魂が消え入りそうになっている
- 3 今夜は月が明るいので、
- 4 揚州のどこかの橋に行く夢を見ているにちがいない。

（自注）新橋から柳橋にかけては妓楼が多く、お召しがあると必ず三味線を演奏する。三味線は琵琶に似ているけれども小ぶりで、その音色はこの上なく清らかで奥深い。

【押韻】「嬌」「銷」「橋」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 挿撥沈吟態更嬌 2 三弦奏後已魂銷

[挿撥沈吟] 唐・白居易「琵琶引」に「沈吟放撥挿絃中、整頓衣裳起斂容（沈吟して撥^{ばち}を放ちて絃中に挿^{はさ}み、衣裳を整頓して起ちて容^{かたち}を斂^{をさ}む）」とあるのに基づく。「挿撥」、演奏を終えてバチを弦の間に差し入れる。語は宋・孔武仲「斲春聴琵琶五首」其五に「収琴挿撥各無語、酒美不知春漏長（琴を収め撥を挿んで各おの語無く、酒^{うま}美くして 春漏の長きを知らず）」と見える。
「沈吟」、もの思いに耽る。

[態更嬌] 姿形がいよいよ艶やか。明・張羽「正月二日雪」詩に「瞥屑復飄蕭、随春態更嬌（瞥屑^{へつせつ}

として復た飄蕭^{へうせう}、春に随ひて 態 更に 嬌^{なまめか}し」と。瞥屑、𦧑屑に同じ。ひらひらする様。

[三弦] 三味線。黄遵憲「日本雜事詩」其一五九に「牙撥齊彈三味線、姑盧朱路復烏烏（牙撥 齊しく三味線を弾き、姑盧 朱路 復た烏烏）」とあり、自注に「三弦名三味線、以象牙為撥、撥如斧形。（三弦 三味線と名づけ、象牙を以て撥と為し、撥 斧の形の如し。）」と。

[魂銷]「東京雜事詩」其三十三、第二句の語釈を参照のこと。

3 定知今夜多明月 4 夢到揚州第幾橋

[多明月] 満月がとても明るいこと。白居易「初冬月夜、得皇甫沢州手札并詩数篇。因遣報書、偶題長句。」詩に「水南地空多明月、山北天寒足早霜（水南は 地 空しくして 明月多く、山北は 天 寒くして 早霜足る）」と。

[夢到揚州] 夢の中で揚州に行く。宋・謝逸「送王禹錫」二首其一に「十里珠簾皆可意、西風吹夢到揚州（十里 珠簾 皆な意ふべし、西風 夢を吹きて揚州に到る）」と。揚州は江南第一の都市として栄えた。

[揚州第幾橋] 揚州のどの橋か。唐・杜牧「寄揚州韓綽判官」詩に「二十四橋明月夜、玉人何處教吹簫（二十四橋 明月の夜、玉人 何れの處にか吹簫を教ふる）」とあるように、揚州には多くの美しい橋が架かっていた。また、杜牧が「揚州」三首其一に「誰家唱水調、明月滿揚州（誰が家か水調を唱ふ、明月 揚州に満つ）」と詠うように月見の名所として知られた。明・林章「渡江」詩に「不知今夜秦淮水、送到揚州第幾橋（知らず 今夜 秦淮の水、送りて揚州第幾橋に到るかを）」と。

(自注)

[応召] 招待を受ける。『漢書』平当伝に「上使使者召、欲封当。当病篤、不応召。（上 使者をして召さしめ、当を封ぜんと欲す。当 病ひ篤く、応召せず。）」と。

[清遠] 清らかで奥深い。南朝宋・劉敬叔『異苑』に「陳思王遊山、忽聞空裏誦經聲、清遠適亮。（陳思王 山に遊び、忽ち空裏に誦經^{ずきやう}の聲の、清遠適亮^{しうりやう}たるを聞く。）」と。

「東京雜事詩」七十三首其四十

【本文及び書き下し】

- 1 時様新眉鏡裏長 時様の新眉 鏡裏に長く
- 2 重簾微度乳花香 重簾 微かに度る 乳花の香
- 3 袈衣斜抹紅酥膩 袈衣 斜めに抹りて 紅酥 膩に^{ちつ い ぬ こう そ ち}
- 4 別様銷魂御化粧 別様に魂を銷す 御化粧^{お け しやう}

(自注) 女子梳洗曰御化粧。凡肩項胸背皆粉沢之。故必袒上衣、雖在人前不避也。（女子の梳洗を御化粧と曰ふ。凡そ肩項胸背 皆な之れを粉沢す。故に必ず上衣を袒^{かたぬ}ぎ、人前に在りと雖も避けざるなり。）

【日本語訳】

1 鏡に映して流行りの眉を描き

2 重なり合ったカーテンの掛かった部屋にはお茶の香りが漂う

3 肌着姿でなめらかな口紅をちょっと点^きすと

4 魂も消え入りそうな化粧すがた

(自注) 女性の化粧を「おけしょう」と言う。肩・うなじ・胸・背中、いずれにも白粉を塗る。そのため必ず上着を脱ぐが、人前でも憚るところがない。

【押韻】「長」「香」「妝」、下平七陽韻。

【語釈】

1 時様新眉鏡裏長 2 重簾微度乳花香

[時様] 流行のスタイル。宋・張先「南郷子・送客過余溪、聽天隱二玉鼓胡琴」詞に「相並細腰身、時様宮妝一樣新（二人柳腰を並べ、そろって今流行りの宮廷風の装い）」と。

[新眉] 描いたばかりの眉。宋・賀鑄「簇水近」詞に「認得宮妝、為誰重掃新眉嫵（宮廷風の装いは、いったい誰のために艶めかしい眉を描き直したのだろう。）」

[鏡裏長] のびのびと描いた眉が鏡に映っている様子。李白「秋浦歌」十七首其十五に「白髮三千丈、緣愁似箇長。不知明鏡裏、何處得秋霜（白髮 三千丈、愁ひに縁^よりて箇^かくの似^{ごと}く長し。知らず 明鏡の裏、何れの處より秋霜を得たる）」と。

[重簾] 重なり合ったカーテン。唐・温庭筠「菩薩蠻」詞に「夜來皓月纔当午、重簾悄悄無人語（夜が更け白々と輝く月がようやく空の中ほどに、重なり合ったカーテンの内側はひそとして人の声もなし。）」と。

[微度] 微かに香り立つ。宋・柳永「迎新春」詞に「遍九陌、羅綺香風微度（賑やかな通りに、薄絹を身に纏った女性が運ぶ香りが微かにそよぐ。）」

[乳花香] お茶の香り。「乳花」は茶を煮る時にできる乳白色の泡。唐・李德裕「故人寄茶」に「碧流霞脚碎、香泛乳花輕（碧は流れて 霞脚 砕け、香りは泛ぶ 乳花の輕きに）」と。

3 袈衣斜抹紅酥膩 4 別様銷魂御化粧

[袈衣] 肌着。『後漢書』文苑伝下・禰衡に「衡進至操前而止、吏訶之曰、『鼓史何不改装、而輕敢進乎』。衡曰、『諾』。於是先解袈衣、次积余服、裸身而立。（衡 進みて操の前に至って止まり、吏 之れを訶^かして曰く、『鼓史 何ぞ装を改めずして、輕がるしく敢へて進むか』と。衡 曰く、『諾』と。是に於いて先づ袈衣を解ぎ、次いで余服を积^ぬて、裸身にして立つ。）」とある。

[紅酥] 紅蘇とも。赤く潤って柔らかな様子。ここは口紅を点^きした唇をいう。唐・元稹「離思五首」其一に「須臾日射燕脂頰、一朵紅蘇旋欲融（須臾にして日は燕脂の頰を射し、一朵の紅蘇 旋^{たちま}ち融けんと欲す）」と。

[膩] なめらかな様を表す。

[別様] 殊の外。宋・楊万里「立秋後一日雨、天欲暮、小立問月亭」詩に「雨後林中別様涼、意行幽徑不知長（雨後 林中 別様に涼しく、幽徑を行かんと意ひて長さを知らず）」と。

（自注）

[梳洗] 髪を梳り顔を洗う。広くお化粧すること。白居易「和夢遊春詩一百韻」詩に「風流薄梳洗、時世寛妝束（風流 梳洗を薄^{かろ}んじ、時世 妝束を寛^{ゆる}す）」と。

[粉沢] 白粉、眉墨などの化粧品、また化粧すること。唐・吳少微「古意」詩に「碧樹風花先春度、珠簾粉沢無人顧（碧樹 風花 春に先んじて度^{わた}り、珠簾 粉沢 人の顧^{かへり}みる無し）」と。

「東京雜事詩」七十三首其四十一

【本文及び書き下し】

- 1 巷南臘鼓醉人帰 巷南^{かうなん} 臘鼓^{らふこ} 酔人 帰り
- 2 妾織流黄錦字機 妾は流黄^{りうわう}を織る 錦字の機
- 3 車馬六街風雪裏 車馬 六街 風雪の裏
- 4 誰家儿女買春衣 誰が家の儿女か 春衣を買ふ

（自注）毎歳暮衣肆榜於門曰「春衣大売出」。蓋新春宴会之服也。富者争購之、所至成市。（毎歳暮 衣肆 門に榜して曰く「春衣 大売り出し」と。蓋し新春宴会の服ならん。富める者も争ひて之れを購ひ、至る所に市を成す。）

【日本語訳】

- 1 小路の南側では年の瀬を知らせる太鼓が鳴り渡る中、酒に酔った亭主が帰って来る
- 2 妻は淡黄色の絹を織って、ご亭主への思いを込めて錦の文字を織り上げる
- 3 車や馬が行き交う賑やかな通り、雪交じりの風が吹く中を
- 4 どこかの家の娘たちが春の衣装を買っている

（自注）年の瀬になると衣料品店では「春物、大売り出し」という看板を入口に立てる。新春のパティーに着る服なのだろう。裕福な者も競って購入し、あちらこちらで市を成すほどである。

【押韻】「帰」「機」「衣」、上平五微韻。

【語釈】

1 巷南臘鼓酔人帰 2 妾織流黄錦字機

[巷南] 小路の南側。巷は村里の中の道。杜甫「偈側（『杜詩詳注』云「吳作『仄』。」）行、贈畢曜」に「偈側何偈側、我居巷南子巷北（偈側^{ひよくそく} 何ぞ偈側たる、我は巷南に居り 子は巷北）」

[臘鼓] 旧暦十二月八日、またその前日に太鼓を打ち鳴らして疫病を祓う習慣があった。『荊楚歳時記』に「十二月八日為臘日。…。諺語、『臘鼓鳴、春草生』。村人並擊細腰鼓、戴胡公頭、及

作金剛力士以逐疫。(十二月八日を臘日と為す。…。諺語に、『臘鼓 鳴りて、春草 生ず』と。村人 並びに細腰鼓を撃ち、胡公頭を戴き、及び金剛力士を作りて以て疫を逐ふ。)」と見える。

[酔人帰] 夕暮れになり酒に酔った村人が家路を急ぐ様子をいう。唐・王駕(『全唐詩』云「一作張演詩。」「社日」詩に「桑柘影斜秋社散、家家扶得酔人帰(桑柘 影 斜めにして 秋社 散じ、家家 酔人を扶け得て帰る)」と。「秋社」、『全唐詩』作「春社」、今拠『三体詩』而改。

[織流黄] 淡い黄色の絹を織る。「相逢行」古辞(『玉台』卷一作「相逢狭路間」)に「大婦織綺羅、中婦織流黄(大婦は綺羅を織り、中婦は流黄を織る)」とある。

[錦字機] 前秦の蘇蕙が錦に回文詩を織り込んで夫に贈ったという故事をいう。『晋書』列女伝・竇滔妻蘇氏に「竇滔妻蘇氏、始平人也。名蕙、字若蘭。善属文。滔、苻堅時為秦州刺史、被徙流沙、蘇氏思之、織錦為迴文旋图詩以贈滔。宛轉循環以讀之、詞甚悽惋。(竇滔の妻 蘇氏、始平の人なり。名は蕙、字は若蘭。善く文を属る。滔、苻堅の時 秦州刺史と為り、流沙に徙され、蘇氏 之れを思ひ、錦を織りて迴文旋图詩を為りて以て滔に贈る。宛轉循環して以て之れを読めば、詞 甚だ悽惋。)」と見える。後に「錦字書」「機中錦字」で妻から夫に宛てて思いを述べた手紙をいうようになった。「錦字機」の語は宋・陳三聘「念奴嬌」に「空有佳人千点涙、錦字機中曾織(美しい人の千粒の涙もいたずらに、錦の文字を機で幾重にも織り上げる)」と。

3 車馬六街風雪裏 4 誰家兒女買春衣

[車馬六街] 都の大通りを車や馬が盛んに行き合うこと。六街は唐の都長安の六本の大通り。元稹「酬白太傅」詩に「三径池塘静、六街車馬忙(三径 池塘 静かに、六街 車馬 忙なり)」とある。

[誰家兒女] どこかの家の兒女。「東飛伯勞歌」古辞(『樂府詩集』卷六十八)に「誰家女兒對門居、開顏發艷照里閭(誰が家の女兒か門に対して居る、顔を開き艷を發して里閭を照らす)」とある。この樂府詩について、『文苑英華』卷二〇六は梁武帝の作とし、『玉台』卷九は「歌辞」とし、字句にそれぞれ異同がある。

「東京雜事詩」七十三首其四十二

【本文及び書き下し】

- 1 太学伝経別置科 太学 伝経 別に科を置き
- 2 漢儒口説女師多 漢儒 口説 女師 多し
- 3 為愁金粉銷奇気 為に愁ふ 金粉 奇気を銷し
- 4 教唱齊梁敕勒歌 唱ふを齊梁に教ふ 敕勒歌

(自注) 凡小学校皆以女子為師、授唱歌諸課。(凡そ小学校は皆な女子を以て師と為し、唱歌・諸課を授けしむ。)

【日本語訳】

- 1 都の学校では学問を伝えるのに、特別に女子師範学校を設置したので

2 漢学者たちが口々に女教師が多すぎると言っている

3 あでやかな女性がすぐれた気概を削ぐのではないか

4 南方の人々に北方の民歌を教えることになるのではないかと心配して

(自注) 小学校ではいずれも女性を教師にし、唱歌などの学科を教えさせている。

【押韻】「科」「多」「歌」、下平五歌韻。

【語釈】

1 太学伝経別置科 2 漢儒口説女師多

[太学] 大学とも。都に置かれた最高学府。『漢書』董仲舒伝に「故養士之大者、莫大庠太学。太学者、賢士之所関也、教化之本原也。(故より士を養ふの大なる者は、太学より大なるは莫し。太学は、賢士の^よ関る所なり、教化の本原なり。)」と見える。

[伝経] 経学を伝授すること。杜甫「上韋左相二十韻」に「盛業今如此、伝経固絶倫(盛業 今此くの如く、伝経 固より絶倫)」と。

[別置科] 1874(明治7)年、東京女子師範学校が設立され、1885年に東京師範学校へ統合されたが、1890(明治23)年には分離改組して女子高等師範学校となり、1908年に東京女子高等師範学校と改称された。また、1900年には東京府女子師範学校が設立された。黄遵憲「日本雜事詩」其五十八に「深院梧桐養鳳凰、牙籤錦帨浴恩光(深院 梧桐 鳳凰を養ひ、^{が せん きんぜい} 牙籤 錦帨 恩光に浴す)」と女子師範学校について詠じ、自注に「明治九年、国后出蔵金、命^{おとこ}摺士族・華族女百人、延師教之、曰女子師範学校。亦三年得為女師。(明治九年、国后 蔵金を出だし、命じて士族・華族の女^{むすめ}百人を^{えら}び、師を^{まね}延きて之れに教へしめ、女子師範学校と曰ふ。亦た三年にして女師と為るを得たり。)」と言う。

[漢儒] 漢代の儒学者。ここは当時の漢学者を言うのであろうが、或いは「女師」に対して「漢の学者」を意識しているかもしれない。

[女師] 女性教師。宋玉「神女賦」(『文選』卷十九)に「顧女師、命太傅。(女師を顧みて、太傅に命ず。)」とあり、李善注に「古者皆有女師、教以婦徳。今神女亦有教也。(古へは皆な女師有り、教ふるに婦徳を以てす。今 神女も亦た教ふる有るなり。)」と。

3 為愁金粉銷奇気 4 教唱齊梁敕勒歌

[金粉] 螺鈿の簪とおしろい。転じて美しい女性。元・王実甫「西廂記」第二本第一摺に「香消了六朝金粉、清減了三楚精神。(六朝の頃の美女も香りはすでにうつろい、三楚の地の美女も衰えてしまった。)」と。

[奇気] すぐれた気概。清・龔自珍「己亥雜詩」三一五首其二八六に「少年奇気称才華、登岱還浮八月槎(少年 奇気 才華を称し、岱に登り還た浮かぶ 八月の槎)」と。

[齊梁] いずれも南朝のひとつ。次に見える「敕勒歌」が北朝で歌われた歌であるのを、南朝の人々に習わせる。小学校で教える唱歌がいずれも西洋音楽だったことを言うものと解した。

[敕勒歌] 敕勒は敕勒族が遊牧する高原。『樂府詩集』卷八十六に引く『樂府広題』に「北齊神武攻周玉壁、士卒死者十四五。神武悲憤、疾発。周王下令曰、『高歡鼠子、親犯玉壁。劍弩一発、元兇自斃』。神武聞之、勉坐以安士衆。悉引諸貴、使斛律金唱『敕勒』、神武自和之。(北齊の神武 周の玉壁を攻むるも、士卒 死する者 十に四五。神武 悲憤して、疾ひ 発す。周王 令を下して曰く、『高歡 鼠子、親ら玉壁を犯す。劍弩 一たび発すれば、元兇 自ら斃る』と。神武 之れを聞き、勉めて坐して以て士衆を安んず。悉く諸貴を引き、斛律金をして『敕勒』を唱はしめ、神武 自ら之れに和す。))」とあり、題下注は続けて「其歌本鮮卑語、易為齊言、故其句長短不齊。(其の歌 本と鮮卑語、易へて齊の言と為す、故に其の句 長短 齊しからず。))」と言う。斛律金は敕勒族出身の部将だった。その歌辞は「敕勒川、陰山下。天似穹廬、籠蓋四野。天蒼蒼、野茫茫。風吹草低見牛羊(敕勒の川、陰山の下。天は穹廬に似て、四野を籠蓋す。天は蒼蒼、野は茫茫。風 吹き 草 低れて 牛羊を見る)」。

(自注)

[唱歌]『明治事物起源3』音楽部「小学唱歌」に「(一) 小学校唱歌教授を始む 明治十三年三月、東京師範学校附属小学校生徒に、始めて唱歌教授を実施せり。」とあり、後1910(明治43)年に『尋常小学読本唱歌』が編纂された。

「東京雑事詩」七十三首其四十三

【本文及び書き下し】

- 1 真珠簾底売珈琲 真珠の簾底 珈琲を売り
- 2 紅粉当鑑翠作囀 紅粉 鑑に当たりて 翠 囀を作す
- 3 最是四更灯月裏 最も是れ四更 灯月の裏
- 4 満頭花影落穠衣 満頭の花影 穠衣に落つ

(自注) 市中珈琲店甚多、坐賈者皆幼婦、盛飾媚客、間有衣庖衣者。宵分益盛、座客常満。(市中 珈琲店 甚だ多く、坐賈する者 皆な幼婦、盛飾して客に媚び、間庖衣を衣る者有り。宵分 益ます盛んに、座客 常に満つ。)

【日本語訳】

- 1 真珠のカーテンの内側でコーヒーを売っていて
- 2 うら若い女性がカウンターで装いを凝らしている
- 3 真夜中過ぎの頃、灯火と月の光に照らされて
- 4 花かんざしの影がエプロンに落ちる

(自注) 都下にはコーヒー店が非常に多く、店で客を迎えるのはいずれもうら若い女性で、盛んに飾り立てて客にサービスするが、しばしば料理人の服を着ている。夜になるといよいよ盛んに、腰掛けた客がいつもいっぱいになる。

【押韻】「琲」「圉」「衣」、上平五微韻。

【語釈】

1 真珠簾底売珈琲 2 紅粉当罌翠作圉

[真珠簾底] 真珠のカーテンがかかる部屋の中。白居易「寒閨怨」に「寒月沈沈洞房静、真珠簾外梧桐影（寒月 沈沈として 洞房 静かに、真珠の簾外 梧桐の影）」と。美しい女性のイメージ。

[珈琲] 中国語の表記は「咖啡」。『現代漢語詞匯的形成—十九世紀漢語外来詞研究』（馬西尼著 黄河清訳 漢語大詞典出版社 1997）に「咖啡、coffee、……。馬礼遜於1815年編纂的詞典中已收入該詞。（咖啡、coffee、……。モリソンが1815年に編纂した辞書にはこの語を収める。）」とある。ロバート・モリソン（Morrison, Robert, 1782-1834）については、何群雄『中国語文法學事始』（三元社 2000）第5章「R. モリソンとその『通用漢語之法』」に詳しい。また、『明治事物起源8』飲食部「咖啡の始め」に「寛政七年の『長崎見聞録』五に、「かうひいは蛮人煎飲する豆にて、……日本の茶を飲む如く、常に服するなり。かうひいかんは、かうひいを浸すの器なり、真鍮にて製す」とあり。……。店舗を構へて咖啡を飲ませることは、実に鄭氏の可否茶館に始まる。明治二十年頃より市下安洋食屋にても、食後咖啡を供し、普通家庭にても、これを用ひる家がぼつぼつ出て来れり。」とあり、「可否茶館」の条に「鄭永慶氏の可否茶館は、この世情に投ぜんとて開店せられしなり。二十一年四月六日、東京下谷区西黒門町二番地に開設せる『可否茶館』は、支那の茶館、西洋のカツヘーを狙ひ、『カヒー一碗代価金壹錢五厘、同牛乳入一碗代価金貳錢』を標記し、…、大期待にて開きしなり。…。大正震災後、都下の咖啡店は、にはかにその数を増したるが、中には、粉膩の氣鼻を衝くもの少なからず、警視庁員の言によれば、一種の不良少年養成所たるもの多しとか。」とある。

[当罌] 当壚、当爐とも。罌は酒場、店の前に酒甕を置く火床の形をした壇が設けられた。『史記』司馬相如伝に「相如与俱之臨邛、尽売其車騎、買一酒舍酤酒、而令文君当爐。（相如 りんきよう 与俱に臨邛に之き、尽く其の車騎を売り、一酒舍を買ひ酒を酤りて、文君をして爐に当たらしむ。）」と見える。『集解』は韋昭の説を引き、「爐、酒肆也。以土為墮、辺高似爐。（爐は、酒肆なり。土を以て墮と為し、辺 高きこと爐に似る。）」と。「墮」は崩れた城壁。

[翠作圉] 美しい女性が装いを凝らす。「翠圉珠繞」に基づく表現。「翠繞珠圉」「翠圉珠裏」とも。語は元・梁曾「木蘭花慢・西湖送春」詞に「千古幕天席地、一春翠繞珠圉（千古の昔から天をカーテンに大地を敷物にして、ひとたび春が訪れれば翠と真珠に囲まれる）」と見える。

3 最是四更灯月裏 4 満頭花影落穠衣

[四更] 午前一時から三時頃。杜甫「月」に「四更山吐月、殘夜水明樓（四更 山 月を吐き、殘夜 水 樓に明るし）」と。

[灯月] 灯火と月。宋・楊無咎「踏莎行」詞に「灯月交光、笙簧遞響（灯火と月とが光を交わせ、笙の音が響いてくる）」と。

[満頭花] かんざし。宋・黄庭堅「西江月」詞に「舞余猶顫満頭花、嬌学男兒拝謝（舞い終わってからも頭の簪が震え、可愛らしく男の子の真似をしてお辞儀をする）」と。

[襦衣] 料理人が着る服。『古今注』輿服に「襦衣、厮役之服也。取其便於用耳。乗輿進食者、服襦衣。前漢董偃緑幘青鞵、加襦衣、以見武帝。厨人之服也。（襦衣、^{しえき}厮役の服なり。其の用に便なるを取るのみ。乗輿に食を進むる者、襦衣を服す。前漢の^{とうえん}董偃 ^{さくこう}緑幘青鞵し、襦衣を加へて、以て武帝に見ゆ。厨人の服なり。）」とある。

（自注）

[坐賈] 店を構えている商人。唐・劉禹錫「観市」文に「坐賈^{ぐぐ}禺禺、行賈^{くわうくわう}遑遑。（坐賈 禺禺として、行賈 遑 遑たり。）」と見える。ここは店にいて接客する。

[庖衣] 料理人が着る服。庖は庖丁、^{はうてい}『莊子』養生主に「庖丁為文惠君解牛。（庖丁 文惠君の為に牛を解く。）」と見える料理人。

[宵分] 真夜中。唐・張九齡「西江夜行」詩に「猶有汀洲鶴、宵分乍一鳴（猶ほ汀洲の鶴有り、宵分 乍ち一鳴す）」と。

「東京雜事詩」七十三首其四十四

【本文及び書き下し】

- 1 酒後調箏客到家 酒後 箏を調べて 客 家に到り
- 2 謝他竹葉引羊車 他^かの竹葉の羊車を引くを謝す
- 3 燕支春冷江南井 燕支 春 冷たし 江南の井
- 4 夜碎紅氷煮緑茶 夜 紅氷を砕きて 緑茶を煮る

（自注）都人嗜緑茶、每客至^こ瀹之以進。色・味頗佳。其所産紅茶、則市之外国、博厚利焉。（都人 緑茶を嗜み、客の至る毎に之れを^に瀹て以て進む。色・味 頗る佳なり。其の産する所の紅茶は、則ち之れを外国に市り、厚利を博す。）

【日本語訳】

- 1 酒宴の後、箏を演奏していると、お客さんがやって来てくれた
- 2 あの竹の葉がお客さんを招き寄せてくれたことに感謝しましょう
- 3 紅茶が赤いのは、春でも冷たく清らかな東京の井戸水が紅に染まっているからなのか
- 4 それとも、お茶を煮る女性が夜な夜な涙が凍ってできた紅の氷を砕いているからなのか

（自注）都の人々は緑茶を愛好していて、お客さんがやって来る度に茶を煮てご馳走する。色も味わいもかなりよい。日本で生産される紅茶は、外国に輸出し、大きな利益を上げている。

【押韻】「家」「車」「茶」、下平六麻韻。

【語釈】

1 酒後調箏客到家 2 謝他竹葉引羊車

[調箏] 箏を演奏する。唐・王昌齡「行路難」に「宴罷調箏奏離鶴、迴嬌轉盼泣君前（宴 罷み 箏を調べて 離鶴を奏し、嬌を迴らせ 盼を転じて 君前に泣く）」と。

[竹葉引羊車] ここは、馴染み客の訪問を芸妓が喜んでいる様を描く。本来は天子の乗る車を竹の葉で招き寄せること。『晋書』后妃伝上・胡貴嬪に「(晋武帝) 常乘羊車、恣其所之、至便宴寢。宮人乃取竹葉挿戸、以塩汁灑地、而引帝車。(晋武帝) 常に羊車に乗り、其の之く所を 恣にせしめ、至れば便ち宴寢す。宮人 乃ち竹葉を取り戸に挿し、塩汁を以て地に灑いで、帝の車を引く。）」と見える。羊は笹の葉と塩味を好むとされていた。

3 燕支春冷江南井 4 夜碎紅氷煮緑茶

[燕支] 赤い色。燕脂、胭脂とも。「東京雜事詩」其三十にも「双渦酒暈醉東風、塗沢燕支恨未工（双渦 酒暈 東風に酔ひ、燕支を塗沢するも未だ 工ならざるを恨む）」とあった。

[江南] 南朝齊・謝朓「鼓吹曲」(『文選』卷二十八)に「江南佳麗地、金陵帝王州（江南は佳麗の地、金陵は帝王の州）」と見えるように、揚州（江蘇省揚州市）のような繁華な地。ここでは東京を言う。

[紅氷] 美しい女性が流す涙。五代・王仁裕『開元天寶遺事』紅氷に「楊貴妃初承恩召、与父母相別、泣涕登車。時天寒、涙結為紅氷。(楊貴妃 初めて恩召を承け、父母と相ひ別れ、泣涕して車に登る。時に天 寒く、涙 結びて紅氷と為る。）」とあるエピソードに基づく。

(自注)

[瀹] 音ヤク。煮る。宋・楊万里「題水月寺寒秀軒」に「山僧笑道知儂渴、其实迎賓例瀹茶（山僧 笑ひて道ふ 儂の渴きたるを知ると、其の实 賓を迎ふれば 例として茶を瀹る）」と。

[紅茶] 『日本国語大辞典』（第二版）第五卷（小学館 二〇〇一）「こうちゃ 【紅茶】」の項に「日本では、明治時代になるまでほとんど飲まれていなかった。明治三十九年（一九〇六）にイギリスから輸入されたが、この時代、紅茶は英国風のハイカラな飲み物であった。国産紅茶の本格的な製造が始まったのは、大正一三年（一九二四）であった。」との補注がある。

「東京雜事詩」七十三首其四十五

【本文及び書き下し】

- 1 腸断離宮劫後灰 腸は断たる 離宮 劫後の灰（※「劫」、底本作「刼」）
- 2 江都西苑忍重開 江都 西苑 忍んで重ねて開く
- 3 燕泥緑遍空庭草 燕泥 緑は遍し 空庭の草
- 4 若箇風流帝子才 若箇ぞ 風流 帝子の才

(自注) 東京本江戸藩府、自遷都後、改今名。亦号江都、蓋襲隋制也。(東京は本江戸の藩府、都を遷して自り後、今の名に改む。亦た江都と号するは、蓋し隋の制を襲ひしならん。)

【日本語訳】

1 仮の皇居が焼失してしまって断腸の思いだったが

2 江戸のお城の西側に心ならずも新たに御殿が建てられた

3 ツバメが泥を銜え^{ひとけ}人気のない庭に青々と草が茂っているのは

4 どなたか風流な天子様のおかげだろうか

(自注) 東京はもともと江戸幕府の中心だったが、都を遷してから、今の名前に改められた。江都とも呼ばれるのは、恐らく隋の制度を踏襲したものだろう。

【押韻】「灰」「開」「才」、上平十灰韻。

【語釈】

1 腸断離宮劫後灰 2 江都西苑忍重開

[離宮] 帝王の正式な宮殿とは別に巡幸の際などに住まう宮室。『史記』劉敬叔孫通列伝に「孝恵帝曾春出游離宮。(孝恵帝 曾て春に出でて離宮に遊ぶ。)」と見える。1868(慶応4)年7月(陽暦9月)、「朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ノ海内一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ」との詔が発せられ、江戸は東京と改称され、同年10月(陽暦11月)、江戸城も東京城と改称された。しかし、正式な遷都の詔はなく、天皇の東幸中の仮皇居とされた。仮皇居は旧江戸城西の丸御殿に置かれたが、1873年に失火により焼失した。

[劫後灰] 戦火などの災害、また災害の余燼。「東京雑事詩」其一に「蓬觀蘭台久劫灰、金閨空数不凡才(蓬觀・蘭台 久しく^{ごふくわい}劫灰、金閨 空しく^{かぞ}数ふ 不凡の才)」とあった。

[江都] 江戸の異称。寺門静軒『江戸繁昌記』序(1832年)に「江都今に三百年の繁華の一二を、千百年の後に証することを得ば、則ち足れり。」と見える。

[西苑] 西の丸御殿焼失後、西南の役の戦費等の財政負担も大きく、国内整備が先決との明治天皇の意向によって、新宮殿造営は久しく見送られていたが、1888(明治21)年、新宮殿(明治宮殿)が建築された。

3 燕泥緑遍空庭草 4 若箇風流帝子才

[燕泥] 燕が巣を作るために銜えている泥。隋・薛道衡「昔昔塩」に「空梁落燕泥、前年過代北(空梁 燕泥落ち、前年 代の北を^よ過ぎる)」と。

[緑遍] 草の緑が隅々にまで広がっている。唐・耿湋^{かうみ}「秋晚臥疾、寄司空拾遺曙・盧少府綸」詩に「晚果紅低樹、秋苔緑遍牆(晩果 紅 樹に低れ、秋苔 緑 牆に遍し)」と。

[空庭] 人の姿が見当たらない庭。隋・盧思道「有所思」に「洞房明月下、空庭緑草深(洞房 明月の下、空庭 緑草 深し)」と。

[若箇] どれ、どこ。塩見邦彦『唐詩口語の研究』(中国書店 一九九五)に

『匯釋』卷三「若箇」の条では「若箇、疑問辭」として盧照鄰、杜甫、岑參詩を挙げた後、

「此皆指人者也、義同何人、猶云那箇也。然亦有不指人而指地者」と指摘する。「どの（人）、だれ、どこ（の地）、いずれ」の意。

とある。

[風流帝子] 洒脱な天子。五代・尹鶚「満宮花」詞に「一炷後庭香燭、風流帝子不帰来（後宮では一枝の花の香りがそよでいるのに、洒脱な天子は帰って来ない）」とある。「風流」の語は「東京雑事詩」其二十一に「半閒宰相老風流、修得功名到白頭（半閒の宰相 老風流、功名を修得して白頭に到る）と見えた。

（自注）

[襲隋制] 隋の都は大興城（長安）に置かれたが、煬帝はしばしば江都（江蘇省揚州市）に行幸しており、実質上の首都として機能することがあった。

「東京雑事詩」七十三首其四十六

【本文及び書き下し】

- 1 巷陌哀歌動楚些 かうはく 巷陌 そさ 哀歌 楚些を動かし
- 2 各揮清淚弔虫沙 各おの清涙を揮ひて 虫沙を弔ふ
- 3 桜花紅入招魂社 桜花 紅は入る 招魂社
- 4 十丈香塵壓素車 十丈の香塵 素車を圧す

（自注）招魂社、祠戦歿者。毎至祭日、自国王以次皆拝奠致礼。旁張盛樂、雜陳角牴諸戲、故游觀者甚衆。（招魂社、戦歿者を祠る。祭日に至る毎に、国王より次を以て皆な拝奠致礼す。
かたはら 旁 に盛樂を張り、かくてい 角牴諸戲を雜陳す、故に游觀する者 おほ 甚だ衆し。）

【日本語訳】

- 1 街中の通りで鎮魂の哀しい歌が起こり
- 2 それぞれが涙をこぼして戦歿者を弔う
- 3 桜の花が招魂社に紅く咲き乱れ
- 4 女性たちの歩みで起つ塵が十丈も立ち上って会葬の車を押し包む

（自注）招魂社は戦歿者を祀っている。祭日が来る度に、天皇から順番に霊前にお供えをして礼拝をする。すぐ近くでは盛んに音楽を演奏し、見世物小屋が並んでいるため、見物客がとても多い。

【押韻】「些」「沙」「車」、下平六麻韻。本来、文末の語気助詞の「些」は去声二十一箇韻。

【語釈】

1 巷陌哀歌動楚些 2 各揮清淚弔虫沙

[巷陌] 街中の通り。晋・葛洪『神仙伝』薊子訓に「屍作五香之芳氣、達於巷陌。（屍は五香の芳

気を作し、巷陌に達す。)」とあり、唐・劉禹錫「題王郎中宣義里新居」に「門前巷陌三条近、牆内池亭万境間（門前 巷陌 三条の近き、牆内の池亭 万境の間）」と。

[動楚些]『楚辞』招魂は「魂兮归来、去君之恒幹、何為兮四方些。舍君之樂処、而離彼不祥些（魂よ 帰り来たれ、君の恒幹を去りて、何為れぞ四方にする。君の樂処を舍きて、彼の不祥に離はんとする）」のように、句末に「些」という語気助詞を置く。そのため「楚些」の語で招魂歌や楚の地方の歌謡を意味するようになった。唐・殷堯藩「楚江懷古」に「騷靈不可見、楚些竟誰聞（騷靈 見るべからず、楚些 竟に誰か聞かん）」と。「動」、発動する。唐・栖白「贈李溟秀才」詩に「明月上清漢、騷人動楚吟（明月 清漢に上り、騷人 楚吟を動かす）」と。

[清淚] 清らかな涙。盛唐以前の詩には見当たらない。唐・李賀「金銅仙人辭漢歌」に「空將漢月出宮門、憶君清淚如鉛水（空しく漢月と將に宮門を出で、君を憶ひて 清淚 鉛水の如し）」と。

[虫沙] 戦死した兵卒。『芸文類聚』卷九十に引く晋・葛洪『抱朴子』に「周穆王南征、一軍尽化、君子為猿為鶴、小人為虫為沙。（周の穆王 南征し、一軍 尽く化して、君子は猿と為り鶴と為り、小人は虫と為り沙と為る。）」とあり、後に「虫沙猿鶴」で戦乱で命を失った者を言うようになった。

3 桜花紅入招魂社 4 十丈香塵圧素車

[招魂社] 1869（明治2）年、大村益次郎の献策により、東京招魂社が幕末維新期の戦死者の慰霊のために創建され、1879年に靖国神社と改称された。

[香塵] 香りのよい塵。多く女性が歩くことによって生じる塵を指す。晋・王嘉『拾遺記』晋時事に「（石崇）又屑沈水之香如塵末、布象床上、使所愛者踐之。（〔石崇〕 又た沈水の香を屑きて塵末の如くし、布きて床上に象り、愛する所の者をして之れを踐ましむ。）」とあるのに基づく語。

[素車] 凶事や葬儀に用いる車。元来は白土が塗ってあったが、後には葬儀に用いる車を広く指すようになった。『周礼』春官・巾車に「素車、禁蔽。（素車、禁蔽。）」とあり、鄭注に「素車、以白土墜車也。（素車、白土を以て車に墜するなり。）」と。

（自注）

[拝奠] 跪いて礼拝し霊前に供え物をして故人を祀る。唐・徐凝「題伍員廟」に「浙波只有靈濤在、拝奠青山人不休（浙波 只だ靈濤の在る有り、青山を拝奠して 人 休まず）」と。

[張盛樂] 盛んに音楽を演奏する。南朝齊・謝朓「齊雩祭歌」八章第四章に「張盛樂、奏雲舞（盛樂を張り、雲舞を奏す）」とある。

[雜陳] ばらばらに並べる。『楚辞』招魂に「鄭衛妖玩、來雜陳些（鄭・衛の妖玩、来たりて雜陳す）」とあり、王逸注に「雜、廁也。陳、列也。」と。

[角抵] サーカス、見世物。角抵、角觝とも。『史記』李斯列伝に「是時二世在甘泉、方作觶抵優俳之觀。（是の時 二世 甘泉に在り、方に觶抵優俳の觀を作す。）」とあり、『集解』は「文穎曰、『案、秦名此樂為角抵、兩兩相当、角力、角伎、射御、故曰角抵也。』（文穎 曰く、『案ずるに、秦 此の樂に名づけて角抵と為す、兩兩 相ひ当たり、力を角ひ、伎芸射御を角ふ、故に

角抵と曰ふなり』。)」とする。

「東京雜事詩」七十三首其四十七

【本文及び書き下し】

- 1 誰羨船遊著錦袍 誰か羨まん 船遊^{ふなあそ}びするに 錦袍^{きんほう}を著^つくるを
2 二重橋外水平壕 二重橋の外 水の平らかなる壕^{ほり}
3 夕陽低墮紅牆影 夕陽 低く墮^おとす 紅牆^{こうしやう}の影
4 榭葉風前禁籞高 榭葉^{こくえふ} 風前 禁籞^{きんぎよ} 高し

(自注) 内城南壕上有二重橋。過此為禁内。遊者不得至也。(内城の南壕^{ほり}の上に二重橋有り。此れを過ぐるを禁内と為す。遊ぶ者 至るを得ざるなり。)

【日本語訳】

- 1 李白が錦の上着で船遊びをしたことを羨んだりはしない
2 二重橋が架かる波穏やかなお堀であっても
3 夕陽が皇居の紅い壁に低く斜めに光を落とし
4 カシワの大きな葉が風に揺れ、禁苑の間垣は高く、容易には入り込めない

(自注) 皇城の南側のお堀に二重橋がある。ここを渡ると禁中である。用のない者は入ることができない。

【押韻】「袍」「壕」「高」、下平四豪韻。

【語釈】

1 誰羨船遊著錦袍 2 二重橋外水平壕

[船遊] 中国の古い文献にはあまり見られない。日本語の「ふなあそび」かと思う。

[錦袍] 錦の上着。次の故事から「錦袍仙」で李白を指す。『新唐書』文芸伝中・李白に「白自知不為親近所容、益驚放不自脩、与知章・李適之・汝陽王璣・崔宗之・蘇晋・張旭・焦遂為『酒八仙人』。懇求還山、帝賜金放還。白浮游四方、嘗乘月与崔宗之自采石至金陵、著宮錦袍坐舟中、旁若無人。(白 自ら親近の容るる所と為らざるを知り、益ます驚放^{がうほう}にして自ら脩めず、知章・李適之・汝陽王璣・崔宗之・蘇晋・張旭・焦遂と『酒八仙人』為り。懇^{ねんご}ろに山に還るを求むるに、帝 金を賜ひて放還す。白 四方に浮游し、嘗て月に乗じ崔宗之と采石より金陵に至り、宮錦袍^{きんほう}を著^つけ舟中に坐し、旁らに人無きが若^{ごと}し。)」とある。

[船遊] 中国の古い文献には見えないようである。日本語の「ふなあそび」を用いたのだろう。

[二重橋] 皇居内にある橋の通称。『明治事物起源5』交通部「橋の種々相」に「(三) 二重橋 ……現在、皇居前の広場より拝すれば、御濠の上にかけ渡したる橋は、桜田門に近き鉄橋と、奥なる石橋と二基見ゆ。まづ鉄橋を南に向きて渡り、右向けして右に曲がり、西に向きてやや進み、また右向けして、このたびは北に向かひて石橋を渡り、始めて皇居の正面玄関の方へ近づくなり。

仮に、コの字を逆にして（ㄩ）これを説明すれば、横の二画が、この二基の橋となり、手前なるは鉄橋、奥なるは石橋なり。徳川の御城時代にも、この二橋のところに、橋はありしなり。お濠が深過ぎて橋脚を建てがたく、奥の石橋のところへ、まづ低き一橋を渡し、その橋に支へさせて橋脚を建て、そして橋を架したれば、実際この橋は上下二重の橋を成し、その名も二重橋と称へしなり。しかるに、新皇居御造営のとき、この二重橋を撤廃したれば、真の二重橋は、久しき前にその姿を消したれど、もとの二重橋の位置に、新たにかかりし普通の石橋を、世人察せず、漫然もとの名の二重橋と呼び来りしなりといふ。」との説明がある。

[水平] 水面が穏やかなこと。隋煬帝「江都夏」詩に「黄梅雨細麦秋輕、楓葉蕭蕭江水平（黄梅雨は細かに 麦秋 輕く、楓葉 蕭蕭として 江水 平らかなり）」と。

3 夕陽低墮紅牆影 4 榭葉風前禁籞高

[紅牆] 紅い壁。唐・李商隱「代弔」詩に「本来銀漢是紅牆、隔得盧家白玉堂（本来 銀漢は是れ紅牆、隔て得たり 盧家 白玉の堂）」と見える。後には清・孔尚任『桃花扇』閏丁に「紅牆綠瓦闔家住。（赤壁に緑の瓦を葺いて住もうか）」とあるように、立派な住居を指すようになる。ここは皇居の壁。

[榭葉] カシワの葉。唐・温庭筠「燒歌」に「風驅榭葉煙、榭樹連平山（風は驅る 榭葉の煙、榭樹 平山に連なる）」と。

[禁籞] 禁御、禁禦とも。天子の庭園の周圍にめぐらせた間垣。転じて天子の庭園を指す。梁・沈約「傷春詩」に「年芳被禁籞、煙華繞層曲（年芳 禁籞を被ひ、煙華 層曲を繞る）」と。

「東京雜事詩」七十三首其四十八

【本文及び書き下し】

- 1 星泥辛苦築花壇 星泥 辛苦して 花壇を築き
- 2 留得春華隔夜看 春華を留め得て 夜を隔てて看る
- 3 四角珠灯新宴罷 四角の珠灯 新宴 罷み
- 4 緑油天幕牡丹寒 緑油の天幕 牡丹 寒し

（自注）本所区四木花園、以牡丹得名。每至花時、張幕花上、盛飾灯屏几席以要遊賞、号四木花壇。

（本所区四木花園、牡丹を以て名を得たり。花の時に至る毎に、幕を花上に張り、盛んに灯・屏・几・席を飾りて以て遊賞を要へ、四木花壇と号す。）

【日本語訳】

- 1 星のように細かな泥で苦労して苦労して花壇を築き
- 2 春の花を咲かせたまま宵越しに眺めやる
- 3 新春のパーティの後、四隅の灯火に照らされて
- 4 油を塗った天幕の下で牡丹が寒そうにしている

（自注）本所区の四木花園は、牡丹で有名である。花の見頃を迎える毎に、幕を花の上に張り、灯

火や屏風や肘掛け、敷物を盛んに飾り立てて見物客を迎え、四木花壇と称している。

【押韻】「壇」「看」「寒」、上平十四寒韻。

【語釈】

1 星泥辛苦築花壇 2 留得春華隔夜看

〔星泥〕よく分からない。今、星のように細かな泥と解しておく。本所は埋め立て地だったので、花を育てるのに適した土質ではなかった。

〔花壇〕花を植える台。唐・李建勛「和判官喜雨」に「高檻氣濃藏柳郭、小庭流擁没花壇（高檻氣は濃やかに 柳郭を蔵め、小庭 流れは擁きて 花壇 没す）」と。

〔留得春華〕春の花を咲かせたまま残す。宋・仲殊「夏雲峰・傷春」詞に「縦留得鶯花、東風不住、也則眼前愁悶（もしもウグイスが鳴き花が咲き誇る春の景色を留めることができ、春風が吹き止まないとしても、やはり眼の前のやるせなさをどうしようもない）」と。

〔隔夜〕一夜を越す。唐・方干「採蓮」詩に「採蓮女兒避殘熱、隔夜相期侵早發（蓮を採るの女兒 殘熱を避け、夜を隔てて 相ひ期す 早きを侵して発せんことを）」と。

3 四角珠灯新宴罷 4 緑油天幕牡丹寒

〔四角〕四隅。古詩「為焦仲卿妻作」（『玉台』卷一）に「紅羅複斗帳、四角垂香囊（紅羅の複斗帳、四角 香囊垂る）」と。

〔珠灯〕真珠を綴り合わせた灯火。宋・張孝祥「醜奴兒」詞に「珠灯璧月年時節、纖手同携（年が改まる頃、真珠の灯火と美しい月に照らされて、柔らかな手を繋いでいる）」と。

〔新宴〕ここは新春のパーティ。宋・史浩「滿庭芳・立春詞、時方獄空」詞に「開新宴、笙歌逗曉、和氣滿塵寰（新春のパーティが開かれ、厳かな音楽が空が白むまで続き、和やかな雰囲気がこの世に満ちている）」と。

〔緑油〕油を塗って緑色にする。唐・皎然「因遊支硎寺寄邢端公」に「詩題白羽扇、酒挈緑油囊（詩は題す 白羽の扇、酒は挈ぐ 緑油の囊）」と。

〔天幕〕テント。『漢語大詞典』は蔡元培「美術之起源」（1920年）に「游獵民族的天幕・小舎、完全為避風雨起見、還沒有美術的形式。（狩獵民族のテント・小屋は、まったく風雨を避けるために発生したのであって、まだ美術の形式を持っていなかった。）」とあるのを引く。

（自注）

〔本所区四木花園〕本所四ツ目にあった芍薬園。この庭園は牡丹園とも呼ばれた。本所区は現在の墨田区の南部。四ツ目は四ツ目通り。「四木花園」の名称についてはよく分からない。或いは向島百花園のことをいうのかもしれない。

「東京雑事詩」七十三首其四十九

【本文及び書き下し】

- 1 白河船内夜迢迢 白河 船の内 夜 ^{てうてう} 迢迢として
2 空唱刀環慰寂寥 空しく刀環を唱ひて 寂寥を慰む
3 忽夢帰舟天際去 忽ち夢む 帰舟の天際に去るを
4 万山風葉落如潮 万山 風葉 落つること 潮の如し

（自注）昔有遊子夜泊白河中、夢還家歎甚。故俗名睡夢曰「白河夜船」。（昔 遊子の夜 白河の中に泊す有り、夢に家に還りて歎ぶこと甚し。故に俗に睡夢に名づけて「白河夜船」と曰ふ。）

【日本語訳】

- 1 白河に浮かぶ舟の上で長々しく続く夜を過ごし
2 無駄を承知で「帰りたい」という歌を歌って寂しさをまぎらわせていた
3 いつの間にかウトウトと、帰りの舟が天の果てまで流れ去る夢を見た
4 どの山でも風に吹かれた葉が散っていく、潮のように時の巡りに忠実に

（自注）昔、旅人が白河に宿泊し、家に帰る夢を見て非常に喜んだ。そこで世間では眠って夢を見ることを「白河夜船」という。

【押韻】「迢」「寥」「潮」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 白河船内夜迢迢 2 空唱刀環慰寂寥

〔白河〕白川とも。現在の京都市左京区を流れる川。

〔夜迢迢〕夜がながながと続く様。唐・許渾^{けいちよく}「鷓鴣」詩に「池寒柳復凋、独宿夜迢迢（池 寒くして 柳 復た凋^{しぼ}み、独り宿りて 夜 迢迢）」と。

〔刀環〕刀の鐔^{つば}。『漢書』李陵伝に「立政等見陵、未得私語、即目視陵、而数数自循其刀環、握其足、陰諭之、言可還帰漢也。（立政等 陵を見るも、未だ私語するを得ず、即ち目して陵を視て、数数自ら其の刀環を循で、其の足を握り、陰かに之れに諭らしめ、漢に還帰すべきを言ふなり。）」とあるように、環が還と同音であることから、「刀環」は「還帰」の隠語として用いられるようになった。

〔慰寂寥〕寂しさをまぎらわせる。唐・吳融「南遷途中作七首」其五「寄友人」に「驚魂往往坐疑飄、便好為文慰寂寥（驚魂 往往にして 坐して^{ただよ}飄はんかと疑ひ、便ち^{よろ}好しく文を^{つく}為りて 寂寥を慰むべし）」と見える。

3 忽夢帰舟天際去 4 万山風葉落如潮

〔忽夢〕いつの間にかウトウトして夢を見る。白居易「琵琶引」に「夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅

闌干（夜 深くして 忽ち夢む 少年の事、夢に啼きて 妝涙は紅にして闌干たり）」と。

[帰舟] 帰りの舟。南朝宋・謝靈運「酬從弟惠連詩」五章（『文選』卷二十五）其五に「夢寐佇歸舟、秣我吝与勞（夢寐に歸舟を佇ち、我が吝と勞とを秣かん）」と。

[天際] 天の果て。李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」に「孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流（孤帆の遠影 碧空に尽き、唯だ見る 長江の天際に流るるを）」とあるのがよく知られる語だが、李白以前にも南朝齊・謝朓「之宣城郡出新林浦向板橋詩」（『文選』卷二十七）に「天際識歸舟、雲中見江樹（天際に歸舟を識り、雲中に江樹を見つ）」などの用例がある。

[風葉] 風に吹かれて舞い散る葉。唐・孟郊「送殷秀才南游」に「風葉乱辞木、雪猿清叫山（風葉乱れて 木を辞し、雪猿 清くして 山に叫ぶ）」と。

[如潮] 時が経てば必ず満ちたり引いたりするように。白居易「浪淘沙」に「相恨不如潮有信、相思始覺海非深（相ひ恨む 潮の信有るに如かざるを、相ひ思ふ 始めて海の深きに非ざるを覚る）」とある。

（自注）

[白河夜船] 大槻文彦『新編大言海』（富山房 1982）は「寝込ミテ、前後ヲ知ラヌコト。下ノ出典ヲ見ヨ。」として、江戸初期の俳諧論書である松江重頼の『毛吹草』を引いて「見ぬ京物語スル者ニ、白河ハ如何ニト問ヘバ、白河ハ、夜舟ニテ通りシ故ニ、知ラズト」とする。『日本国語大辞典』「しらかわーよぶね 【白川夜舟・白河夜船】」は「京都を見たふりをする人が地名の白川（または舟の通わない谷川の名とも）のことを問われ、川の名と思って、夜船で通ったから知らないと答えたという話によるという」として、「①いかにも知っているような顔をすること。知ったかぶり。②ぐっすり寝込んでいて何が起こったか全く知らないこと。③何も知らぬこと。」と語の意味を説明する。どうも出典がはっきりしないようである。

「東京雑事詩」七十三首其五十

【本文及び書き下し】

- 1 汽車欲發兩神傷 汽車 発せんと欲すれば 両神 傷み
- 2 絶塞深閨各断腸 絶塞 深閨 各おの断腸
- 3 灯火自求人自遠 灯火は自ら流れ 人は自ら遠し
- 4 前村明月鉄橋長 前村 明月 鉄橋 長し

（自注）俗名火車曰汽車、市有中央停車場、由此以達各地。國中鐵路総結處也。送行者、群聚於此。

（俗 火車に名づけて汽車と曰ひ、市に中央停車場有り、此よりして以て達各地に達す。

國中の鐵路の総結處なり。行を送る者、此に群聚す。）

【日本語訳】

- 1 汽車がいよいよ出発しようとする、二人の心が悲しみに傷む
- 2 遠く国境に出征する兵士と見送る女性とそれぞれが断腸の思い

3 灯火が後ろへ後ろへと流れていき、人はどんどん遠くなっていく

4 長々と続く鉄橋の向こうで村が明月に照らされている

(自注) 世間では「火車」を「汽車」と呼び、東京市に中央駅があって、ここから各地に行くことができる。日本中の鉄道の結び目である。見送りの人たちがここに集まる。

【押韻】「傷」「腸」「長」、下平七陽韻。

【語釈】

1 汽車欲発両神傷 2 絶塞深閨各断腸

[汽車] 日本語の「汽車」については『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』(佐藤亨 明治書院 二〇〇七)「きしゃ 汽車」の項に、「蒸気機関車がついて、線路の上を走る列車。神田孝平訳・慶応三年(一八六七)『経済小学』(下)に「器械 建造家製器家の徒は橋梁を架し蒸氣車蒸氣船を造り」とあるように、幕末には「蒸気車」であり、明治初期には「汽車」と併用された。…。そして、明治十年代には「汽車」(汽車)が一般化していく。」との説明がある。現代中国語では自動車の意。

[両神傷] 見送る者と見送られる者、二人のところが傷む。杜甫「法鏡寺」に「神傷山行深、愁破崖寺古(神は傷む 山行の深きに、愁ひは破る 崖寺の古りたるに)」と。

[絶塞] 遠く離れた国境の城塞。ここはその地に赴く兵士。杜甫「返照」に「衰年病肺唯高枕、絶塞愁時早閉門(衰年 肺を病へて 唯だ枕を高くし、絶塞 時を愁へて 早く門を閉づ)」と。

[深閨] 女性の居処。ここは夫や恋人が旅に出るのを見送る女性。陳・張正見「有所思」に「深閨久離別、積怨転生愁(深閨 久しく離別し、怨みを積んで 転た愁ひを生ず)」と。

3 灯火自流入自遠 4 前村明月鉄橋長

[前村] 前方にある村。唐・嚴維「秋夜船行」に「一点前村火、誰家未掩扉(一点 前村の火、誰が家か 未だ扉を掩はざる)」と。

[鉄橋] 日本最初の鉄道が新橋、横浜間に開通したのは1872(明治5)年のことだったが、当初鉄道橋はすべて木製だった。1877年以降、順次鉄橋に架け替えられた。

(自注)

[火車] trainの訳語。『現代漢語詞匯的形成一十九世紀漢語外来詞研究』には「1838年、裨治文将此詞解为『惟以火力施輪』。(Bridgman, *Meiligeguozhilue*: 第5頁正面) 此詞還見於1844年的 *Haiguo tuzhi*: 3021。(1838年、ブリッジマンはこの単語を『火力を輪に加える』(Bridgman, 『美理哥国志略』: 第5ページ表)」と解釈した。この語は1844年の『海国図志』: 3021にも見える。」とある。

[停車場] 日本語。『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』「ていしゃじょう 停車場」の項に「①『停車場へ着御の時に、横浜学校の生徒二百人ほと整列して見送り奉る、』(『東京日日新

聞』明治九年(1876)七月二十六日)」との用例を引き、『駅』の古い言い方。…。ていしゃば。英語Stationの訳語。」とする。

[鉄路] 中国語。『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』「てつろ 鉄路」の項に「鉄道。または鉄道線路。中国後期洋学書の、アメリカ宣教師、中国名、裨治文『大美連邦志略』(清、道光二十年(一八四〇)ごろ成立、重刻本、咸豐十一年(一八六一))に、『邦都又有四通八達之鉄路、以利火車往来、』(下馬邦)とあり、他に『智環啓蒙熟課初歩』では、railroads,railwaysに『鉄路』を宛てている。これら洋学書による訳語であって、現代の中国にそのまま続く。なお挙例②(福沢諭吉『西洋事情』…訳者注)の資料では『鉄道』が多用されているものの、『鉄路』はそう多くはない。④(『米欧回覧実記』…訳者注)では『鉄路』『鉄道』がそれぞれ十五例ほどあり、その使用はほぼ同数である。なお、明治十年(一八七八)十一月から同十一年(一八七九)十月までの『郵便報知新聞』には『鉄路』が一、『鉄道』が六例あり、更に『鉄道用』一『鉄道線路』二『鉄道列車内』一があるから、『鉄道』が優勢になりつつあったことが認められる。」という解説がある。裨治文『大美連邦志略』は「火車」語釈にあった『美理哥国志略』に同じ。

[総結] まとめる、ひとくくりにする、概括する。近代漢語。

[送行] 旅に出る人を見送る。杜甫「新安吏」に「送行勿泣血、僕射如父兄(行を送るも血を泣く勿かれ、僕射は父兄の如し)」と。

「東京雑事詩」七十三首其五十一

【本文及び書き下し】

- 1 女解羅襦士解刀 女は羅襦を解き 士は刀を解く
- 2 促尊入座酔葡萄 尊を促し入りて座し 葡萄に酔ふ
- 3 屏灯影底巾釵乱 屏灯の影底に 巾釵 乱れ
- 4 元禄茶寮夜会高 元禄の茶寮に 夜会 高し

(自注) 元禄時、最尚浮華。五年前士女衣履行元禄式。上野不忍池上更有元禄式茶寮、一時極盛。

茶寮者私宴処也。(元禄の時、最も浮華を尚ぶ。五年前 士女 衣履に元禄式を行ふ。上野不忍池の^{ほとり}上に更に元禄式の茶寮有り、一時 極めて盛んなり。茶寮は私宴の処なり。)

【日本語訳】

- 1 女性は薄絹の肌着を脱ぎ、男性は刀を外して
- 2 座に就くと酒樽を引き寄せ、葡萄酒に酔う
- 3 灯火に照らされた屏風の陰で、頭巾と簪が乱れて
- 4 元禄茶寮では夜の宴席が今たけなわ

(自注) 元禄時代は、最も浮かれた華やかさを好んだ。五年ほど前、身分のある人々の間で元禄式のファッションが流行った。上野の不忍池の周辺には改めて元禄式の茶寮ができて、一時非常に流行った。茶寮というのは内緒で宴会を開く場所である。

【押韻】「刀」「萄」「高」、下平四豪韻。

【語釈】

1 女解羅襦士解刀 2 促尊入座醉葡萄

〔羅襦〕薄絹の肌着。『史記』滑稽列伝に「羅襦襟解、微聞薳沢。（羅襦^{えり}襟^{きやうたく}解け、微かに薳沢を聞く。）」とあり、南朝齊・謝朓「贈王主簿詩二首」（『玉台』卷四）其二「輕歌急綺帶、含笑解羅襦（輕歌 綺帶を急にし、含笑 羅襦を解く）」と。

〔促尊〕促樽に同じ。酒樽を引き寄せる。『史記』滑稽列伝に「日暮酒闌、合尊促坐。（日暮れて酒^{たけなは}闌に、尊を合はせ坐を促す。）」とあり、三国魏・曹植「妾薄命行」に「皎若日出扶桑、促樽合坐行觴（皎として日の扶桑より出づるが若く、樽を促し坐を合はせて^{さかづき}觴^やを行る）」とある。

〔入座〕入坐とも。座に就く。『史記』范雎蔡澤列伝に「於是乃延入坐、为上客。（是に於いて乃ち延き入れて坐し、上客と為す。）」と。

3 屏灯影底巾釵乱 4 元禄茶寮夜会高

〔巾釵〕頭巾と簪。

（自注）

〔浮華〕うわべだけ賑やかで実質を伴わないこと。晋・張華「輕薄篇」に「末世多輕薄、驕代好浮華（末世は輕薄多く、驕代は浮華を好む）」と。

〔衣履〕衣服と履き物。ファッション。

〔上野不忍池〕江戸の頃から不忍池周辺には出合茶屋が軒を連ねていた。

〔茶寮〕小料理屋。

「東京雜事詩」七十三首其五十二

【本文及び書き下し】

- 1 電話飛伝絳闕仙 電話 飛びて伝ふ^{かうけつ} 絳闕の仙に
- 2 問誰工数五銖錢 問ふ 誰か五銖錢を数ふるを工^{たく}みにするかを
- 3 游糸断続金虫語 游糸^{いうし} 断続す 金虫の語
- 4 人在華鬢第幾天 人は華鬢^{けまん}の第幾天に在るか

（自注）電話即德律風也。毎仮公用者、須投五錢白銅貨一枚。（電話は即ち德律風なり。毎に公用に仮る者は、須く五錢白銅貨一枚を投ずべし。）

【日本語訳】

- 1 電話は朱色の門を備えた宮殿に住まう仙人に飛ぶように速く伝えてくれるが

2 いったい誰が五錢銅貨を上手に数えるのだろうか

3 クモの糸に似た電話線は黄金のアクセサリーを付けた女性の声を途切れ途切れに伝えてくれるが

4 その人は遠い天竺の何番目の天にいるのだろうか

(自注) 電話はテレフォンのことである。公用に借りる度に、五錢銅貨を投げ入れなければならない。

【押韻】「仙」「錢」「天」、下平一先韻。

【語釈】

1 電話飛伝絳闕仙 2 問誰工数五銖錢

[電話] 高名凱他編『漢語外来詞詞典』(上海辞書出版社 1984) は日本語の「電話 denwa」からの外来語とする。

[飛伝] 飛ぶように早く伝える。唐・韋莊「帰国遥」詞に「金翡翠、為我南飛伝我意(金翡翠よ、私のために南に飛んで私の思いを伝えてくれ)」と。

[絳闕] 宮殿や寺院の朱色の門。ここは仙人が住むという宮殿を指す。宋・蘇軾「水龍吟」詞に「古来雲海茫茫、道山絳闕知何处(昔から海のように広がる雲は果てしなく、朱色の門を備えた仙人が住むという山はいったいどこにあるのだろうか)」と。

[五銖錢] 中国古代の貨幣。前118(元狩5)年、前漢の武帝によって鑄造された。『漢書』食貨志下に「自孝武元狩五年三官初鑄五銖錢、至平帝元始中、成錢二百八十億万余云。(孝武の元狩五年 三官の初めて五銖錢を鑄してより、平帝の元始中に至るまで、錢を成すこと 二百八十億万余と云ふ。)」と。

3 游糸断続金虫語 4 人在華鬘第幾天

[游糸] 空中に漂うクモの糸。南朝梁・沈約「三月三日率爾成篇」(『文選』卷三十)に「游糸映空転、高楊払地垂(游糸 空に映じて転じ、高楊 地を払ひて垂る)」と。ここは電話線に喩える。

[金虫] 黄金で作った虫の形をした女性のアクセサリー。ここは女性を指す。南朝梁・吳均「和蕭洗馬子顯古意詩六首」(『玉台』卷六)其二に「蓮花銜青雀、宝粟鈿金虫(蓮花 青雀 銜み、^{はうぞく}宝粟 ^{てん}金虫を鈿す)」と。

[華鬘] 花鬘とも。花を糸で繋いで作った、古代インドの装身具。白居易「驃国楽」に「珠纓炫転星宿揺、花鬘斗藪龍蛇動(珠纓 炫転して 星宿 揺らぎ、花鬘 斗藪して 龍蛇 動く)」と。

[第幾天] 天は仏教的世界観で神々や天人が住む最上位の世界をいう。天はさらに二十八天に分けられる。李白「崇明寺仏頂尊勝陀羅尼幢頌」に「夫如是、亦可以従一天至一天、開天宮之門、見群聖之顔。(夫れ是くの如く、亦た可以て一天より一天に至り、天宮の門を開き、群聖の顔を見るべし。)」とあり、王琦注に「按釈典、…。凡三界共二十八天。天者、言其清浄光潔、最勝最尊。故名爲天。(釈典を按ずるに、…。凡そ三界は共に二十八天なり。天は、其の清浄光潔、最

勝最尊なるを言ふ。故に名づけて天と為す。）」とある。また、唐・楊巨源「題清涼寺」詩に「一声寒磬空心曉、花雨知從第幾天（一声 ^{かんけい} 寒磬 ^{さと} 空心を曉り、花雨 第幾天よりするかを知らんや）」と。

（自注）

[徳律風] telephoneの音訳語。得利風とも。『現代漢語詞匯的形成—十九世紀漢語外来詞研究』に「WGGB: 1877(X, 468) 有一則發自英国的新聞報導:『中国欽差試看得利風。』」…。1880年、WGGB(X II, 586, 第322頁正面) 發表了一篇關於日本流行電話的文章、文中称電話為『得力風』。1882年、WGGB(X I V, 678, 第250頁背面) 發表了一篇關於上海設立電話公司的文章、文中將電話称之为『徳律風』。(WGGB: 1877(X, 468)にイギリス発のニュースが『中国公使が試みにテレフォンを視察した。』と報じている。1880年、WGGB(X II, 586, 322ページ表) は日本で電話が流行しているという文章が掲載し、文中で電話を『得力風』と呼んでいる。1882年、(X I V, 678, 第250ページ裏は上海で電話会社が設立されたという文章を掲載し、文中で電話を『徳律風』と呼んでいる。)とある。WGGBは『万国公報』、清末にアメリカ人宣教師アレンが中国語で出版した雑誌。[公用]『明治事物起源5』交通部「電話の始め」に「(六) 公衆電話 東京上野、新橋に、始めて公衆電話を設置す(明治三十三年九月十一日)、自働式電話なり。」と。

[五錢白銅貨] 明治政府が制定した五錢白銅貨幣には、菊の模様の入った1888(明治21)年のものと、稲の模様の入った1897(明治30)年のものがある。

「東京雜事詩」七十三首其五十三

【本文及び書き下し】

- 1 麴塵遮断路三叉 ^{きくじん} 麴塵は遮断し 路は三叉
- 2 輪鉄飛揚帽影斜 輪鉄 飛揚し 帽影 斜めなり
- 3 徼遍中華輿服志 中華の輿服志を徼遍するも
- 4 称心那有自由車 心に称ふも ^{かな} ^{なん} 那ぞ自由車有らん

(自注) 自由車、前後祇兩輪、皆鋼質、以兩足踏機輪上、輪即自轉。故名自轉車。梁任公為改今名。

(自由車、前後に祇だ兩輪あるのみ、皆な鋼質にして、兩足を以て機輪の上を踏めば、輪は即ち自ら転ず。故に自轉車と名づく。梁任公 ^{つく} 為りて今の名に改む。)

【日本語訳】

- 1 淡黄色の柳が通せんぼして、道は三叉路になっている
- 2 鉄の輪が飛ぶように走り、帽子が斜めに見えるほど
- 3 中華の「輿服志」をひっくり返してみたが
- 4 「自由車」という言葉が心にかなうのに、どうしてもは見付からない

(自注) 自由車は、前後に二つの輪があるだけで、いずれも鉄でできており、兩足でカラクリの付いた輪を踏むと、輪は自然に回る。そこで自轉車と名付けたのである。梁啓超が作って今

の名に改めた。

【押韻】「叉」「斜」「車」、下平六麻韻。

【語釈】

1 麴塵遮断路三叉 2 輪鉄飛揚帽影斜

〔麴塵〕こうじに生じるカビ。薄い黄色であることから、柳の若葉に喩えられる。白居易「種柳三詠」其三に「更想五年後、千千条麴塵（更に想ふ 五年の後、千千 条^{えだ} 麴塵たらん）」と。

〔遮断〕遮る。韋莊「春日」詩に「紅塵遮断長安陌、芳草王孫暮不歸（紅塵 遮断す 長安の陌、芳草 王孫 暮れに帰らず）」と。

〔路三叉〕道が三方に分かれる。宋・張炎「風入松・賦稼村」詞に「児孫戲逐田翁去、小橋橫、路轉三叉（子供たちが遊びで田舎の老人を追い掛けると、小さな橋が架かっていて、道はみつまたに分かれる）」と。

〔帽影〕帽子をかぶった人のシルエット。宋・陸游「雪晴行益昌道中、頗有春意」に「春回柳眼梅鬚裏、愁在鞭糸帽影間（春は回^{かへ} 柳眼・梅鬚の裏に、愁ひは在り 鞭糸・帽影の間に）」と。

3 徼遍中華輿服志 4 称心那有自由車

〔徼遍〕くまなく追求する。

〔輿服志〕乗り物や衣服などの歴史について記述した書物。『後漢書』など正史にも「輿服志」が立てられる場合がある。

〔称心〕心になう。陶淵明「飲酒」二十首其十二に「死去何所知、称心固為好（死し去りては何の知る所ぞ、心^{かな}に称^{もと}ふは固より好しと為す）」と。

〔自由車〕自転車。『孽海花』第三回に「楼下門口、青漆鉄欄杆外、復靠着数十輛自由車。（階下の入口の、黒いペンキを塗った鉄柵の外には、数十台の自転車が立てかけてある。）」と見える。

（自注）

〔自転車〕日本語。現代中国語では「自転車」の語は定着せず、「自行車」が用いられるようになった。『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』には

①「今般府下車税左ノ通改正相成タリ……人力車同十三錢四厘 大車、自転車、日除車同六錢七厘」（明治五年（一八七二）七月『新聞雑誌』五十五号）

②「夜『ホリーベルジェー』ニ遊ブ。劇場ノ小ナルモノニシテ……又自転車ニ乗ル伎人有リ、」（成島柳北・明治十四年（一八八一）『航西日乗』）

との用例を挙げる。

〔梁任公〕梁啓超（1873～1929）、清末民初の政治家、ジャーナリスト。字は卓如、号は任公、飲冰室主人などの筆名を用いた。1898年、戊戌の政変により日本に亡命し、1912年に帰国するまで『清議報』『新民叢報』『新小説』などの雑誌を日本で創刊して宣伝・啓蒙活動を行った。彼の

文章は胡適、毛沢東など清末の若者たちに大きな影響を与えた。その文体は簡明であり当時非常に流行し「新民体」と称された。彼の和製漢語の大胆な採用は現代中国語の語彙に大きな影響を与えたと言える。

「東京雑事詩」七十三首其五十四

【本文及び書き下し】

- 1 宵声万馬掩重関　宵声　万馬　重関^{おほ}を掩ひ
2 夜報嫖姚出塞還　夜　嫖姚^{へうえう}の出塞より還るを報ず
3 銀箭伝呼新賜宴　銀箭　伝呼す　新たに宴を賜ふと
4 侍臣斉候錦鶏間　侍臣　^{ひと}斉しく^ま候つ　錦鶏^まの間

（自注）錦鶏間、宮殿名。選有功者入錦鶏間、与議大政曰錦鶏間祇候、猶我国直閣学士也。亦有武臣以功官錦鶏間祇候者。（錦鶏の間は、宮殿の名なり。功有る者を選び錦鶏の間に入り、大政を議するに与^{あづ}からしむるを錦鶏^{きんけい}間祇候^{の ま し こう}と曰ひ、猶ほ我が国の直閣学士のごときなり。亦た武臣の功を以て錦鶏間祇候に官たる者有り。）（※「曰」、底本作「日」。）

【日本語訳】

- 1 閉ざされた皇居の門前に、あまたの馬が夜通し嘶いている
2 夜の間に霍去病將軍が戦場から生還したとの知らせがあったのだ
3 時間を知らせる合図があつて、新たに宴席をお開き下さる
4 側近たちがうち揃つて錦鶏の間に参上する

（自注）錦鶏の間は宮殿の名である。功績のあつた者を選び錦鶏の間に入れ、国政に関する議論に参与させることを錦鶏間祇候といい、ちょうど我が国の直閣学士のようなものである。武臣で功績を挙げて錦鶏間祇候になる者もいる。

【押韻】「関」「還」「間」、上平十五刪韻。

【語釈】

1 宵声万馬掩重関　2 夜報嫖姚出塞還

〔宵声〕夜通し響く音。唐・李嶠「鐘」詩に「平陵通曙響、長樂警宵声（平陵　通曙の響き、長樂警宵の声）」と。

〔掩重関〕皇居の門を閉ざす。「重関」は幾重にも重なった宮殿や建物の門。ここは皇居をいう。唐・李嘉祐「送陸士倫宰義興」に「知君日清浄、無事掩重関（知る　君　日び清浄に、事無くして重関を掩ふ）」と。

〔夜報〕夜、知らせが届く。西北の辺境から烽火とともに危急の知らせ甘泉宮に届くというモチーフは六朝詩以来しばしば見られる。例えば、梁簡文帝蕭綱「從軍行」（『玉台』卷九作「雜句從軍行」）に「雲中亭障羽檄驚、甘泉烽火通夜明。貳師將軍新築營、嫖姚校尉初出征（雲中の亭障

羽檄 驚かす、甘泉の烽火 通夜 明らかなり。貳師將軍は新たに營を築き、嫫姚校尉は初めて出征す」と。嫫姚校尉は霍去病。

[嫫姚] 漢の霍去病（前140～117）。漢の武帝の時代に匈奴を討伐して大きな功績を挙げたが、二十四歳の若さで亡くなった。嫫姚校尉、驃騎將軍などを歴任した。

[出塞] 国境の砦を出て、外敵の根拠地に侵入する。唐・張説「薬園宴武輅沙將軍、賦得洛字」に「待聞出塞還、丹青上麟閣（待ちて聞く 出塞より還るを、丹青 麟閣に上らん）」と。

3 銀箭伝呼新賜宴 4 侍臣齐候錦鶏間

[銀箭] 水時計の時刻を指し示す銀で装飾された矢。李白「烏棲曲」に「銀箭金壺漏水多、起看秋月墜江波（銀箭 金壺 漏水 多く、起ちて看る 秋月の江波に墜つるを）」と。

[伝呼] 声を掛けてふれ回る。南朝梁・陸倕「新刻漏銘」序（『文選』卷五十六）に「衛宏載伝呼之節、較而未詳。（衛宏 伝呼の節を載するも、較らかにせんとするも未だ 詳 かならず。）」とある。

[賜宴] 君主が臣下に命じて宴を共にする。

[齐候] そろって側近くに参上する。唐・李頻「送陸肱尉江夏」詩に「県人齐候処、洲鳥欲飛時（県人 齊しく候つ処、洲鳥 飛ばんと欲するの時）」と。

[錦鶏間] もともと京都御所の居間の名。襖に錦鶏が描いてあったことから。ここは「錦鶏間祇候」のこと。

（自注）

[大政] 国家の政治。『春秋左氏伝』襄公二十九年に「吾子為魯宗卿、而任其大政、不慎舉、何以堪之。（吾子 魯の宗卿と為りて、其の大政に任じ、挙ぐることを慎まざれば、何を以てか之れに堪へん。）」と。

[錦鶏間祇候] 功勞のあった華族や官吏のために、1890（明治23）年に設けられた資格。名譽職であって俸給などはなかった。麝香間祇候に次ぐ。

[直閣學士] 官名。文章の撰述などに当たった。宋代の制度では學士、直學士、待制の次に置かれた。元・馬端臨『文献通考』職官考八・龍図閣に「宋朝大中祥符中建龍図閣。…。有學士・直學士・直閣學士。（宋朝の大中祥符中 龍図閣を建つ。…。學士・直學士・直閣學士有り。）」と。大中祥符（1008～1016）は、宋の真宗の年号。

「東京雜事詩」七十三首其五十五

【本文及び書き下し】

- | | |
|-----------|---------------|
| 1 荒川灯火画船帰 | 荒川 灯火 画船 帰り |
| 2 簫鼓家家闘伎囀 | 簫鼓 家家 闘伎を囀む |
| 3 貂綺行廬羊胛酒 | 貂綺 行廬 羊胛の酒 |
| 4 雪花如絮撲春衣 | 雪花 絮の如く 春衣を撲つ |

(自注) 向島雪景頗佳。有置酒称賞者、必買舟上溯至荒川、乃極其勝。(向島は雪景 頗る佳し。
置酒して称賞する者有り、必ず舟を買ひて上^{じやうそ} 溯して荒川に至り、乃ち其の勝を極む。)

【日本語訳】

1 荒川では火を灯した美しい舟が帰って行く

2 どの舟からも音楽が聞こえて来るのは芸を競う者たちを囲んでいるのだろう

3 舟上ではテンの毛皮にあや絹を身にまとった客が羊の肉を煮て酒を酌み交わし

4 花のように舞い散る雪が柳の綿のように春の衣装に降りかかる

(自注) 向島は雪景色がかなりよい。酒宴を設けて雪見をする者もいて、必ず舟を借りて荒川まで
溯り、その素晴らしさを極める。

【押韻】「帰」「囲」「衣」、上平五微韻。

【語釈】

1 荒川灯火画船帰 2 簫鼓家家闘伎囲

[荒川] 埼玉県から東京都を流れ東京湾に注ぐ河川。荒川（あらかわ）は、埼玉県および東京都を
流れ東京湾に注ぐ河川である。

[画船] 美しく飾り立てた船。宋・柳永「木蘭花慢」其三に「贏得蘭堂醞酒、画船携妓飲遊（立派
な広間で酒を酌み交わし、飾り立てた船に美妓と連れ立って遊覧を楽しむことができた）」とあ
るなど宋词に多く用いられる語。

[簫鼓] 笛と太鼓、広く音楽をいう。南朝梁・江淹「別賦」（『文選』卷十六）に「琴羽張兮簫鼓
陳、燕趙歌兮傷美人。（琴羽 張りて 簫鼓^{つら} 陳なり、燕趙 歌って 美人傷む。）」と。

[家家] 「家」は家族や店舗を数える量詞。ここは客を乗せた舟を数えると解した。

[闘伎] 技を競う。「東京雑事詩」其四十六「自注」の「角牴諸戯」と同じような意味合いで用い
る。唐・張説「東都酺宴四首」其三に「争馳群鳥散、闘伎百花団（争ひ馳せて 群鳥 散り、闘
伎を闘はせて 百花^{あつ} 団まる）」と。

3 貂綺行廬羊胛酒 4 雪花如絮撲春衣

[貂綺] テンの毛皮とあや絹、暖かで贅沢な衣服。

[行廬] これも舟と解した。移動する旅籠。

[羊胛] 羊の肩胛骨。『新唐書』回鶻伝下に「骨利幹処瀚海北、…。其地北距海、去京師最遠。又
北度海則昼長夜短。日入亨羊胛、熟、東方已明。蓋近日出处也。（骨利幹 瀚海の北に処り、…。
其の地 北は海を距て、京師を去ること最も遠し。又た北して海を度れば則ち昼 長く 夜 短
し。日 入りて羊胛を^に亨て、熟すれば、東方 已に明るし。蓋し日の出づる処に近ければなら
ん。）」とあることから、「羊胛熟」で時間の経過が速やかなことを表す。ここは手軽に煮ること
のできる肉の意で用いるのだろう。

[雪花] 花のように舞い散る雪。梁簡文帝蕭綱「玄圃寒夕詩」に「雪花無有蒂、氷鏡不安台（雪花は蒂有る無く、氷鏡は台に安からず）」と。

[如絮]「絮」は柳絮、柳の種子に生える白い綿状の毛。『世説新語』言語に「謝太傅寒雪日内集、与儿女講論文義。俄而雪驟。公欣然曰、『白雪紛紛何所似』。兄子胡兒曰、『撒塩空中差可擬』。兄女曰、『未若柳絮因風起』。公大笑樂。即公大兄無奕女、左將軍王凝之妻也。（謝太傅 寒雪の日に内集し、儿女と文義を講論す。俄にして雪 驟す。公 欣然として曰く、『白雪 紛紛たるは何の似る所ぞ』と。兄の子 胡兒 曰く、『塩を空中に撒けば差擬すべし』と。兄の女 曰く、『未だ柳絮の風に因りて起こるに若かず』と。公 大いに笑ひて楽しむ。即ち公の大兄 無奕の女、左將軍王凝の妻なり。）」とあるのを踏まえ、美しい女性の存在を意識させる。

[撲春衣] 春の衣装に柳絮のような雪が降りかかる。宋・王同祖「送客」に「楊柳若知行客恨、不教飛絮撲春衣（楊柳 若し行客の恨みを知らば、飛絮をして春衣を撲たしめざらん）」と。

（自注）

[向島雪景] 向島は雪見の名所として知られる。向島の長命寺には松尾芭蕉の「いざさらば 雪見にころぶ所まで」と刻まれた句碑がある。また、1838（天保9）年に刊行された斎藤月岑『東都歳時記』巻五・十一月にも「看雪 隅田川堤 三囲 長命寺の辺 真崎 真土山 上野（山内都て雪景よし） 不忍池 湯島台 神田社地 お茶の水土手 日暮里諏訪社辺（別当浄光寺を雪見でらといふ） 道灌山 飛鳥山 王子辺 目白不動境内 牛天神社地 赤坂溜池 愛宕山上（眺望尤よし） 八景坂（俗誤てやげん坂といふ、大井と荒蘭の間なり、この地元々八景あり、佳景の地なり） 吉原」と「看雪」の名所として長命寺の名を挙げる。前にも触れたように、1878（明治11）年4月16日、黄遵憲は公使何如璋らとともに大河内輝声の案内で「向島の花見」に出掛けている。『大河内文書』（さねとうけいしゅう編訳 平凡社東洋文庫 1964）参照。

「東京雑事詩」七十三首其五十六

【本文及び書き下し】

- 1 絶頂遊仙控六鰲 絶頂 仙に遊び 六鰲を控へ
- 2 凌雲閣上聴靈璫 凌雲閣上に靈璫を聴く
- 3 夕陽倒射黄金塔 夕陽 倒に射す 黄金の塔
- 4 紅瓦鄰鄰白鵠高 紅瓦 鄰鄰として 白鵠 高し

（自注）凌雲閣、在浅草公園内、牆皆用黄磚不堊。累十二級、上有八音琴甚巨。（凌雲閣、浅草公園内に在りて、牆は皆な黄磚を用ひて堊らず。十二級を累ねて、上に八音琴の甚だ巨なる有り。）

【日本語訳】

- 1 最上階では仙界に遊び、大地を背負うという六匹の大亀を操り
- 2 雲よりも高い楼閣で霊妙なる音楽に耳を傾ける

3 夕陽が黄金の塔を下から照らし

4 紅い瓦が清らかに並んで、アオサギが高く舞う

(自注) 凌雲閣は、浅草公園にあり、壁はすべて黄色い煉瓦を用いて白土を塗っていない。十二階建てで、上に巨大なオルゴールがある。

【押韻】「鰲」「漱」「高」、下平四豪韻。

【語釈】

1 絶頂遊仙控六鰲 2 凌雲閣上聴霊漱

〔絶頂〕本来は山の最も高いところ、頂上。杜甫「望嶽」に「会当凌絶頂、一覽衆山小（^{かなら}会ず当に絶頂を凌ぎ、一たび衆山の小なるを^み覧るべし）」と。

〔遊仙〕俗世間を逃れて仙界を訪れる。

〔六鰲〕六鰲とも。五つの仙山を背負うという六匹の伝説上の大亀。『列子』湯問に「渤海之東、不知幾億万里、有大壑焉。実惟無底之谷。其下無底。名曰歸墟。八紘九野之水、天漢之流、莫不注之、而無増無減焉。其中有五山焉。一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊。…。而五山之根、無所連著、常随潮波上下往還、不得暫峙焉。仙聖毒之、訴之於帝。帝恐流於西極、失羣聖之居、乃命禺彊、使巨鰲十五举首而戴之、迭為三番、六万歳一交焉。五山始峙。而龍伯之国有大人、举足不盈数步、而暨五山之所。一釣而連六鰲、合負而趣歸其国、灼其骨以数焉。於是岱輿員嶠二山流於北極、沈於大海。（渤海の東、幾億万里なるを知らず、大壑有り。実^{たいがく}に^{まこと}惟れ^こ底無きの谷なり。其の下^{そこ}底無し。名づけて歸墟と曰ふ。八紘九野の水、天漢の流れ、之れに注がざるは莫きも、増すこと無く減ること無し。其の中に五山有り。一に曰く岱輿、二に曰く員嶠、三に曰く方壺、四に曰く瀛洲、五に曰く蓬萊。…。而るに五山の根、連^{れんちやく}著^そする所無く、常に潮波に随ひて上下往還して、^{しばら}暫^{とど}くも峙まるを得ず。仙聖^{たいよ}之れを^や毒み、之れを帝に訴ふ。帝^{きよがう}西極に流れて、羣聖の居を失はんことを恐れ、乃ち禺彊に命じ、巨鰲十五をして首を挙げて之れを戴^{たが}き、迭ひに三番を為して、六万歳にして一たび交らしむ。五山^{かは}始めて峙まる。而るに龍伯の国に大人有り、足を挙ぐる^みこと数歩に^{およ}盈たずして、五山の所に暨ぶ。一釣にして六鰲を連ね、合はせ負ひて其の国に^{おもむ}趣き^や帰り、其の骨を灼きて以て^{うらな}数ふ。是に於いて岱輿・員嶠の二山^{北極に流れ、大海に沈む。}）」と見える。

〔凌雲閣〕明治から大正末期まで浅草にあった、高さ52^ふ、12階建て、八角形の塔。「浅草十二階」と呼ばれて親しまれたが、関東大震災で半壊し解体された。

〔霊漱〕神秘的な音楽。「漱」は楽器の名。元・袁桷「桐柏觀賦」に「霊漱清以集鸞、哀弦急而驚鴻。（霊漱^{かく}清くして^{さうき}以て鸞を集め、哀弦^{さかしま}急にして^{うらな}鴻を驚かす。）」

3 夕陽倒射黄金塔 4 紅瓦粼粼白鷗高

〔倒射〕逆さまに照らす。凌雲閣が高いために、夕陽が下から照らす。宋・蘇軾「衆妙堂」詩に「余光照我玻璃盆、倒射窓几清而温（余光^{はり}我を照らす^{さうき}玻璃の盆、窓几を^{さかしま}倒に射し^{うらな}清くし

て温かなり)」と。

[粼粼] 水の流れが清らかな様。『詩経』唐風・揚之水に「揚之水、白石粼粼（揚れるの水、白石粼粼たり）」とあり、「毛伝」に「粼粼、清澈也。」と。ここは多くの瓦が並んでいる様を水の流れに喩える。

[白鷁] アオサギ。高く飛ぶことのできる水鳥。『莊子』天運に「夫白鷁之相視、眸子不運而風化。（夫れ白鷁の相ひ視るや、眸子^{ぼうし} 運^{うご}かずして風化す。）」とある。

（自注）

[八音琴] オルゴール。「八音」は中国古代の楽器の総称。『尚書』舜典に「三載、四海遏密八音。（三載、四海 八音を遏^{あつみつ}密す。）」とあり、「孔伝」に「八音、金・石・糸・竹・匏・土・革・木。（八音は金・石・糸・竹・匏^{はう}・土・革・木なり。）」とある。

「東京雑事詩」七十三首其五十七

【本文及び書き下し】

- 1 五雲楼閣認児家 五雲の楼閣 児家を認め
- 2 怕御雷車逐電車 雷車を御して 電車^おを逐^{おそ}はんことを怕る
- 3 樺燭千条帰路晚 樺燭^{くわしよく} 千条 帰路^{おそ} 晩く
- 4 試灯風細雨糸斜 試灯 風は細かに 雨糸は斜めなり

（自注）市有電車、其駕行以電力。故較常車為捷。（市に電車有り、其の駕行は電力を以てす。故に常車^{くら}に較^{はや}べて捷しと為す。）

【日本語訳】

- 1 五色の瑞雲がたなびく楼閣にあなたの姿を見付けましたが
 - 2 雷神の車に乗って電車を追い掛けはしないかと心配です
 - 3 樺の木^{くわ}の皮で作った松明が千本も並ぶ中、すっかり家路が遅くなりましたが
 - 4 元宵節のために吊した提灯に照らされて、風もないのに糸のように細い雨は斜めに降っています
- （自注）市街地に電車があり、その運転には電力を用いる。そのため通常の車よりも速い。

【押韻】「家」「車」「斜」、下平六麻韻。

【語釈】

1 五雲楼閣認児家 2 怕御雷車逐電車

[五雲楼閣]「五雲」は青、白、赤、黒、黄、五色の瑞雲。白居易「長恨歌」に「忽聞海上有仙山、山在虚無缥缈間。楼閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子（忽ち聞く 海上に仙山有りと、山は虚無缥缈の間に在り。楼閣 玲瓏として 五雲 起こり、其の中に綽約として仙子多し）」とあるが、ここは仙人が住まうような豪華な建物。

[児家] 白話。一人称代名詞。わたし。『紅樓夢』第六十四回に「一代傾城逐浪花、吳宮空自憶児家。（希代の美女は波と共に逝き、吳の宮殿でひとり虚しくあなたのことを思っています。）」と。ここは次に引いた『搜神後記』の阿香を指す。

[雷車] 雷神が乗る車。阿香という美しい女神が推す。『搜神後記』巻五に「永和中、義興人姓周、出都、乗馬、從二人行。未至村、日暮。道辺有一新草小屋、一女子出門、年可十六七、姿容端正、衣服鮮潔。望見周過、謂曰、『日已向暮、前村尚遠、臨賀詎得至』。周便求寄宿。此女為燃火作食。向一更中、聞外有小儿喚阿香声、女応諾。尋云、『官喚汝推雷車』。女乃辞行、云、『今有事当去』。夜遂大雷雨。（永和中、義興の人 姓は周、都を出でて、馬に乗り、二人を從へて行く。未だ村に至らざるに、日 暮る。道辺に一の新草の小屋有り、一女子 門を出づるに、年 十六七可^{ばか}り、姿容 端正、衣服 鮮潔たり。望みて周の過ぐるを見、謂ひて曰く、『日 已に暮れに向かふも、前村 尚ほ遠ければ、臨賀^{なん} 詎ぞ至るを得んや』と。周 便ち寄宿するを求む。此の女^{むすめ} 為に火を燃やして食を作る。一更中に向て、外に小児の阿香を喚^{おい}ぶの声有るを聞き、女 応諾す。尋いで云ふ、『官 汝を喚びて雷車を推さしめんとす』と。女 乃ち辞して行かんとし、云ふ、『今 事有り当に去るべし』と。夜 遂に大いに雷雨す。）」と見える。

[電車] 『現代漢語詞匯的形成—十九世紀漢語外来詞研究』は「作為『電気行車』的縮略詞、它見於WGGB(2):1892、XLV II。『電車』見於GZHB:1891、II 中『電車鐵路』一文、它還見於WGGB(2):1893、LIII 中来自瑞士的一篇新聞報道。根拠Gao Mingkai (Wailaici yanjiu:89)、它是一個来自日語的原語借詞。…。它究竟是来自日語的漢字借詞、還是本族新詞、尚難確定。（『電気行車』の略語として『万国公報』(2):1892、XLV II に見える。『電車』は『格致匯編』:1891、II 中の『電車鐵路』という文章に見え、また『万国公報』(2):1893、LIII 中のスイスからのニュースにも見える。高名凱（「外来詞研究」:89）によると、日本語の原語からの借用語である。…。『電車』が結局のところ日本語の漢字借用語なのか、それとも新しい単語なのか、確定するのは難しい。」とする。『明治事物起源 5』交通部「電車の始め」には

（一）電気車の發明 明治十八年八月二十八日『毎日新聞』に、「米国フキラデルフィアのレッヂヤ新聞の記事をのせ、同地に一種の電気車を發明したる者あり。…。」といへり。この報道の後十年、本邦始めて電気鉄道あり。

（二）東京市電の始め 明治二十六年秋、東京鉄道馬車会社株主總會にて、馬車を電車に改易することを決議し、藤岡市助に一切の企画を依嘱せしが、ときの政府は、まだ電気鉄道の調査、研究出来てをらず、やつと三十三年十月二日に至つてこれを許可せり。会社側にては、早速東京電車鉄道株式会社と改称し、三十五年末より着手、三十六年七月、品川、新橋間の試運転を行ひ、八月二十二日より營業を開始せり。

とある。

3 樺燭千条帰路晚 4 試灯風細雨糸斜

[樺燭] カバの木の皮を巻いて作った灯火。唐・沈佺期「和常州崔使君寒食夜」に「無勞秉樺燭、晴月在南端（樺燭^とを乗るに勞する無く、晴月 南端に在り）」と。

[帰路晚] 楽しんでるうちに家に帰るのが遅くなる。唐・沈佺期「奉和立春遊苑迎春」に「歌吹
銜恩帰路晚、棲鳥半下鳳城来（歌吹 恩を^{ふく}銜んで 帰路 ^{おそ}遅く、棲鳥 半ば下りて 鳳城より来
たる）」と。

[試灯] 旧暦の正月十五日の元宵節では提灯を吊して豊年を祈るが、まだ元宵節が来ていないのに
提灯を吊して楽しむことを「試灯」という。宋・李清照「臨江仙」詞に「試灯無意思、踏雪没心
情（元宵節の前夜祭でも面白味はなく、雪を踏んで梅の花を探しに出ても気が乗らない）」と。

[風細] 風が穏やかなこと。南朝梁元帝蕭繹の「夜遊柏斎詩」（『玉台』巻七）に「風細雨声遅、
夜短更籌急（風 細くして 雨声 遅く、夜 短くして ^{かうちう}更籌 急なり）」と。

[雨糸] 糸のように細い雨。晩唐、五代前蜀・韋莊「丙辰年、鄜州遇寒食、城外醉吟、五首」其五
に「雨糸煙柳欲清明、金屋人間暖鳳笙（雨糸 煙柳 清明ならんと欲し、金屋 人間 鳳笙暖か
なり）」と。

（自注）

[電力] 『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』は1873（明治6）年の『米欧回覧実記』の用例
を引いた上で、「アメリカ宣教師、丁騷良、清、光緒九年（一八八三）『西学考略』に『更有録
音機、不仮電力。』（上 美国 録音機）とあり、英語electric powerの漢訳語と考えられる。」
とする。

[常車] 中国の古典では儀式に用いる車をいうが、ここは馬車など通常の車、の意で用いる。

「東京雑事詩」七十三首其五十八

【本文及び書き下し】

- 1 暁挾琳書入紫闈 暁に琳書を ^{さしはさ}挾 ^{しこん}んで紫闈に入り
- 2 羞擎紈扇障眉痕 羞^{ぐわんせん}ぢて紈扇を^{ささ}擎げ 眉痕を^{さへぎ}障る
- 3 鬢蟬釵鳳差池影 鬢^{びんぜん}蟬 釵^{さいほう}鳳 池影に^{たが}差ひ
- 4 一笑簪花過虎門 一笑して花を^{かんざ}簪し^{とらのもん}虎門を過ぐ

（自注）華族女学校在麴町虎門内、貴族女子均往受業。（華族女学校 麴町虎門内に在り、貴族の
女子 ^{ひと}均しく往きて業を受く。）

【日本語訳】

- 1 朝早くに美しい書物を小脇に抱え、皇居の門に入っていく
- 2 羞じらいながら白絹の扇をかざして、お化粧した眉を隠している
- 3 蟬の羽のように薄い鬢と鳳の飾りの付いた簪が、池の水面の影に映えて
- 4 軽く笑って花を髪に挿し、学校の入口を通り過ぎていく

（自注）華族女学校は麴町虎ノ門内にあり、貴族の女子はみなそこに入って学問を授かる。

【押韻】「闈」「痕」「門」、上平十三元韻。

【語釈】

1 曉挾琳書入紫閣 2 羞擎紈扇障眉痕

[琳書] よく分からない。美しい書物のことか。

[紫閣] 紫微に同じ。北斗七星の北にある十五の星の名。また天帝の居処。ここは皇居のこと。

唐・沈佺期「送金城公主適西蕃、応制」に「金榜扶丹掖、銀河属紫閣（金榜は丹掖に扶り、銀河は紫閣に属する）」と。

[羞擎] 羞じらいながら手でささげ持つ。

[紈扇] 白い薄絹で作った扇。南朝梁・江淹「雜体詩・效班婕妤『詠扇』」（『文選』卷三十一）に「紈扇如円月、出自機中素（紈扇 円月の如く、出づるに機中の素よりす）」と。

[眉痕] 眉墨。宋・謝逸「菩薩蛮」詞に「归来愁未寝、黛浅眉痕沁（家に帰り着いても愁いのために眠ることができず、涙のために眉墨が淡くなってしまう）」と。

3 鬢蟬釵鳳差池影 4 一笑簪花過虎門

[鬢蟬] 女性の髪型。蟬鬢とも。左右の鬢が蟬の羽のように薄い。晋・崔豹『古今注』雑注に「魏文帝宮人絶所愛者、有莫瓊樹・薛夜来・田尚衣・段巧笑四人、日夕在側、瓊樹乃製蟬鬢。縹眇如蟬翼、故曰蟬鬢。（魏の文帝の宮人 絶だ愛せらるる者に、莫瓊樹・薛夜来・田尚衣・段巧笑の四人有り、日夕 側らに在り、瓊樹 乃ち蟬鬢を製る。縹眇として蟬翼の如し、故に蟬鬢と曰ふ。）」とある。また、宋・晏幾道《更漏子》詞に「釵燕重、鬢蟬輕（ツバメの飾りのある簪は重く、蟬の羽のような鬢は軽い）」と。

[釵鳳] 鳳の飾りの付いた簪。鳳釵とも。李清照「菩薩蛮」詞に「燭底鳳釵明、釵頭人勝輕（灯火に照らされて鳳の簪が輝き、簪の端に付けた人の形の飾りが軽やかに）」と。

[池影] 池の水面に映る影。沈佺期「奉和聖製幸礼部尚書寶希玠宅」詩に「池影揺歌席、林香散舞台（池影 歌席を揺らし、林香 舞台上に散ず）」と。

[一笑] 軽く笑う。白居易「長恨歌」に「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色（眸を回らして一たび笑へば 百媚 生じ、六宮の粉黛 顏色無し）」と。

[簪花] 花を髪に挿す。清・趙翼『陔余叢考』簪花に「今俗惟婦女簪花、古人則無有不簪花者。（今の俗 惟だ婦女のみ花を簪すも、古人は則ち花を簪さざる者有る無し。）」と。

[虎門] 宮室の最も内部の門。後に国子学の別称となった。国子学は都に置かれ、教育を行った。『周礼』地官・師氏に「掌以皃詔王。以三徳教国子。…。居虎門之左、司王朝。掌国中失之事以教国子。（皃を以て王に詔ぐることを 掌る。三徳を以て国子に教ふ。…。虎門の左に居りて、王の朝を 司ふ。国の中失の事を掌りて以て国子に教ふ。）」とあるのによる。また、東京の地名、虎ノ門。江戸城の南端にあった門だが、1873（明治6）年に廃され、その近辺の地名となった。現在の東京都港区。

（自注）

[華族女学校] 1885（明治18）年、皇族や華族の子女のための教育機関として四谷に創立され、1889年、永田町に移転した。現在の学習院女子大学。
[麴町] 現在の千代田区。半蔵門前から西に向かった辺り。

「東京雑事詩」七十三首其五十九

【本文及び書き下し】

- 1 宮様争伝禁内妝 宮様 争ひて伝ふ 禁内の妝
- 2 舞衣波折太郎当 舞衣 波折して 太だ郎当
- 3 女紅詔罷江南錦 女紅 ^{みことのり} 詔 して罷めしむ 江南の錦
- 4 転見城中広袖長 ^{うた} 転た見る 城中 広袖の長きを

（自注）婦女衣皆広袖、長与裙斉、侈者以為誇。去年詔民尚節儉、此制終未革也。（婦女 衣 皆な
広袖、長さこと裙と齊しく、^{おご}侈る者 以て誇りと為す。去年 民に詔して節儉を ^{たつと}尚 ばしむ
るも、此の制 ^{つひ}終に未だ ^{あらた}革 まらざるなり。）

【日本語訳】

- 1 宮中で流行しているファッションを競うように広めているので
- 2 踊り手の衣装のようにヒラヒラとして、あまりにもゆったりとしている
- 3 詔が出て、女性の仕事を奨励し、江南の錦のような贅沢を戒めようとされたのに
- 4 それどころか都では長々とした広い袖を目にする

（自注）女性たちの衣装はいずれも広い袖で、スカートと同じくらいの長さがあり、贅沢をする者はそれを自慢にしている。去年、民に儉約を大切にするよう詔勅が発せられたが、このスタイルはまだ改められていない。

【押韻】「妝」「当」「長」、下平七陽韻。

【語釈】

1 宮様争伝禁内妝 2 舞衣波折太郎当

[宮様] 宮中で流行しているファッション。劉禹錫「贈李司空妓」に「高髻雲鬟宮様妝、春風一曲杜韋娘（高髻 ^{かうけい} 雲鬟 ^{うんくわん} 宮様の妝、春風 一曲 杜韋の娘）」と。「東京雑事詩」其四十には「時様新眉鏡裏長、重簾微度乳花香（時様の新眉 鏡裏に長く、重簾 微かに度る 乳花の香）」と「時様」の語が見えた。

[禁内] 禁中に同じ。

[波折] 物事の紆余曲折を言う語だが、ここは波のようにヒラヒラすることだろう。

[郎当] 「東京雑事詩」其八に「朱門十里伝箋去、舞袖郎当過柳橋（朱門 十里 箋を伝へ去けば、舞袖 郎当として 柳橋を過ぐ）」と見えた。踊り手の衣装がゆったりしている様。

3 女紅詔罷江南錦 4 転見城中広袖長

[女紅] 女功、女工に同じ。裁縫、機織りなど女性の仕事。『漢書』景帝紀に「夏四月、詔曰、『雕文刻鏤、傷農事者也。錦繡纂組、害女紅者也。…』。(夏四月、^{みことのり}詔^{てうぶんこくろう}して曰く、『雕文刻鏤は、農事を^{やぶ}傷る者なり。錦繡纂組は、女紅を^{そこな}害ふ者なり。…』と。)」とあるように、漢の景帝は農業を重んじ質素儉約を旨とする詔を発した。顔師古注に「紅読曰功。(紅 読んで功と曰ふ。)」とある。

[広袖] ゆったりとした袖。『玉台新詠』巻一「漢時童謡歌」に「城中好広袖、四方用匹帛(城中 広袖を好めば、四方 ^{ひきはく} 匹帛を用ふ)」とあり、都の流行が地方へ広がって極端になることを詠う。

(自注)

[去年詔民尚節儉] 1908(明治41)年に発布された「戊申詔勅」のことだと思われる。「戦後日尚淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ」と、日露戦争後の戦勝の余韻にひたり華美に流れる風潮を戒め、勤儉自強すべきことが強調された。

「東京雑事詩」七十三首其六十

【本文及び書き下し】

- 1 角巾釵影兩依稀 ^{かくきん} 角巾 ^{い き} 釵影 兩つながら依稀として
- 2 日曜天街散学帰 日曜 天街 散学して帰る
- 3 四壁薔薇春昼永 四壁 薔薇 春は昼 永く
- 4 講堂塵暖蟻蠓飛 講堂 塵 暖かく ^{べつもう} 蟻蠓 飛ぶ

(自注) 俗以日曜日為男女学生休沐日、即我国星期也。学生各有定服、不得相乱。若太学生、則戴方帽、上張四角、每出必冠之以示異。(俗に日曜日を以て男女の学生の休沐日と為すは、即ち我が国の星期なり。学生 各おの定服有りて、相ひ乱すを得ず。太学生の若きは、則ち方帽を戴き、上に四角を張り、出づる毎に必ず之れを冠して以て異なれるを示す。)

【日本語訳】

- 1 角帽の学生の姿と簪の女の子の姿と、ふたつともぼんやりとして
- 2 日曜日、学校が退けて都の通りを帰って行く
- 3 教室の四方の壁には薔薇が絡まり合って、春は昼間が長く
- 4 埃さえポカポカとユスリカが飛び回っている

(自注) 世間では日曜日を男女の学生の休日としており、我が国の星期に当たる。学生たちにはそれぞれ制服があり、決まりを破ることはできない。帝国大学の学生などは、角帽をかぶっていて、上部が四方に張り出しており、外出する時には必ずかぶって誇示する。

【押韻】「稀」「帰」「飛」、上平五微韻。

【語釈】

1 角巾釵影兩依稀 2 日曜天街散学帰

〔角巾〕四角い布の頭巾。普通は隠者の被り物だが、ここは大学生がかぶる角帽のこと。

〔釵影〕簪の姿。ここは女学生を指す。

〔依稀〕疊韻。ぼんやりとしてはっきりしない様。南朝宋・謝靈運「行田登海口盤嶼山」に「依稀採菱歌、彷彿含嚬容（依稀たり 採菱の歌、^{はうふつ}彷彿たり ^{がんひん かたち}含嚬の容）」と。

〔日曜〕『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』「日曜日」に「英語Sundayの訳語。一週間ごとに七曜を割り当てた、第一番目の日。キリスト教では安息日として休日とする。日曜。なお、明治十二年（一八七九）刊『華英辞典』はSundayに『礼拜日』をあてている。」とある。

〔天街〕都の通り。韓愈「早春呈水部張十八員外」二首其一に「天街小雨潤如酥、草色遙看近却無（天街 ^{すこ}小しく雨ふり 潤ひて酥^その如く、草色 遙かに見るも 近づけば却って無し）」と。

〔散学〕授業が終わる。学校がひける。『紅樓夢』第八十四回に「你今兒怎麼這早晚才散学（おまえ、今日はいったいどうしてこんなに遅くなってから塾から退けたのか?）」と。

3 四壁薔薇春昼永 4 講堂塵暖蟻蠓飛

〔春昼永〕春の穏やかな昼間が続く。宋・趙師俠「^{らい}酹江月・題趙文炳枕屏」詞に「困幅高深春昼永、寂寂重簾不卷（枕はゆったりとして春は昼がながく続くし、襞の多いカーテンも巻き上げずひっそりと過ごす）」と。

〔講堂〕学問を講義する部屋。教室。

〔蟻蠓〕虫の名。ヌカカ、ユスリカ。雨上がりに群がり飛ぶ。揚雄「甘泉賦」（『文選』卷七）に「歴倒景而絶飛梁兮、浮蟻蠓而掀天。（倒景を^へ歴て飛梁を^わ絶たり、蟻蠓に浮かんで天を^{はら}掀ふ。）」とあり、李善注は孫炎の『爾雅注』を引き「蟻蠓、虫，小於蚊。（蟻蠓は、虫，蚊より小さし。）」と。また、南朝梁・何遜「苦熱詩」に「蝙蝠戸中飛、蟻蠓窓間乱（蝙蝠は戸中に飛び、蟻蠓は窓間に乱る）」と。

（自注）

〔休沐〕休暇。『文選』卷二十七に南朝齊・謝朓の「休沐重還道中五言」を収め、その李善注に「休、仮也。沐、洗也。『漢書』、『張安世休沐未嘗出』。如淳曰、『五日得下一沐』。（休、仮なり。沐、洗なり。『漢書』に、『張安世 休沐して未だ嘗て出でず』と。如淳 曰く、『五日に一沐に下るを得』と。）」とある。『明治事物起源 7』暦日部「休暇日の始め」に「（五）日曜を休暇と定む 九年三月十二日は、休日制の紀元ともいふべき、整理更新の日なり。すなはち、来る四月一日より、日曜日午後を休業と一定し、諸官省はじめ、官私立学校も、みな一様にこれを用ひ、各方面の休日ここにまったく洋化す。」とある。

〔星期〕週。『漢語大詞典』には「我国古代曆法、把二十八宿按日・月・火・水・木・金・土次序

排列、七日一周、周而復始、稱為七曜。西洋曆法也以七日為一周。後因以如此連續排列的七天作為作息日期的計算單位、稱星期。(我が国の古代の曆法では、二十八宿を日・月・火・水・木・金・土の順序に従って配列し、七日で一周し、一周するとまた始まることを七曜と稱した。西洋の曆法でも七日を一周とする。そこで後に連続して配列された七日間を仕事と休みとの期日を数える単位とし、星期と呼んだ。)」との説明がある。

[学生各有定服]『明治事物起源 7』衣装部「大学服制の制定」に「従来、学生の服制としてはなかりしが、明治十九年四月二十八日、はじめて帝国大学大学院および分科大学学生服制を定め、十一月十一日より実施せり。帽子の形は、欧米諸大学の礼帽に倣ひしものにして、後つひに大学全般の用ひるところとなれり。」とある。

「東京雜事詩」七十三首其六十一

【本文及び書き下し】

- 1 誰家錦瑟紫檀槽 誰が家ぞ 錦瑟 紫檀^{したん さう}の槽
2 花庄長檐酒旆高 花は 長檐^{ちやうえむ}を圧し 酒旆^{しゅはい}は高し
3 深巷珠簾低不捲 深巷 珠簾 低くして捲^まかず
4 小窓梅雨売桜餅 小窓 梅雨 桜餅^{あうかう}を売る

(自注) 以桜桃葉裹餅、蒸之曰桜餅、香味似桜花。四五月間、多有市之者。(桜桃の葉を以て餅を^{つつ}裹み、之れを蒸すを^{さくらもち}桜餅と曰ひ、香味 桜花に似る。四五月の間、多く之れを^う市る者有り。)

【日本語訳】

- 1 どこの家からか、錦の模様で紫檀で作られた瑟の音が
2 桜の花が軒を覆い隠し、酒屋の旗が高々と掲げられている
3 奥まった路地では真珠のカーテンが捲かれぬまま引き下ろされて
4 小さな窓から梅雨の降る音に混じって桜餅を売る声が

(自注) 桜の葉で餅菓子を包み、蒸したものを^{さくらもち}桜餅と言う。香りは桜の花に似ている。四月から五月にかけて、あちらこちらで売っている。

【押韻】「槽」「高」「餅」、下平四豪韻。

【語釈】

1 誰家錦瑟紫檀槽 2 花庄長檐酒旆高

[錦瑟] 漆で錦の彩模様が描いてある瑟。唐・李商隱「錦瑟」詩に「錦瑟無端五十絃、一絃一柱思華年(錦瑟^{はし} 端無くも五十絃、一絃一柱 華年を思ふ)」とある。後に「錦瑟華年」で青春時代を表すようになる。ここもそのような華やいだイメージ。

[紫檀槽] 紫檀で作られた、弦楽器の胴の弦を掛ける凹んだ部分。唐・張籍「宮詞」に「黄金捍撥

紫檀槽、弦索初張調更高（黄金の捍撥^{かんはつ} 紫檀の槽、弦索 初めて張れば 調 更に高し）」と。

[花庄] 花が覆い隠す。元稹「去杭州」詩に「柳陰覆岸鄭監水、李花庄樹韋公園（柳陰は岸を覆ふ 鄭監の水、李花は樹を庄す 韋公の園）」と。

[長簷] 長簷とも。長く伸びたひさし。隋・盧思道「後園宴詩」に「南樓日已暮、長簷鳥応度（南樓に 日 已に暮れ、長簷に 鳥 応に度るべし）」と。

[酒旆] 酒旗、酒屋が看板代わりに掲げる旗。唐・杜牧「贈沈学士張歌人」に「吳苑春風起、河橋酒旆懸（吳苑に 春風 起こり、河橋に 酒旆 懸かる）」と。

3 深巷珠簾低不捲 4 小窓梅雨売桜餅

[深巷] 奥まった路地。晋・陶潜「帰園田居」五首其一に「狗吠深巷中、雞鳴桑樹顛（狗は吠ゆ 深巷の中、雞は鳴く 桑樹の顛^{いだし}）」と。

[珠簾] 真珠のカーテン。南朝齊・謝朓「玉階怨」詩（『玉台新詠』卷十）に「夕殿下珠簾、流螢飛復息（夕殿 珠簾を下ろし、流螢 飛びて復た息^やむ）」と。「東京雜事詩」其四十三にも「真珠簾底売珈琲、紅粉当鑪翠作圀（真珠の簾底 珈琲を売り、紅粉 鑪に当たりて 翠 圀^なを作す）」とあった。

[低不捲] カーテンが引き下げられている。明・陸深「我有江南屋」詩に「湘簾低不捲、宝鼎夜常温（湘簾は低くして捲かれず、宝鼎は夜 常に温かし）」と。

[小窓] しばしば女性の部屋の窓をいう。韋莊「清平樂」詞四首其二に「夢覺半床斜月、小窗風觸鳴琴（夢から覚めると西に傾いた月の光がベッドの半分を照らし、小さな窓から風が吹きこんで 琴に触れていた）」と。

[桜餅] 桜餅。黄遵憲「日本雜事詩」其百二十三に「費尽揆莎纔結果、果然団子貴於花（揆莎を費やし尽くして纔かに果を結び、果然 団子は花より貴し）」と、やはり桜餅を詠う。

(自注)

[餅] 米粉、小麦粉、豆粉などで作った蒸し菓子。

「東京雜事詩」七十三首其六十二

【本文及び書き下し】

- 1 生本清貧処士家 生は本と 清貧 処士の家
- 2 侯門曳履便繁華 侯門より履を曳けば 便ち繁華
- 3 山中宰相時名重 山中の宰相 時名 重く
- 4 為賜金屏護菊花 為に金屏を賜ひて 菊花を護る

(自注) 俗盛栽菊花。酒井・大隈両爵邸、用温室蒔之、栽菊尤多。花時縦人往觀、趨之成市。(俗盛んに菊花を栽う。酒井・大隈の両爵の邸、温室を用ひて之を蒔き、菊を栽うること尤も多し。花時 人に縦^{ゆる}して往觀せしむれば、之れに 趨^{おもむ}きて市を成す。)

【日本語訳】

1 生まれはもともと清貧の無位無官の家だったが

2 権貴の家の門をのんびりと入っていくと、そこには多くの花が咲き誇っている

3 国の相談役として時の名声が高く

4 金屏風を賜って、菊の花を守っている

(自注) 世間では盛んに菊の花を栽培している。酒井、大隈邸では温室で草花を育てているが、菊
が取り分け多い。花の見頃には人々に自由に観覧させるので、人が集まって市を成すほど
である。

【押韻】「家」「華」「花」、下平六麻韻。

【語釈】

1 生本清貧処士家 2 侯門曳履便繁華

[生本] 生まれは元々。白居易「初出城留別」に「我生本無郷、心安是帰処（我が生は本と郷無く、
心 安ければ 是れ帰処）」と。

[処士] 才能と徳がありながら出仕せず隠居している人。後には官職に就いていない知識人を広く
指すようになった。『孟子』滕文公下に「聖王不作、諸侯放恣、処士横議、楊朱・墨翟之言盈天
下。（聖王は作らず、諸侯は放恣にして、処士は横りに議し、楊朱・墨翟の言 天下に盈つ。）」
とある。

[侯門] 権貴の家。李白「送楊燕之東魯」に「我固侯門士、謬登聖主筵（我 固より侯門の士、謬
りて登る 聖主の筵）」と。

[曳履] 靴を引きずる。ゆったり、のんびりした様子を表す。唐・王勃「秋夜長」詩に「鳴環曳履
出長廊、為君秋夜擣衣裳（環を鳴らし履を曳きて長廊に出で、君の為に 秋夜 衣裳を擣つ）」
と。

[繁華] 繁花とも。満開の花。陶潜「栄木」詩四首其二に「繁華朝起、慨暮不存（繁華 朝に起こ
りて、暮れには存せざるを慨く）」と。

3 山中宰相時名重 4 為賜金屏護菊花

[山中宰相] 宰相の才がありながら山中に俗塵を避けている人。『南史』隱逸伝下・陶弘景に
「(梁武帝) 後屢加礼聘、並不出、…。国家每有吉凶征討大事、無不前以諮詢。月中常有数信、
時人謂為『山中宰相』。(梁武帝) 後 屢しば礼聘を加ふるも、並びに出でず、…。国家に吉凶
征討の大事有る毎に、前むるに諮詢を以てせざる無し。月中に常に数信有り、時人 謂ひて『山
中の宰相』と為す。)」とある。

[時名] その時の名声。唐・戴叔倫「暮春感懷」に「悠悠往事杯中物、赫赫時名扇外塵（悠悠たる
往事 杯中の物、赫赫たる時名 扇外の塵）」と。

〔護菊花〕「自注」にあるように菊を温室で育てて保護する。また、皇室の藩屏となること。

（自注）

〔酒井〕酒井忠興^{ただおき}（1879～1919）のことだと思われる。播磨姫路藩主酒井忠邦の長男で伯爵。東京小石川原町の屋敷に温室を構え、多くの植物を栽培した。菊、蘭、熱帯植物などで知られた。

〔大隈〕大隈重信（1838～1922）のことだと思われる。佐賀藩の藩士の出身。侯爵。菊の愛好家として知られ、自宅に温室を構えていた。

「東京雑事詩」七十三首其六十三

【本文及び書き下し】

- 1 綺懷何事最関情 綺懷 何事ぞ 最も情^{あづ}に関かる
2 流水年華暗自驚 流水 年華^{ひそ} 暗かに自ら驚く
3 小閣熏籠深巷屐 小閣 熏籠^{くんろう} 深巷^{げき}の屐
4 一簾秋雨売花声 一簾の秋雨 花を売^うるの声

（自注）女子皆善生花術。翦花焼断処、整其枝葉、挿瓶中、可経月不败。故担花売者、四時不絶。

（女子 皆^{いけばな}な生花の術を善くす。花を翦り断ちし処を焼^きき、其の枝葉を整へて、瓶中に挿せば、月を経るも敗^{そこ}なはざるべし。故に花を担ひて売^うる者、四時に絶へず。）

【日本語訳】

- 1 うら若い女性の心は、いったいどんな事に最も惹かれるのか
2 流れる水のように歳月が過ぎていくのに、我知らずハッとさせられる
3 部屋の中は火鉢から立ち上るお香の煙、奥まった路地からは下駄の音
4 カーテン越しにひとしきり降り続く秋雨の中、花を売^うる声が聞こえて来る

（自注）女性はみな上手に花を活ける。花をハサミで切り切ったところを焼^きき、枝や葉を整えて花瓶に挿せば、月を経ても傷まない。そこで花を売^うる者が、春夏秋冬、絶えることがない。

【押韻】「情」「驚」「声」、下平八庚韻。

【語釈】

1 綺懷何事最関情 2 流水年華暗自驚

〔綺懷〕恋心。清・黄景仁「写懷」詩に「華思半経消月露、綺懷微懶註虫魚（華思 半ば月露に消ゆるを経て、綺懷^{わづ} 微かに虫魚に註するに 懶^{ものう}し）」とある。また、黄景仁には「綺懷」と題する詩十六首もある。

〔関情〕心惹かれる、心動かされる。唐・陸龜蒙「又酬襲美次韻」に「酒香偏入夢、花落又関情^{あづ}（酒香 偏へに夢に入り、花 落ちて 又た情に関かる）」と。

〔流水〕流れゆく歳月の形容。唐・韋応物「淮上喜会梁川故人」に「浮雲一別後、流水十年間（浮

雲 一別の後、流水 十年の間)」と。

[年華] 歲月。時の流れ。韋応物「擬古詩十二首」其十二に「年華逐糸涙、一落俱不収（年華 糸涙を逐ひ、一たび落つれば 俱に収まらず）」と。また、元・曹伯啓「暮春用唐寿卿韻二首」其二に「流水年華去不窮、眼看濃緑換芳藂（流水 年華 去りて窮まらず、眼に看る 濃緑の芳藂に換はるを）」と。

[暗自驚] 人知れずはっとする。宋・周莘「野泊対月有感」（元・方回編『瀛奎律髓』卷三十二）に「酒添客涙愁仍濺、浪卷帰心暗自驚（酒は客涙を添へ 愁ひて仍ほ濺ぎ、浪は帰心を巻きて 暗かに自ら驚く）」と見える。

3 小閣熏籠深巷屐 4 一簾秋雨売花声

[小閣] 女性の住居。宋・晏殊「浣溪沙」詞に「小閣重簾有燕過、晚花紅片落庭莎（彼女の部屋に掛かるカーテンの外をツバメが過ぎり、晩春の花の紅い花片が庭に舞い散る）」とあるなど、宋詞に多く見られる語。

[熏籠] 燠籠とも。香を焚き、暖を取ったりする火鉢。王昌齡「長信秋詞」五首其一に「熏籠玉枕無顔色、臥聴南宮清漏長（熏籠 玉枕 顔色無く、臥して聴く 南宮 清漏の長きを）」と。

[深巷屐] 奥まった路地に響く下駄の音。宋・范成大「雪後六言二首」其一に「雨声^{たんけい}和深巷屐、風力到短檠灯（雨声 深巷の屐と和し、風力 短檠の灯に到る）」とある。

[一簾秋雨] カーテンのように見える秋の雨。或いはカーテンの向こうに降る秋の雨。宋・楊炎正「鵲橋仙」詞に「夜来無奈被西風、更吹做一簾秋雨（夕べからずっと西風が吹いてひとしきり秋の雨が降るのをどうしようもない）」と。

[売花声] 花売りの声。宋・王岬「夜行船」詞に「小窓人静、春在売花声裏（彼女の部屋の窓では人がひっそりと、春は花売りの声の中にある）」と。

（自注）

[生花術] 「生花」は日本語。

「東京雜事詩」七十三首其六十四

【本文及び書き下し】

- 1 翟衣百折舞裙斜 翟衣は百折して 舞裙は斜めに
- 2 妝束分明似内家 妝束 分明にして 内家に似る
- 3 人隔羃羅窺不見 人 羃羅^{べきり}を隔て 窺へども見えず
- 4 金根認是禁中車 金根 是れ禁中の車なるを認む

（自注）宮中女官出、皆單表衣西洋服。除扈從外鮮有外遊者。故人亦罕見之。（宮中の女官 出づるに、皆な表を單^{おほ}ひ西洋服を^きる。扈從^{こじゆう}を除きてより外^{ほか} 外に遊ぶ者有ること 鮮^{すくな}し。故に人も亦た罕^{まれ}に之れを見る。）

【日本語訳】

1 キジの羽で飾った衣装はヒラヒラと、踊り手のスカートはひるがえる

2 彼女たちのファッションは明らかに宮女たちのマネ

3 頭巾に隠されていて、覗き見ようとしてもよく分からない

4 黄金で飾った車なので、禁中の車だと見分けられた

(自注) 宮中の女官が外出する折には、いずれも顔を隠し洋服を着る。随行するのを除くと外出する者はほとんどいない。そのため、人々が目にすることも稀である。

【押韻】「斜」「家」「車」、下平六麻韻。

【語釈】

1 翟衣百折舞裙斜 2 妝束分明似内家

[翟衣] キジの羽で飾ったりキジの紋様が施された、貴婦人が着用する服。唐・権徳輿「河南崔尹即安喜従兄宜于室家四十余歳一昨寓書病伝永写告身既枉善祝因成絶句」に「尊崇善祝今如此、共待曾玄捧翟衣（善祝を尊崇すること 今 此くの如く、共に曾玄を待ちて 翟衣を捧げん）」と。

[百折] 幾重にも折れ曲がる。通常は唐・何敬「題吉州龍溪」に「奔流百折銀河通、落花滾滾浮霞紅（奔流 百折して 銀河に通じ、落花 ^{こんこん} 滾滾として霞に浮かんで紅なり）」とあるように、川の流れを形容することが多いが、ここは踊り手の衣装の襞が多いことを表す。

[舞裙斜] 踊り手のスカートが翻る様。宋・晁補之「南歌子」詞に「東園撻鼓賞新醅、喚取舞裙歌扇、探春回（庭園で太鼓を打ち鳴らして新酒を味わい、スカートを身に纏い扇を手にした踊り手を招き寄せて、春のピクニックに出掛ける）」と。

[妝束] ファッション。白居易「和夢遊春詩一百韻」詩に「風流薄梳洗、時世寛妝束（風流 梳洗を薄^{かろ}んじ、時世 妝束を寛^{ゆる}す）」と。

[内家] 宮女。唐・薛能「吳姬」十首其一に「身是三千第一名、内家叢裏独分明（身は是れ三千の第一名、内家 叢裏 独り分明）」と。

3 人隔羃 羃窺不見 4 金根認是禁中車

[羃 羃] 頭巾。六朝の頃には『晋書』西戎・吐谷渾伝に「其男子通服長裙、帽或戴羃 羃。（其の男子 ^{あまね} 通く長裙を服し、帽 或いは羃 羃 を戴く。）」とあるように西域の遊牧民族に見られる習俗だったが、やがて中原に輸入され、『新唐書』車服志に「初婦人施羃 羃 以蔽身。（初め婦人 羃 羃 を施^のばして以て身を蔽ふ。）」と女性が用いるようになった。

[金根] 金根車。黄金で飾った根車。根車は自然に曲がった樹木で作った車輪を用いた車。そのような樹木が見付かると瑞祥とされたため、天子の乗る車を言うようになった。漢・蔡邕『独断』卷下に「上所乗曰金根車、駕六馬、有五色安車・五色立車各一、皆駕四馬、是為五時副車。（上の乗る所を金根車と曰ひ、六馬を駕し、五色安車・五色立車 各おの一有り、皆な四馬を駕し、是れ五時の副車と為す。）」とあり、晋・潘岳「藉田賦」（『文選』卷七）に「金根照耀以焜晃兮、

龍驤騰驤而沛艾。(金根 照耀して以て烟 晃^{けいくわう}し、龍驤^{りよう き} 騰驤^{とうじやう}して沛艾^{はいがい}す。)」と。

(自注)

[扈從] 天子が外出する時の随行、従者。漢・司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)に「孫叔奉轡、衛公参乘。扈從横行、出乎四校之中。(孫叔 轡を奉じ、衛公 参乗す。扈從 横行し、四校の中より出づ。)」とあり、後に広く従者を指すようになった。

「東京雜事詩」七十三首其六十五

【本文及び書き下し】

- 1 天風吹断玉人簫 天風 吹き断つ 玉人の簫
- 2 縹緲飛楼入絳霄 縹緲 飛楼 絳霄に入る
- 3 紅葉黄花秋一角 紅葉 黄花 秋 一角
- 4 金泥門署晚香寮 金泥 門に署^{しる}す 晚香寮

(自注) 晚香寮為女子大学寄宿学生処、在小石川老松町。外復有桜館・樺山寮・芙蓉寮等。(晚香寮は女子大学の学生を寄宿せしむるの^{ところ} 處^た 為り、小石川老松町に在り。外に復た桜館・樺山寮・芙蓉寮等有り。)

【日本語訳】

- 1 天津風があの人^のの吹く簫の音を吹き消す
- 2 あの人がいる高い建物が遠く遥かに天にまで届くから
- 3 樹々の葉もすっかり紅くなり、菊の黄色い花がまだ咲いていて、秋は庭の片隅に残るばかり
- 4 それもそのはず、門に金泥で「晚香寮」と認^{したた}めてある

(自注) 晚香寮は女子大学の学生寄宿舍で、小石川老松町にある。その他に桜館・樺山寮・芙蓉寮などがある。

【押韻】「簫」「霄」「寮」、下平二蕭韻。

【語釈】

1 天風吹断玉人簫 2 縹緲飛楼入絳霄

[天風] 風。古辞「飲馬長城窟行」(『文選』卷二十七、『玉台』卷一作蔡邕)に「枯桑知天風、海水知天寒(枯桑に天の風を知り、海水に天の寒きを知る)」と。また、我が国の僧正遍昭の「天つ風 雲のかよひぢ 吹きとちよ をとめの姿 しばしとどめむ」を意識するかもしれない。

[吹断] 吹き消す。薛昭蘊「小重山」詞(『花間集』卷三)に「月朧明、東風吹断紫簫声(月は朧に、春風が簫の音を吹き消す)」と。

[玉人簫] 玉人は愛する人に呼び掛ける二人称。ここは春秋時代の簫史をいう。『列仙伝』に「簫史者、秦穆公時人也。善吹簫、能致孔雀・白鶴於庭。穆公有女、字弄玉、好之。公遂以女妻焉。

日教弄玉作鳳鳴、居数年、吹似鳳声、鳳凰来止其屋。公為作鳳台、夫婦止其上、不下数年、一旦皆随鳳凰飛去。(簫史は、秦の穆公の時の人なり。善く簫を吹き、能く孔雀・白鶴を庭に致す。穆公も女^{むすめ}有り、字は弄玉、之れを好む。公 遂に女を以て妻^{めあは}す。日び弄玉に鳳鳴^なを作すを教へ、居ること数年、吹くこと鳳声に似、鳳凰 来たりて其の屋に止まる。公 為に鳳台を作り、夫婦其の上に止まり、下らざること数年、一旦 皆な鳳凰に随つて飛び去る。)」とあるのに拠る。後、「玉人吹簫」は男女が慕い合うことを表すようになった。

〔縹緲飛樓〕縹緲は遠く微かな様。飛樓は高い樓閣。仙人の住居。白居易「長恨歌」に「忽聞海上有仙山、山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子（忽ち聞く 海上に仙山有りと、山は虛無縹緲の間に在り。樓閣 玲瓏として 五雲 起こり、其の中に綽約として仙子多し)」と。〔絳霄〕空の最も高い辺り。「東京雜事詩」其五に「春城歸馬蹴花驕、回首三台近絳霄（春城 歸馬 花を蹴^ふみて驕り、首^{かうべ}を回^{めぐ}らせば 三台 絳霄に近し)」とあった。

3 紅葉黄花秋一角 4 金泥門署晚香寮

〔紅葉黄花〕モミジとキク。晩秋の風景。宋・晏幾道「思遠人」詞に「紅葉黄花秋意晚、千里念行客（紅葉と菊の黄色い花が秋が終わろうとしていることを教えてくれ、千里の彼方にいるあの人のことを心に思う）」と。

〔金泥〕金粉を膠で溶いて顔料としたもの。

〔晚香寮〕日本女子大学の寮。渋沢栄一の寄贈により、1907（明治40）年竣工。晩香は菊のこと。宋・韓琦「九日水閣」詩に「雖慚老圃秋容淡、且看黄花晚節香」とあり、菊が晩秋の頃になってまだ花を咲かせていることから、「黄花晚節」「晩香」の語が生まれた。

（自注）

〔小石川老松町〕小石川区高田老松町。現在の文京区の西部、目白台周辺。

「東京雜事詩」七十三首其六十六

【本文及び書き下し】

- 1 甘隸妝台作侍臣 甘んじて妝台に隸して 侍臣と作り
- 2 深閨供奉画眉人 深閨に供奉す 眉^{まゆ}を画くの人に
- 3 戲徵帝制娛新寵 戯れに帝制に徴すれば 新たに寵^{たの}せらるるを娛しみ
- 4 恭署花封拜別嬪 恭しく花封^{しる}を署す 別嬪に拜せらると

（自注）俗皆姤容好飾、号女子之姤者曰別嬪。蓋襲用宮闈語、而不知其僭也。（俗 皆な容^{かたち}を姤^{ほこ}り飾るを好んで、女子の姤^{うつく}しき者を号して別嬪と曰ふ。蓋し宮闈^{きやうめ}の語を襲用せしならんも、其の僭なるを知らざるなり。）

【日本語訳】

- 1 自ら進んで化粧台に従属して、お側の者となり

2 寝室では眉を描いてくれる夫にお仕えする

3 お遊びで天子の制度に例を求めるならば、新たに寵愛されることになったことを喜んで

4 「別嬪」にして頂きましたという朝廷からの知らせを、恭しく書き記すようなもの

(自注) 世間では誰もが美しく装うことを誇りにし好んで、女性で美しい者を「別嬪」と呼ぶ。恐らくは後宮の語を踏襲したのだろうが、僭越であることを分かっていない。

【押韻】「臣」「人」「嬪」、上平十一真韻。

【語釈】

1 甘隸妝台侍臣 2 深閨供奉画眉人

[妝台] 化粧台、鏡台。唐・盧照鄰「梅花落」に「因風入舞袖、雜粉向妝台（因風入舞袖、雜粉向妝台）」と。

[侍臣] 天子の側近くに仕える臣下。

[深閨] 女性の住居。「東京雜事詩」其五十に「汽車欲發兩神傷、絕塞深閨各斷腸（汽車 発せんと欲すれば 兩神 傷み、絶塞 深閨 各おの断腸）」とあった。

[供奉] 天子の側近くに仕える。

[画眉人] 夫をいう。『漢書』張敞伝に「敞無威儀、…。又為婦画眉、長安中伝張京兆眉妩。有司以奏敞。上問之、対曰、『臣聞閨房之内、夫婦之私、有過於画眉者』。（敞 威儀無し。…。又た婦の為に眉を画き、長安中 張京兆の眉妩なるを伝ふ。有司 以て敞を奏す。上 之れに問ふに、対へて曰く、『臣 聞く 閨房の内、夫婦の私、眉を画くに過ぎたる者有るを』と。）」とある故事に拠る。

3 戲微帝制娛新寵 4 恭署花封拜別嬪

[帝制] 皇帝にまつわる儀式、制度。『漢書』賈誼伝に「若此諸王、雖名為臣、実皆有布衣昆弟之心、慮亡不帝制而天子自為者。（此の諸王の若きは、名は臣為りと雖も、実は皆な布衣昆弟の心有り、慮 ね帝制にして天子たるを自ら為さざる者亡し。）」とあり、顔師古注に「言諸侯皆欲同皇帝之制度、而為天子之事。（言諸侯 皆な皇帝の制度と同じくして、天子の事を為さんと欲するを言ふ。）」と。

[新寵] 新たに寵愛を受けることになった女性。南朝陳・陰鏗「班婕妤怨」に「柏梁新寵盛、長信昔恩傾（柏梁には 新寵 盛んに、長信には 昔恩 傾く）」と。

[花封] 明清時代、女性に与えられた、爵位や名号などを記した栄典。

[別嬪] 日本語、美人をいう。ここは「嬪」がもともと宮女の意であることを意識する。『日本国語大辞典』「べっぴん 【別品・別嬪】」には「幕末から見られる語で、本来は特に優れた品物や人物を意味し、女性に限らず男性についてもいったが、その後、女性の容姿に限られるようになる。それに伴い、表記も『別嬪』が用いられるが、明治時代では、美人の意で『別嬪』も『別品』も見られ、作家によっても偏りがある。」と語誌の説明がある。

（自注）

〔姱容好飾〕美しく装うことを誇り、好むこと。「姱」は美しい様をいうが、ここは「誇」の意で用いる。

〔姣〕顔かたちが美しい。

〔宮闈〕後宮をいう。『後漢書』皇后紀上・明德馬皇后に「既正位宮闈、愈自謙肅。（既に位を宮闈に正し、愈いよ自づから謙肅たり。）」と。

「東京雜事詩」七十三首其六十七

【本文及び書き下し】

- 1 楼影分明一角青 楼影 分明にして 一角 青く
- 2 尋春無路隔銅屏 春を尋ぬるに路無く 銅屏隔つ
- 3 美人踞結朱糸鞵 美人 ^{ひざまづ} 踞 きて結ぶ 朱糸の^{べつ}鞵
- 4 辛苦提鞋出内廷 辛苦して ^{くつ} 鞋を提げ 内廷を出づ

（自注）室皆如軒亭、四壁皆罔紙屏、中安方席。入須置履戶外以鞵進、出則繇婢妾履之。提鞋事見『五代詩話』李後主条。（室は皆な軒亭の如く、四壁 皆な紙屏を罔み、中に方席を安んず。入るには須く^{くつ}履を戶外に置き、鞵を以て進むべく、出づるには則ち婢妾に^よ繇りて之れを履く。^は提鞋の^{ていあい}事 『五代詩話』李後主の条に見ゆ。）

【日本語訳】

- 1 高殿のシルエットがくっきりと、片隅だけが黒々として見える
- 2 外出して春の景色を楽しもうとしても、銅の屏風に隔てられて道がない
- 3 美しい女性がひざまずいて、紅い靴下を結んでくれる
- 4 苦労して靴を手を提げ、家から出る

（自注）家屋はいずれも四阿のようで、四方の壁がどこも紙の屏風で罔まれ、屋内には座布団が敷いてある。入る時は靴を屋外に置き靴下で進まなければならず、出る時にはお手伝いさんが履かせてくれる。「提鞋」のエピソードは『五代詩話』李後主の条に見える。

【押韻】「青」「屏」「廷」、下平九青韻。

【語釈】

1 楼影分明一角青 2 尋春無路隔銅屏

〔楼影〕高い建物の姿。ここは、後に見るように、隋煬帝が築いた迷楼をいう。

〔一角青〕ひとところが黒々として見える。ここは、後に見るように、「烏銅」で鑄造した屏風をいう。

〔尋春〕春の景色を味わいに行く。唐・陳子昂「晦日宴高氏林亭」に「尋春遊上路、追宴入山家

(春を尋ねて 上路に遊び、宴を追ひて 山家に入る)」と。

[銅屏] 銅で作った衝立。隋の煬帝を描いた小説、『迷楼記』に「上官時自江外得替回。鑄烏銅屏八面。其高五尺而闊三尺、磨以成鑑、為屏、可環於寢所、詣闕投進。帝以屏内迷楼、而御女於其中、織毫皆入於鑑中。帝大喜曰、『絵図得其象耳。此得人之真容也。勝絵画万倍矣』。(上官時江外より替はりて回るを得たり。烏銅の屏八面を鑄る。其の高さ五尺にして闊さ三尺、磨きて以て鑑を成して、屏と為し、寢所に環らしむべく、闕に詣りて投進す。帝 屏を以て迷楼に内れて、女を其の中に御すに、織毫も皆な鑑の中に入る。帝 大いに喜びて曰く、『絵図は其の象を得るのみ。此れ人の真容を得るなり。絵画に勝ること万倍なり』と。)」とあるのに拠る。

3 美人踞結朱糸鞵 4 辛苦提鞋出内廷

[踞] ひざまずく。

[朱糸鞵] 紅い靴下。

[提鞋] 靴を手に提げる。「自注」語釈参照。

[内廷] 禁中のことだが、ここは一般の家庭を洒落ていう。

(自注)

[軒亭] あずまや。ここは日本家屋をいう。宋・戴復古「夏日続題」に「避暑軒亭爽、凭虚眼界遥(暑さを避けて 軒亭 爽やかに、虚に凭りて 眼界 遥かなり)」と。日本家屋については黄遵憲も「日本雑事詩」其百四十四で、

千門万戸未分明 千門万戸 未だ分明ならず
面面屏風白月生 面々の屏風 白月 生ず
数尺花茵塵不動 数尺の花茵 塵 動かず
偶聞橐橐有靴声 偶たま聞く 橐橐 靴の声有るを

と詠う。郁曼陀が「分明」「屏」の語を用いたのは「日本雑事詩」を意識したのかもしれない。

[紙屏] 紙で作られた屏風。ここは障子をいう。宋・陸游「暖閣」詩に「紙屏山字様、布被隸書銘(紙屏は山字の様、布被は隸書の銘)」と。

[方席] 四角い敷物。ここは座布団をいう。

[履之] 靴を履かせる。『史記』留侯世家に「良業為取履、因長跪履之。(良 業に為に履を取れり、因りて長跪して之に履かす。)」

『五代詩話』 清・王士禛の撰、鄭方坤の刪補。卷一に「後主繼室周后、即昭恵后之妹也。昭恵感疾、后嘗在禁中、先与後主私。後主作『菩薩蛮』云『花明月暗飛輕霧、今宵如向郎辺去。剗襪歩香階、手提金縷鞋。画堂南畔見、一晌偎人顫。奴為出来難、教郎恣意憐』。此詞遂傳播於外。至納后乃成礼而已、大譙群臣、韓熙載以下、皆為詩諷焉。後主不之譴。(後主の繼室 周后は、即ち昭恵后の妹なり。昭恵 疾ひに感じ、后 嘗てに禁中に在り、先に後主と 私す。後主『菩薩蛮』を作りて云ふ『花は明らかに 月は暗く輕霧飛ぶ、今宵 郎辺に向かひて去るが如し。剗襪 香階を歩むに、手に金縷の鞋を提ぐ。画堂の南畔に見え、一晌 人に偎りて顫ふ。奴は出

で来たること難きが為に、郎をして恣意に憐^めでしめん』と。此の詞 遂に外に伝播す。后を納^いるに至り乃ち礼を成すのみなるも、大いに群臣と譙^{えん}するに、韓熙載 以下、皆な詩を為^{つく}りて諷す。後主 不^せ之れを謹めず。))」との逸話が見える。この記事は清・徐鉉『詞苑叢談』巻六から採録したもの。

[李後主] 李煜 (937~978)、五代十国南唐の第三代、最後の天子であることから李後主と称される。宮廷生活や亡国の君主としての悲哀を詞に詠った。

「東京雜事詩」七十三首其六十八

【本文及び書き下し】

- 1 鑄得金莖入建章 金莖を鑄し得て 建章に入れば
- 2 功臣図像鬱蒼蒼 功臣 図像 鬱として蒼蒼たり
- 3 銅人老倚宮門泣 銅人 老に宮門に倚りて泣き
- 4 幾見新王白髮長 幾たびか見る 新王 白髮の長きを

(自注) 凡有功者鑄銅像像之、建諸通衢中、以為勸。如楠公・北白川親王・川村大將等、皆有像在禁城内。(凡そ功有る者 銅像を鑄て之れに像^みり、諸通衢^{かたど}の中に建てて、以て勸めと為す。楠公・北白川親王・川村大將等の如きは、皆な像の禁城内に在る有り。)

【日本語訳】

- 1 承露盤を支える銅の柱を鑄造できたので、建章宮に入っていくと
- 2 草木が鬱蒼と茂る宮殿には、功臣の肖像画が飾られていた
- 3 銅像はいつも宮殿の門の側近くに立って涙をこぼす
- 4 新しく即位したばかりの王が、やがては白髮の老人になっていくのを何度目にしたことだろうかと

(自注) 功績のあった者は銅像を鑄造してその姿に似せ、主要な道路の側に建てて、奨励とする。
楠木正成・北白川親王・川村海軍大將などは、いずれも銅像が皇城の中にある。

【押韻】「章」「蒼」「長」、下平七陽韻。

【語釈】

1 鑄得金莖入建章 2 功臣図像鬱蒼蒼

[金莖] 承露盤を支える銅の柱。漢・班固「西都賦」(『文選』巻一)に「抗仙掌以承露、擢双立之金莖。(仙掌を抗^あげて以て露を承け、双立するの金莖を擢^ぬく。))」とある。承露盤は次の「建章」語釈参照。

[建章] 漢の長安にあった宮殿の名。『三輔黄図』漢宮に「武帝太初元年、柏梁殿災。粵巫勇之曰、『粵俗、有火災即復大起屋、以厭勝之』。帝於是作建章宮、度為千門万戸。宮在未央宮西、長安城外。(武帝の太初元年、柏梁殿 災あり。粵巫 勇之 曰く、『粵の俗、火災有れば即ち復た

大いに屋を起こし、以て之れを厭勝^{えふしやう}す』と。帝 是に於いて建章宮を作り、度るに千門万戸^{はか た}為り。宮 未央宮の西、長安城の外に在り。)』とある。また、『漢書』郊祀志上に「其後又作柏梁・銅柱・承露僊人掌之属矣。(其の後 又た柏梁・銅柱・承露僊人掌^{せんになしやう}の属を作れり。)」とあり、顔師古注に『三輔故事』云『建章宮承露盤高二十丈、大七围、以銅為之、上有仙人掌承露、和玉屑飲之』。(『三輔故事』に云ふ『建章宮の承露盤 高さ二十丈、大いさ七围^{かいかい}、銅を以て之れを為り、上に仙人掌の露を承くる有り、玉屑と和して之れを飲む』と。))』とある。

[功臣図像] 歴代の王朝は功臣を顕彰するために功臣の肖像画を飾る高殿を建てた。唐の太宗の凌煙閣が特に有名。唐・劉肅『大唐新語』褒錫に「貞觀十七年、太宗図画太原倡義及秦府功臣趙公長孫無忌・河間王孝恭・蔡公杜如晦・鄭公魏徵・梁公房玄齡・申公高士廉・鄂公尉遲敬德・鄧公張亮・陳公侯君集・盧公程知節・永興公虞世南・渝公劉政会・莒公唐儉・英公李勣・胡公秦叔宝等二十四人於凌煙閣、太宗親為之贊、褚遂良題閣、閻立本画。(貞觀十七年、太宗 太原倡義^{ちやうぐわん}及び秦府の功臣 趙公長孫無忌・河間王孝恭・蔡公杜如晦^{じよくわい}・鄭公魏徵・梁公房玄齡・申公高士廉^{がく うつ ち}・鄂公尉遲敬德^{うん}・鄧公張亮・陳公侯君集・盧公程知節・永興公虞世南^ゆ・渝公劉政会^{きよ}・莒公唐儉・英公李勣・胡公秦叔宝等二十四人を凌煙閣に図画し、太宗 親^{みづか}ら之が贊を為り、褚遂良閣に題し、閻立本 画く。))』と。

[鬱蒼蒼] 草や木がこんもりと生い茂る様。曹植「贈白馬王彪」七章其二(『文選』卷二十四)に「太谷何寥廓、山樹鬱蒼蒼(太谷 何ぞ寥廓^{れうくわく}たる、山樹 鬱として蒼蒼たり)」と。

3 銅人老倚宮門泣 4 幾見新王白髮長

[銅人] 人の姿をかたどった銅像。ここは、『後漢書』方術伝・蓊子訓に「後人復於長安東霸城見之。与一老公共摩挲銅人、相謂曰、『適見鑄此、已近五百歳矣』。(後人 復た長安の東霸城に於いて之れに見る。一老公と共に銅人を摩挲し、相謂ひて曰く、『適たま此れを鑄るを見て、已に五百歳に近し』と。))』と見える故事を意識する。

[倚宮門] 皇城の門に寄り掛かるように側近くで見守る。「倚門」は『戦国策』齊策に「王孫賈年十五、事閔王。王出走、失王之处。其母曰、『女朝出而晩来、則吾倚門而望。女暮出而不還、則吾倚閭而望』。(王孫賈 年十五、閔王に事ふ。王 出で走り、王の处を失ふ。其の母 曰く、『女 朝に出でて晩^{なんち}に来たらば、則ち吾 門^{くれ}に倚りて望まん。女 暮れに出でて還らざれば、則ち 吾 閭^{りよ}に倚りて望まん』。))』と見える故事から子の帰宅を待ち望む親の思いをいうが、ここは見守るの意。「宮門」は貴人の住む宮殿の門。元稹「上陽白髮人」詩に「宮門一閉不復開、上陽花草青苔地(宮門 一たび閉ぢれば 復た開かず、上陽 花草 青苔の地)」と。

[幾見] 何回目にしたことだろうか。白居易「送毛仙翁」に「幾見桑海変、莫知龜鶴年(幾たびか見る 桑海の変ずるを、知る莫し 龜鶴の年を)」と。

(自注)

[通衢] 四方八方に通じる道路。陶潜「始作鎮軍參軍、經曲阿作」に「時来苟冥会、宛轡憩通衢(時 来たりて 苟しくも冥会し、轡^{たづな}を宛^まげて通衢^{つうく}に憩ふ)」と。

[楠公] 楠木正成（1294～1336）。その銅像は現在の千代田区皇居外苑にある。

[北白川親王] 北白川^{よしひさ}能久親王（1847～1895）。1895年（明治28）年、台湾征討近衛師団長として出征したが、現地でマラリアのために薨去。その銅像は近衛歩兵第一・第二連隊正門前にあったが、現在は千代田区北の丸公園内東京国立近代美術館工芸館(旧近衛師団司令部)横にある。

[川村大将] 川村^{すみよし}純義（1836～1904）、海軍大将。銅像は海軍省（現在千代田区霞が関）の前にあったが、現在は無い。

「東京雑事詩」七十三首其六十九

【本文及び書き下し】

- 1 芻醴^{すうれい}恩^{そうそう}恩^{りやうえい}奠^{てん}兩楹 芻醴 恩恩として 兩楹に奠し
2 私門礼楽自昭明 私門 礼楽 自ら昭明なり
3 可憐被髮伊川祭 憐れむべし 被髮 伊川の祭り
4 綿蕞^{めんせつ}難^め徵魯兩生 綿蕞 徴し難し 魯の兩生

（自注）俗頗尚儒、甚者有手写『論語』藏衣内、每与人言取以引用者。更為祠祀孔子、春秋享祭如礼。（俗 頗る儒を尚び、甚しきは手づから『論語』を写して衣内に^{をさ}藏め、人と言ふ毎に取りて以て引用する者有り。更に祠を為りて孔子を祀り、春秋に享祭すること礼の如し。）

【日本語訳】

- 1 そわそわと^{わら}藁の人形とあまざけを堂上の二本の柱の間にお供えして孔子を祭る
2 臣民の家でも礼儀と音楽とは自然と明らかだ
3 気の毒なことだ、伊川の人々はザンバラ髪で祭礼を行っていたけれども
4 儀式の練習をする場に魯の二人の儒者を招き寄せることができなかったのだろう

（自注）世間では儒学をかなり重んじており、『論語』を書き写して懷に収めておき、人とももの言う度に手にとって引用する者さえいる。さらには廟を作って孔子を祭り、春と秋には礼に従って祭祀を行う。

【押韻】「楹」「明」「生」、下平八庚韻。

【語釈】

1 芻醴恩恩奠兩楹 2 私門礼楽自昭明

[芻醴] まぐさとあまざけ。ここは「芻靈」の誤りかもしれない。「芻靈」は茅を束ねて作った人と馬の人形。『礼記』檀弓下に「塗車・芻靈、自古有之、明器之道也。（塗車・芻靈は、古へより之れ有り、明器の道なり。）」とあり、鄭玄注に「芻靈、束茅為人馬、謂之靈者、神之類。（芻靈は、茅を束ねて人馬を為り、之れを靈と謂ふは、神の類なればなり。）」とある。ここは原文通りに解しておく。

[恩恵] 匆匆に同じ。あわただしい様。

[奠兩楹]「奠」、酒食を供えてまつること。「兩楹」、堂の二本の柱の間、堂の中央。人君が座って政治を行う場所だった。『礼記』檀弓上に「予疇昔之夜夢坐奠於兩楹之間。夫明王不興。而天下其孰能宗予。予殆將死也。(予^{われ} 疇昔^{ちうせき}の夜 坐して兩楹の間に奠せらるるを夢みたり。夫れ明王は興らず。而して天下 其れ孰^{たれ}か能く予を宗^{たふと}ばん。予^{ほとん} 殆ど將に死せんとするなり。)」と孔子が自らの死を予知する場面が描かれる。後に「奠楹」は死を婉曲に表し、「兩楹」は棺を安置する場所、「兩楹夢」は死の予感を意味するようになるが、ここは孔子を祭る様子を描く。

[私門] 朝廷に対して人臣の家をいう。『後漢書』何進伝に「老臣得罪、当与新婦俱歸私門。(老臣 罪を得たれば、当に新婦と俱に私門に歸らん。)」と。

[礼楽] 礼儀と音楽。礼は社会の秩序を整え、楽は人の心をやわらげて国の統治に資するものとされた。『孝経』に「移風易俗莫善於楽、安上治民莫善於礼。(風を移し俗を易^かふるは楽よりく、上を安んじ民を治むるは礼より善きは莫し。)」と。

[昭明] 明らか。『尚書』堯典に「百姓昭明、協和万邦。(百姓 昭明、万邦を協和す。)」とあり、孔伝に「昭亦明也。」と。ここは盛んな様をいう。

3 可憐被髮伊川祭 4 綿蕞難徵魯兩生

[被髮伊川祭] 中華の文明に教化されていない人々の祭祀。「被髮」、髪をきちんと束ねていない様。「伊川」、伊水が流れる地域、河南省西部。『左伝』僖公二十二年に「初平王之東遷也、辛有適伊川、見被髮而祭於野者。曰、『不及百年、此其戎乎。其礼先亡矣』。(初め平王の東遷するや、辛有 伊川に適き、被髮して野に祭る者を見る。曰く、『百年に及ばずして、此れ其れ戎たらんか。其の礼 先づ亡べり』と。))」とあるのに拠る。

[綿蕞] 儀式の練習をするために、周囲になわを張り、茅の束を立てて目印にした場所。『史記』劉敬叔孫通列伝に、叔孫通は朝廷での儀礼を定めるために魯の儒者三十人を召し出し、「遂与所徵三十人西、及上左右為學者与其弟子百余人為綿蕞野外、習之月余。(遂に徵す所の三十人と西し、上の左右の学を為す者と其の弟子百余人と及^{とも}に為綿蕞を野外に為し、之れを習ふこと月余なり。))」とある。『集解』に如淳の説を引いて「置設縣索、為習肄处。蕞謂以茅翦樹地為纂位。(縣索^{めんさく}を置設して、習肄^きの处と為す。蕞は茅を以て翦りて地に樹^たてて纂位と為すを謂ふ。))」という。後に朝廷での儀礼を制定、改定することを「綿蕞」「綿蕞」というようになった。

[難徵魯兩生] 魯の儒者二人を召し出すことができなかった。上にも引いた『史記』劉敬叔孫通列伝に「於是叔孫通使徵魯諸生三十余人。魯有兩生不肯行、曰、『公所事者且十主、皆面諛以得親貴。今天下初定、死者未葬、傷者未起、又欲起礼楽。礼楽所由起、積德百年而後可興也。吾不忍為公所為。公所為不合古、吾不行。公往矣、無汙我』。叔孫通笑曰、『若真鄙儒也。不知時變』。

(是に於いて 叔孫通 魯の諸生三十余人を徵さしむ。魯に兩生の行くを肯^{かへん}ぜざる有りて、曰く、『公の事^{つか}ふる所の者は且^{まさ}に十主ならんとし、皆な面諛^{めんゆ}して以て親貴を得たり。今 天下 初めて定まり、死せる者は未だ葬^{はうむ}らず、傷つける者は未だ起^たたざるに、又た礼楽を起こさんと欲す。礼楽の由りて起こる所、徳を積むこと百年にして後 興るべきなり。吾 公の為す所を為す

に忍びず。公の為す所は古へに合はず、吾 行かず。公 往け、我を汗す無かれ』と。叔孫通笑ひて曰く、『若^{なんぢ}は真に鄙儒なり。時の変はりたるを知らず』と。』とある。

(自注)

〔春秋享祭〕祭祀。「史跡湯島聖堂, 公益財団法人斯文会のホームページ」伝統行事・孔子祭に「湯島聖堂では、毎年4月第4日曜日に孔子祭(釋奠)を行っております。釋奠(せきてん)とは古く中国で孔子をはじめとする先聖導師に、牛や羊などのいけにえを備えて祀ったことに始まり、現在の聖堂ではお酒、生鯉、野菜などをお供えして孔子とその学問を顕彰しております。孔子の大成した儒学を国家の思想的拠り所とし、幕府の儒臣林羅山が上野忍岡邸内の先聖殿で初めて釋奠を挙行したのは寛永10年ですが、湯島聖堂での第1回は創建直後の元禄4年です。以来毎年、春秋2回行われていましたが、明治維新の変革の中で途絶えてしまいました。明治40年に至り朝野の有志により孔子祭典会が創立され、その年4月、維新後はじめての釋奠が復活、以後大正8年の第13回まで孔子祭典会の主催により行われました。この間大正7年には、斯文会は前身の斯文学会を解散して財団法人となり、これを機に孔子祭典会その他の漢学関係団体を合併、釋奠も斯文会が継承することとなり、大正9年を第1回として以来絶えることのない、聖堂の伝統儀式として今日に至っています。」との紹介がある。

「東京雑事詩」七十三首其七十

【本文及び書き下し】

- 1 雪水湔裙入月時 雪水 裙^{あら}を湔ふ 入月の時
- 2 梅酸愁上繭黄眉 梅 酸く 愁ひ 繭^{けんくわう}黄の眉に上る
- 3 禁方試遍都無計 禁方 試みて 遍^{あまね}きも 都^{すべ}て計無く
- 4 私窃宮符召女医 私かに宮符^{ぬす}を窃みて 女医を召す

(自注) 医者診病必袒裼扱招。貞者羞之故、寧諱病勿肯藥、亦有就女医人者。或能尽言其隱。(医者 病^{たんせき}ひを診るに必ず袒裼せしめて扱招す。貞なる者 之れを羞づるが故に、寧ろ病^{だ かふ}ひを諱み藥^{がへん}を 肯ぜざるも、亦た女医人に就く者有り。或いは能く尽く其の隱したるを言ふ。)

【日本語訳】

- 1 いよいよ臨月を迎えると、雪融け水で裳裾を洗って、安産を願うけれども
- 2 梅の実が酸っぱくなると、美しい眉に愁いが現れる
- 3 門外不出の薬方もすべて試してみたが、いずれもどうしようもなかったので
- 4 こっそりと宮中出入りの割符を盗み、女医を招き寄せる

(自注) 医者は診察する時に必ず上着を脱がせて触診する。貞淑な者はそのことを羞じらい、病気を隠したり薬を飲むことを拒んだりするよりも、女医に診てもらう者もいる。中にはその隠し事をすべて言い当てる医者もいる。

【押韻】「時」「眉」「医」、上平四支韻。

【語釈】

1 雪水湔裙入月時 2 梅酸愁上繭黃眉

〔雪水〕雪融け水、また透明で清らかな水。

〔湔裙〕出産を促すために川で裳裾を洗うという習俗があった。『北史』竇泰伝に「初、泰母…、遂有娠。期而不産、大懼。有巫曰、『度河湔裙、産子必易』。（初め、泰の母…、遂に娠有り。期なるも産せず、大いに懼る。巫有りて曰く、『河を度りて裙を湔へ、子を産むこと必ず易からん』と。）」とある。

〔入月〕臨月になる。宋・孟元老『東京夢華録』卷五「育子」に「凡孕婦入月、於初一日、父母家以銀盆或鍍或綵画盆、盛粟一束、……。（凡そ孕婦 月に入れば、初一日に於いて、父母の家銀盆 或いは鍍 或いは綵画盆を以て、粟一束を盛る、……。）」と見える。

〔愁上～眉〕愁いが眉に現れる。韋莊「定西番」詞に「斜倚銀屏無語、閒愁上翠眉（銀の衝立に斜めに寄り掛かったまま何も言わないけれど、そこはかたない愁いが美しい眉に現れる）」と。

〔繭黃眉〕化粧を施した美しい眉。「繭眉」は美しい眉のこと。南朝梁・何遜「詠照鏡詩」（『玉台』卷五）に「聊為出繭眉、試染夭桃色（聊か出繭の眉を為し、試みに夭桃の色を染む）」とあり、蛾は繭から出て来るので蛾眉の意で用いる。「黃眉」も化粧を施した美しい眉。『隋書』五行志上に「朝士不得佩綬、婦人墨粧黃眉。（朝士は佩綬を得ず、婦人は墨粧黃眉なり。）」と。

3 禁方試遍都無計 4 私窃宮符召女医

〔禁方〕秘密の薬、またその処方。『史記』扁鵲倉公列伝に「我有禁方、年老、欲伝与公。公毋泄。（我に禁方有り、年 老いたれば、公に伝へんと欲す。公 泄らす母かれ。）」と。

〔試遍〕すべてを試してみる。明・朱橚『普濟方』化毒方に「時^{よう}有苦背瘍者七十余日、諸薬試遍不獲^{せんかう}痊愈效。（時に背の瘍に苦しむこと七十余日なる有り 諸薬 試遍するも痊愈效を獲ず。）」と。

〔無計〕すべがない、どうしようもない。杜甫「得弟消息二首」其二に「汝^{よう}儒婦無計、吾衰往末期（汝 儒にして 帰るに計無く、吾 衰へて 往くに未だ期あらず）」と。

〔宮符〕宮中の出入りに用いる割符。

〔女医〕女性の医者。『漢書』外戚伝上・孝宣許皇后に「女医淳于衍者、霍氏所愛、嘗入宮侍皇后疾。（女医 淳于衍は、霍氏の愛する所にして、嘗て宮に入りて皇后の疾ひに侍す。）」と。

（自注）

〔袒裼〕褻褻とも。上着を脱いで肌を露わにする。『礼記』内則に「不有敬事、不敢袒裼。（敬事有らざれば、敢て袒裼せず。）」と。

〔揆掐〕指先で揉んだりつねったりする。ここは医者による触診。あまり用例が見られない。

〔羞之故諱病勿肯薬〕病気を隠し薬を飲もうとしない。『南齊書』呂安国伝に「其人甚諱病、卿可作私意向。其若好差不復須扶人、依例入、幸勿牽勉。（其の人 甚だ病ひを諱めば、卿 私意向

を作すべし。其れ若し好く^よ 差^いえて復た人^{たす}を扶くるを須^{もち}みざれば、例に依りて入らしめ、幸ひに牽勉すること勿かれ。）」と。また、明・陸深「誥封宜人陳母黃氏墓誌銘」に「若婦人即病、或就医診視亦羞之故、雖得奇疾亦不好藥石。（若し婦人 即ち病み、或いは医に就きて診視せしむるも、亦た之れを羞づるが故に、奇疾を得たりと雖も亦た藥石を好まず。）」と。

「東京雜事詩」七十三首其七十一

【本文及び書き下し】

- 1 秋風昨夜散林皋 秋風 昨夜^{りんかう} 林皋を散らし
2 瓦乱青楓甲第高 瓦に青楓を乱して 甲第 高し
3 記得主家紅葉宴 記し得たり 主家 紅葉の宴
4 圀屏還繡碎金桃 圀屏 還た碎金と桃とを^{ぬいとり}繡するを

（自注）毎年秋、国王宴群臣及謁者於禁中、曰紅葉宴。民間亦倣之。楓葉紅時、遊賞者極衆。（毎年秋、国王 群臣及び謁者と於禁中に宴するを、紅葉の宴と曰ふ。民間も亦た之れに倣ふ。楓葉 紅なる時、遊賞する者 極めて衆し。）

【日本語訳】

- 1 昨夜、秋風が林や沢を吹き抜けて
2 高々とした邸宅の瓦に、カエデの葉が散り乱れている
3 公主様のお屋敷で、紅葉の宴が催された時
4 屏風にやはり菊と桃の花が刺繡されていたのを思い出す

（自注）毎年秋、天皇が群臣や取り次ぎの者と禁中で宴会を催すことを紅葉の宴という。民間でもそれを真似ている。カエデの葉が紅に染まる頃は、楽しみに出掛ける者が非常に多い。

【押韻】「皋」「高」「桃」、下平四豪韻。

【語釈】

1 秋風昨夜散林皋 2 瓦乱青楓甲第高

〔林皋〕山林や沼沢。『莊子』知北遊に「山林与、皋壤与、使我欣欣然而樂与。（山林か、皋^{かうじやう} 壤か、我をして欣欣然として楽しましむるかな。）」とあるのに拠る。宋・黃庭堅「送劉士彥赴福建轉運判官」に「官間得勝日、杖屨之林皋（官間に勝日を得て、杖屨^{ちやうく} 林皋^ゆに之く）」と。

〔青楓〕青々としたカエデ。ここは宮殿の庭をいう。三国魏・何晏「景福殿賦」（『文選』卷十一）に「芸若充庭、槐楓被宸。（芸若^{うんじやく} 庭に充ち、槐楓^み 宸^{くわいふう}を被ふ。）」と。

〔甲第〕大邸宅。漢・張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「北闕甲第、当道直啓。（北闕の甲第、道に当たりて直ちに啓く。）」とあり、また『史記』孝武本紀に「賜列侯甲第。（列侯に甲第を賜ふ。）」とあり、裴駰『集解』に引く『漢書音義』に「有甲乙第次、故曰第。（甲乙の第次有り、故に第と曰ふ。）」とある。

3 記得主家紅葉宴 4 圀屏還繡碎金桃

[記得] 思い出せる、まだ忘れないでいる。李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞湖五首」其三に「記得長安還欲笑、不知何處是西天（長安を記し得て 還た笑はんと欲するも、知らず何れの處か 是れ西天なるを）」と。

[主家] 公主の家。公主は天子の娘。南朝陳・徐陵「奉和詠舞詩」（『玉台』卷八）に「主家能教舞、城中巧且粧（主家 能く舞を教へ、城中 巧みに且粧す）」と。「東京雜事詩」其三十八にも「紅錦纏頭百琲珠、芝居爭愛主家奴（紅錦 頭に纏ひ 百琲の珠、芝居 争ひて愛づ 主家の奴）」と見えた。

[紅葉宴] 紅葉の頃に開かれる祝宴。宮中では1880（明治13）年から「観菊会」との名称で秋の園遊会が行われるようになり、1889（明治22）年から1928（昭和3）年までは赤坂離宮で開催されていた。

[圀屏] 折り畳むことのできる屏風。宋・毛滂「滿庭芳・夏曲」詞に「珊瑚連枕、雲母圀屏（二つ並んだ珊瑚の枕、辺りを囲む雲母の屏風）」と。

[碎金] 菊の花。宋・蘇軾「次韻子由所居六詠」其一に「堂後種秋菊、碎金收辟寒（堂後に秋菊を種ゑ、金を砕きて辟寒を収む）」とあるのに拠る。

「東京雜事詩」七十三首其七十二

【本文及び書き下し】

- 1 万軸牙籤数典墳 万軸 牙籤 典墳を数へ
- 2 秦宮図籍未全焚 秦宮の図籍 未だ全くは焚かれず
- 3 禁書別有河間本 禁書 別に河間の本有り
- 4 額署朱泥小璽文 額に署す 朱泥 小璽文

（自注）市中図書館、以上野為最。蔵書中頗多秘本。每本各有鈴記、不相凌亂。（市中の図書館、上野を以て最と為す。蔵書中 頗る秘本多し。每本 各おの鈴記有りて、相ひ凌亂せず。）

【日本語訳】

- 1 あまたある書物の中に中国古代の書物がまじっている
- 2 秦の王宮の書籍もすべてが焼き払われたわけではない。
- 3 珍しい書物では他に漢の河間献王が収集したものがあり
- 4 表紙には朱泥で小さな印章が捺してある

（自注）東京市内の図書館では、上野のものが最上とされる。蔵書にはかなり珍奇な本がある。それぞれに印が捺してあり、無秩序になることはない。

【押韻】「墳」「焚」「文」、上平十二文韻。

【語釈】

1 万軸牙籤数典墳 2 秦宮図籍未全焚

[万軸牙籤] 書籍が多いこと。「軸」は卷子本の体裁になっている書物。「牙籤」は書籍の表題を書き付けるための象牙でできた札。韓愈「送諸葛覺往随州読書」に「鄴侯家多書、挿架三万軸。一一懸牙籤、新若手未触（^{げふこう}鄴侯 家に書多く、^{はさ}架に挿む 三万軸。一一 牙籤を懸け、新しきこと 手の未だ触れざるが若し）」とあり、南唐・李煜「題『金樓子』後」詩に「牙籤万軸裏紅綃、王粲書同付火焼（牙籤 万軸 紅綃に裏まれ、王粲の書 ^{とも} 同に火に付して焼かる）」とある。

[典墳] 三墳五典の略。古代の書籍をいう。『淮南子』齊俗訓に「衣足以覆形、從典墳、虚循撓便身体、適行歩。（衣は以て形を^{おほ}覆ひ、典墳に従ひ、^{じゆんだう}循撓に虚しくし身体に便に、行歩に適するに足る。）」と。三墳五典は漢・張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「昔常恨三墳五典既泯、仰不睹炎帝帝魁之美。（昔 常に恨む 三墳五典 既に^{ほろ}泯び、仰いで炎帝帝魁^{ていくわい}の美^みを睹ざるを。）」とあり、薛綜注に「三墳、三皇之書也。五典、五帝之書也。」という。

[圖籍] 書籍。『韓非子』難三に「法者、編著之図籍、設之於官府、而布之於百姓者也。（法者、編著之図籍、設之於官府、而布之於百姓者也。）」と。

[未全焚] 項羽が秦の都である咸陽に火を放ったが、秦の宮殿に収められた書籍がすべて焼けてしまったのではない、と詠う。『史記』項羽本紀に「居数日、項羽引兵西屠咸陽、殺秦降王子嬰、燒秦宮室。火三月不滅。収其貨宝・婦女而東。（居ること数日、項羽 兵を引きゐて西し咸陽を屠^{ほふ}り、秦の降王 子嬰を殺し、秦の宮室を焼く。火 三月 滅えず。其の貨宝・婦女を収めて東す。）」と。或いは始皇帝による焚書が完全でなかったことをいうのかもしれない。

3 禁書別有河間本 4 額署朱泥小璽文

[禁書] 珍しい書物。『史記』扁鵲倉公列伝・太倉公淳于意に「臣意即避席再拜、謁受其脈書上下經・五色診・奇咳術・揆度陰陽外変・薬論・石神・接陰陽禁書。（臣意 即ち席を避けて再拜し、謁して其の脈書上下經・五色の診・奇咳の術・陰陽の外変^{きたく}を揆度する・薬論・石神・陰陽を接するの禁書を受く。）」と。

[河間本] 前漢の河間献王徳が収集した貴重な書物。『漢書』景十三王伝・河間献王徳に「河間献王徳以孝景前二年立、修学好古、実事求是。從民得善書、必為好写与之、留其真、加金帛賜以招之。繇是四方道術之人不遠千里、或有先祖旧書、多奉以奏献王者、故得書多、与漢朝等。…。献王所得書皆古文先秦旧書、『周官』『尚書』『礼』『礼記』『孟子』『老子』之属、皆經伝説記、七十子之徒所論。（河間献王徳は孝景前二年を以て立ち、学を修め古へを好み、事を實にして是を求む。民より善書を得れば、必ず為に好写して之れを与へ、其の真を留め、金帛を加へ賜ひて以て之れを招く。是れに繇^よりて四方の道術の人 千里を遠しとせず、或いは先祖の旧書有れば、奉じて以て献王に奏する者多く、故に書を得ること多く、漢朝と等し。…。献王の得る所の書は皆な古文の先秦の旧書、『周官』『尚書』『礼』『礼記』『孟子』『老子』の属にして、皆な經伝説記、七十子の徒の論ずる所なり。）」と。

〔額署〕「額」は高く目立つ箇所を広く指す。ここは書物の表紙、扉、内題などをいう。蔵書印は一般的にこれらの場所に捺される。

〔小璽文〕「璽」は印。秦以降は天子の印章に限定されるが、ここは河間献王の蔵書印の意。「文」は印面の文字のこと。

（自注）

〔鈴記〕明清の制、低級官吏が用いた印。

〔上野図書館〕1872（明治4）年、前身の書籍館が設立され、1897（明治30）年に帝国図書館として設置された。現在の国立国会図書館支部上野図書館。上野公園にあることから上野図書館の名で親しまれた。

「東京雑事詩」七十三首其七十三

【本文及び書き下し】

- 1 積雨空庭長緑苔 積雨 空庭 緑苔長く
- 2 玄関無事不軽開 玄関 事無きも 軽く開かず
- 3 声声鈴索花門暗 声声 鈴索 花門 暗く
- 4 羊角灯前駅伝来 羊角灯前 駅伝 来たる

（自注）原注闕

【日本語訳】

- 1 長雨のせいでうら寂れた庭に緑の苔が生え
- 2 これとってすることもないけれど、玄関は気軽には開かない
- 3 日も暮れて薄暗くなった置屋^{おきや}に呼び鈴の音が響く
- 4 郵便配達がカンテラを持ってやって来たのだろう

（自注）原注闕

【押韻】「苔」「開」「来」、上平十灰韻。

【語釈】

1 積雨空庭長緑苔 2 玄関無事不軽開

〔積雨〕長く続く雨。しばしば秋の長雨をいう。北周・庾信「対雨詩」に「繁雲猶暗嶺、積雨未開庭（繁雲 猶ほ嶺^{みね}に暗く、積雨 未だ庭を開かず）」と。

〔空庭〕うら寂しい庭。唐・劉長卿「客舍喜鄭山見寄」に「窮巷無人鳥雀閑、空庭新雨莓苔^{しづ}緑（窮巷 人無く 鳥雀 閑かに、空庭 新雨 莓苔^{ばいたい} 緑なり）」と。

〔玄関〕唐・岑参「丘中春臥寄王子」に「田中開白室、林下閑玄関（田中に白室を開き、林下に玄関を閉づ）」と。

[無事] これといってすることもない。韓愈「秋懷詩」十一首其三に「学堂日無事、驅馬適所願（学堂 日び事無く、馬を驅りて 願ふ所に適かん）」と。

3 声声鈴索花門暗 4 羊角灯前駢伝来

[鈴索] 鈴を繋いだ紐。唐の制度では翰林院などの官署は出入が厳しく、鈴索を引いて合図をしなければならなかった。唐・韓偓「雨後月中玉堂閑坐」詩に「夜久忽聞鈴索動、玉堂西畔響丁東（夜 久しくして 忽ち鈴索の動くを聞き、玉堂 西畔 響くこと丁東たり）」と。ここは呼び鈴をいうと解した。

[花門] 妓院をいう。『警世通言』卷三十三「喬彥傑一妾破家」に「全不管家中妻妾、只恋花門柳戸、逍遙快樂。（家の妻妾には目もくれず、ひたすら妓院を恋い慕い、快樂に耽っておりましただ。）」とあるように「花門柳戸」で妓院をいう。ここは、一篇の内容から置屋をいうと解した。遊女や芸妓と遊ぶ場所を揚屋あげやというのに対し、遊女、芸妓を置いておく家ということから、置屋と呼ぶようになった。

[羊角灯] 羊の角を削って半透明にした火屋ほやで覆った灯籠。『儒林外史』第十二回に「飲到月上時分、兩只船上点起五六十盞羊角灯、映着月色湖光、照耀如同白日。（月がのぼる頃まで飲んでいると、二艘の船には五、六十もの羊角灯がともされ、月の光と湖の光に映えて、白日のように輝いた。）」と。

[駢伝] 官吏の往来や公文書の搬送に利用される宿舎、またその制度。ここは郵便配達をいう。